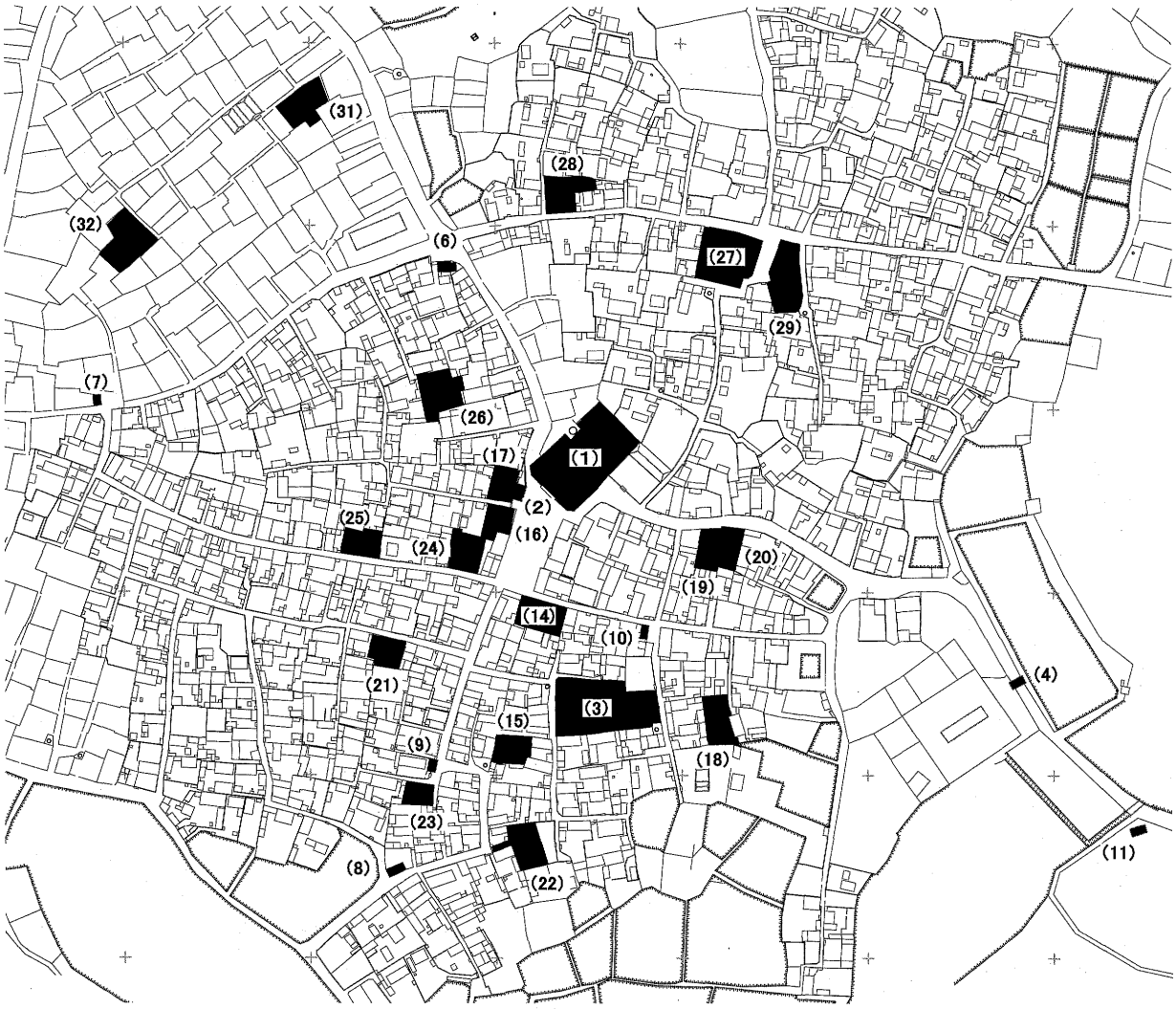
6　建造物各個解説

図６－24　個別物件位置図



モンフー集落
- (1)　ディン
- (2)　シックハウ
- (3)　教会
- (4)　門
- (5)　オン寺
- (6)　ディエム　サイ
- (7)　ディエム　ヘ
- (8)　ディエム　スイ
- (9)　ディエム　スイ
- (10)　ディエム　ディン
- (11)　クアン　ロ
- (12)　クアン　ロブオウ
- (13)　クアン　ドンナン
- (14)　ザン氏祀堂
- (15)　ハ氏祀堂
- (16)　ファン氏祀堂
- (17)　ファン・ケ・トアイ記念館
- (18)　Gian Du Thuan邸
- (19)　Ha Thi Dien邸
- (20)　Nguyen Van Vung邸
- (21)　Ha Van Lam邸
- (22)　Nguyen Van Hang邸
- (23)　Phan Van Truc邸
- (24)　Nguyen Tien Dong邸
- (25)　Ha Van Vinh邸
- (26)　Do Doan Duong邸

カムティン集落
- (27)　ディン
- (28)　Truong Van Quyen邸
- (29)　Cao Van Toan邸

ドンサン集落
- (30)　ミア寺
- (31)　Kieu Anh Ban邸
- (32)　Kieu Duc Thang邸

ドアイザップ集落
- (33)　ディン
- (34)　Phan Van Thanh邸
- (35)　Phan Van Toan邸

カムラム集落
- (36)　フンフン廟
- (37)　ゴクエン廟

（1）ディン　モンフー

モンフー集落（Ⅰ－77）

ディンはモンフー集落北側の最も高い位置にあり、村の共同管理となっている。周辺の村では、ディンの前には池があるのが一般的であるが、ここにはない。しかし、ディンの敷地の西側面（塀の外）に井戸があり、風水上はこの井戸が池の代わりを果たしているという。祭神は、この地方で神聖な山とあがめられているバーヴィ（Ba Vi）山の神である傘圓神である。旧暦の1月4日には、ここで開春祭がおこなわれる。

敷地はラテライト積の塀で囲われ、門が開く。門は、4本の柱で構成され、中央間には楣はなく、両脇間は楣で繋いで枠を組むが、門扉はない。いずれも煉瓦造もしくはラテライト造で、モルタルで塗り込められ、蛇腹等を表現し、柱の頂上には獅子の彫刻を飾る。門を入ると中庭があり、その東西に脇殿であるターマック（Ta Mac）が、正面にディン（Dinh）が配される。中庭は方形の煉瓦敷で、ところどころに細い柱を埋め込むような穴がしつらえられており、この穴は祭りの際の仮設テントを張るために使用するものという。

東西のターマックは、祭りの際に祭祀の準備場兼宴会場として使用したという。東のターマックにはその年を司る神が祀られ、西のターマックにはモンフー内のすべての氏族の祖先神が祀られている。

ターマックの構造形式および規模は東西とも同じで、桁行5間、梁間3間、切妻造、シングル瓦葺で、側背面の壁はラテライト積で、全体規模は東ターマックが桁行16.4m、梁間6.4m、西ターマックが桁行16.3m、梁間6.8mである。

柱間装置をもたない吹き放ちの建物で、それぞれ北端に祭壇を構える。現状では東西ターマックともに、中庭側の廂中央間3間分を土間敷とし、その他は板床張りとする。なお、柱に残るホゾ穴の痕跡から全面に床が張られていた時期および廂全体を土間とした時期もあったと復原できる。また、廂柱筋や妻柱筋では柱の床上部分の低い位置に、ダボ穴のような小さな仕口が認められる柱間もあり、部分的に手摺りもしくは腰板壁のような結界施設があったと考えられる。

構造は梁間1間の身舎と廂からなり、各柱は胴差で繋がれる。身舎では、小屋梁を柱に落とし込み、梁上で3段の水平梁を短い束で受ける架構とするが、彫刻等を施さず簡潔なつくりとしている。廂には斜梁をかけ、軒桁を廂柱から片持ちで出された斜梁先端で受ける。彫刻は、廂の斜梁の先端部分と、軒の斜梁の先端に簡単なものを施すのみである。なお、東西ともほぼ同形式であるが、彫刻を見る限りでは、東の方がやや装飾的で、その彫りも深い。

建築年代を示す史料はないが、架構および彫刻の様相から19世紀後期の建築と推定され、ディンの建築（1859年）に引き続いて建てられたと考えられる。

ディンは前殿にあたるティエンバイ（Tien bai）と後殿にあたるハウクン（Hau Cung）からなる。ティエンバイは、桁行7間、梁間5間、入母屋造、シングル瓦葺で、全体規模が桁行20.8m、梁間10.1mの壮大な建築である。ハウクンはティエンバイと3.3mの間隔を隔て、桁行3間、梁間3間、入母屋造、シングル瓦葺で、側背面にラテライト積の壁をもつ。ティエンバイとハウクンは棟を並行に並べ、取り合い部分を直角方向の棟で繋ぐ。

ティエンバイは桁行中央間の正面身舎・廂・孫廂部分を土間とする他は、高さ60cm程度の床を張る。聞き取りによれば、正面土間の前半部分をロンヌック（Lomg Nuck）と称し、ここは座ってはいけない空間であるという。土間を挟んで、東の床部分を東亭、西の床部分を西亭と称する。そして、ハウクンとの取り合い部分の床は、村の長老たちの場所という。身舎中央間には彩色を施した鏡天井が張られ、空中高い位置に祭壇が張り出し、その奥の廂中央間の上部を厨子空間としている。

現状では正面中央間以外の床部分の側まわりには、中敷居を入れ、窓枠が組まれているが、扉はない。

架構は身舎・廂・孫廂からなり、身舎は柱上で皿斗状の部材を介して小屋梁を架け、その下を柱に挿し込まれた籠彫状の持ち送りで受ける。小屋梁上では棟を2本の束と湾曲した梁で構成される鳥居型で受け、その左右に3段の水平梁を重ね、皿斗状の部材で受ける。廂では、身舎柱の途中に差し込まれた

水平の繋梁を廂柱上で皿斗状の部材を介して納め、繋梁上では、厚板を重ねて母屋桁を受け、板には華麗な彫刻を施している。孫廂では斜梁を架けて、孫廂柱にわなぎ込み、その先端を延ばして軒桁を受ける。斜梁の表面全面に緻密な彫刻を施す。

入母屋造であるので隅木がかかるが、隅木は真隅にはいり、隅木尻は身舎柱筋の端から2間目の中間納まる。すなわち、桁行方向では、架構的には、身舎柱のうち最端の柱が孫廂の扱いになり、端から2本目の柱が廂柱の扱いとなる。そして、端から2本目の柱と3本目の柱間に繋梁がかかり、この中間に束を立て、この束に隅木が納まるとともに、梁間方向にこの束を水平材で繋いで、ここに妻を立ち上げている。

ハウクンはティエンバイの背面に取りつく。ティエンバイに面する正面部分は、建物に直行する棟の架構を見せ、妻入建物の正面のように扱う。中央は下部を板扉を模したような板壁、上部を厨子の開口部として板戸6枚を並べる。両脇間は出入り口とし、両開きの板戸を構える。それぞれの内法上部と母屋桁間の三角形の空間は精緻な彫刻で埋め尽くされており、壮観な構えとなっている。

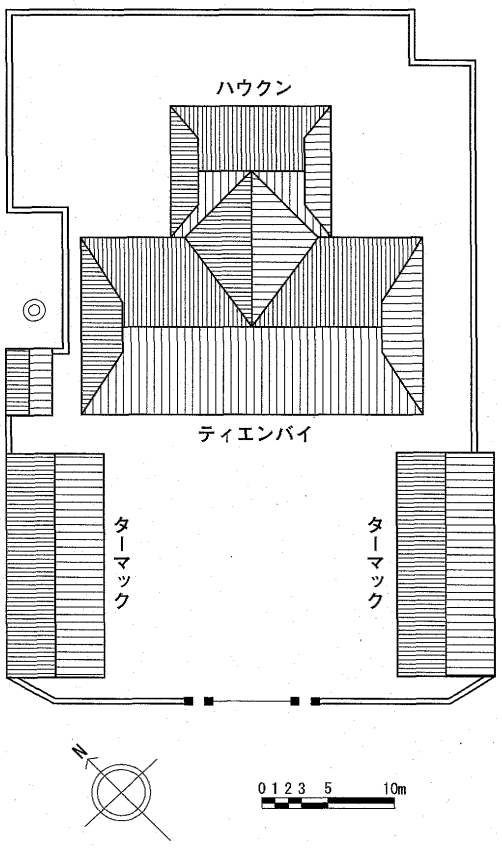


図6-25　配置図

内部は床敷で、1室とし、現在は主として祭器の収蔵場所となっている。正面中央の廂上部には、厨子が張り出す。側背面はラテライト積みの壁で囲まれ、一部に小さな明かり採りがあるのみで、ティエンバイとは対照的に薄暗い空間となっている。

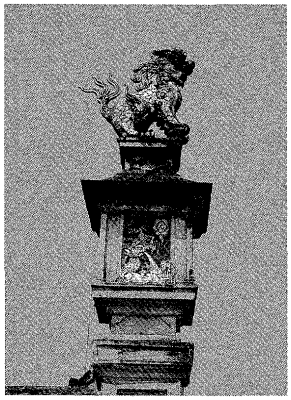
架構は、身舎と廂からなり、身舎では、小屋梁を身舎柱上部に落とし込み、その上に水平材を4段重ねて母屋桁を受ける。この水平材の母屋桁を受ける先端には、浮き彫り彫刻を施している。廂には斜梁をかける。隅木はティエンバイと同様に身舎柱柱筋まで引き込み、身舎端間に架かる小屋梁上の束で隅木尻を受け、ここに妻を立ち上げる。

ティエンバイ中央柱間の正柱間の東大梁下に「嗣徳己未冬」、西大梁下に「竪柱上梁吉」とあり、1859年に上棟したことがあきらかである。なお、ハウクンは16世紀から存在し、その後にティエンバイを建てたとの伝承もあるが、現状の建物を見る限りでは、様式的にはティエンバイとハウクンは類似しており、大きな年代差は感じられず、増築の痕跡も確認できなかった。したがって、16世紀という伝承は、創建にかかる伝承の可能性が高く、現在のティエンバイとハウクンは1859年に同時に建築されたものと考える。

建築年代が明確で今後のベトナム伝統建築研究の基準的な資料をなりうるもので、かつ彫刻・彩色を施したきわめて上質な建築であり、モンフー集落を象徴する建築といえる。(島田敏男)

図6-26　ディン　正面

図6-27　ディン　門



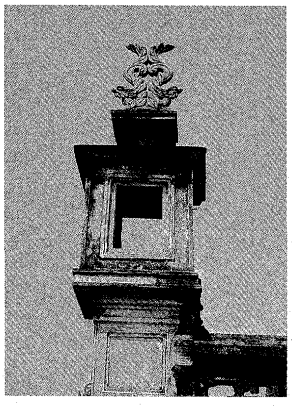


図6-28　ディン　門　柱頭飾り

図6-29　ディン　正面

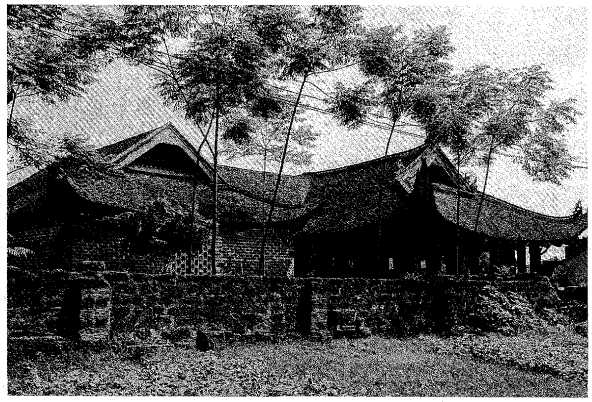


図6-30　ディン　背側面

図6-31　ディン　ティエンバイ側面

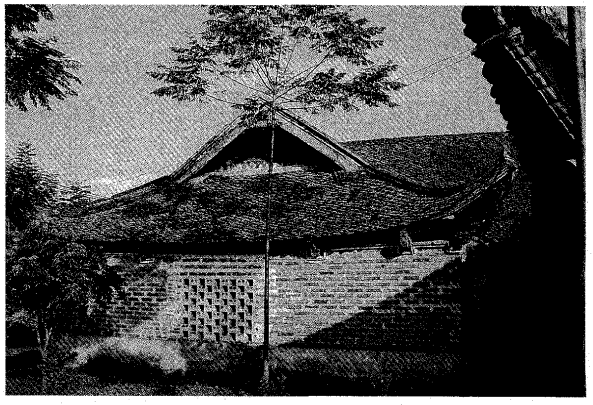


図6-32　ディン　ハウクン側面

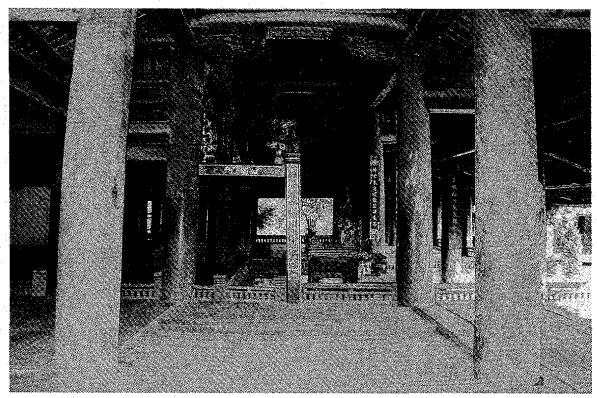


図6-33　ディン　ティエンバイ内部

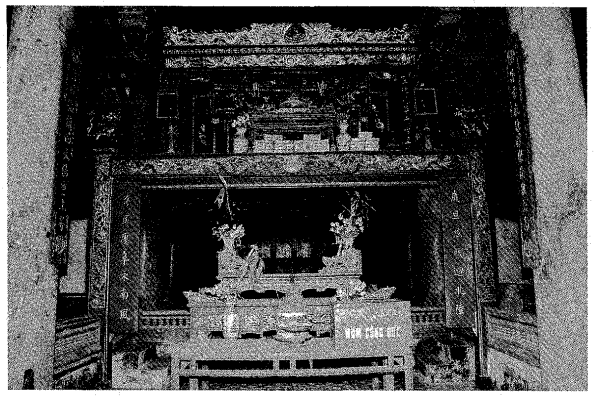


図6-34　ディン　ティエンバイ祭壇

図6-35　ディン　ティエンバイ架構

図6-36　ディン　ティエンバイ廂彫刻

図6-37　ディン　ティエンバイ軒先

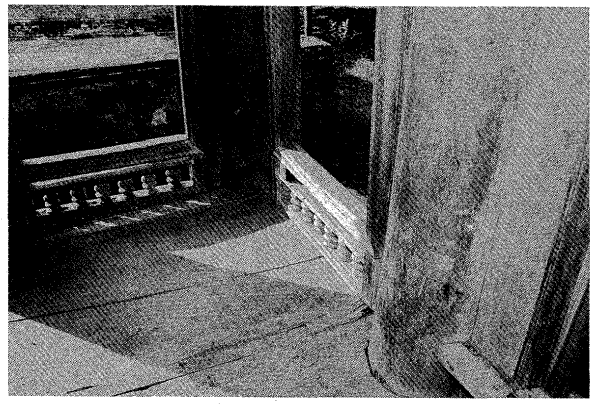


図6-38　ディン　ティエンバイ窓まわり

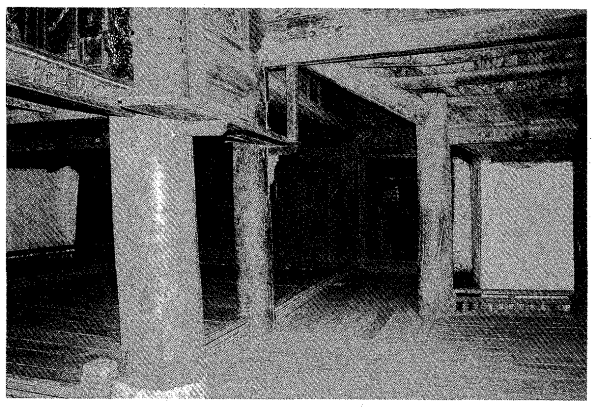


図6-39　ディン　ティエンバイからハウクンをみる

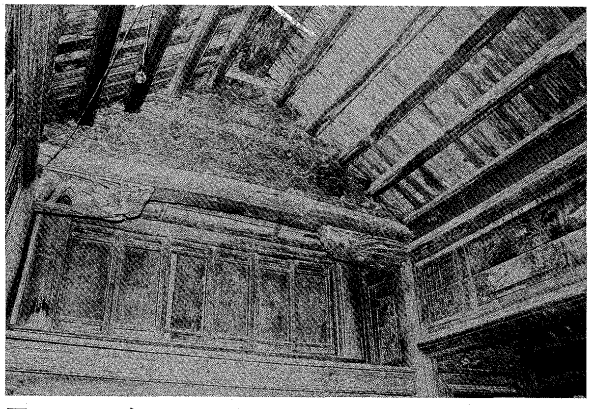


図6-40　ディン　ハウクン正面

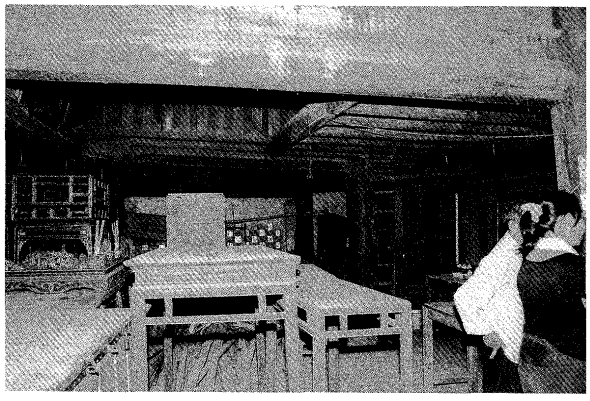


図6-41　ディン　ハウクン内部

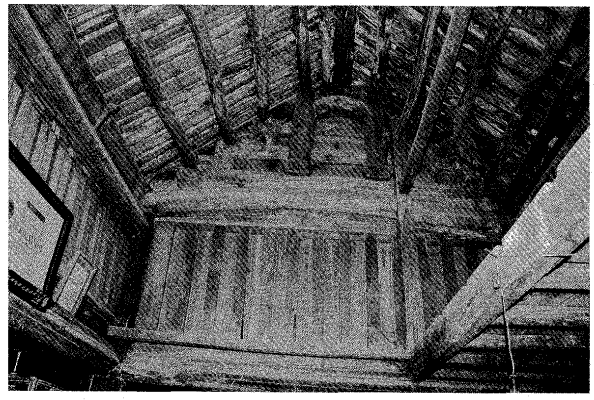


図6-42　ディン　ハウクン内部架構

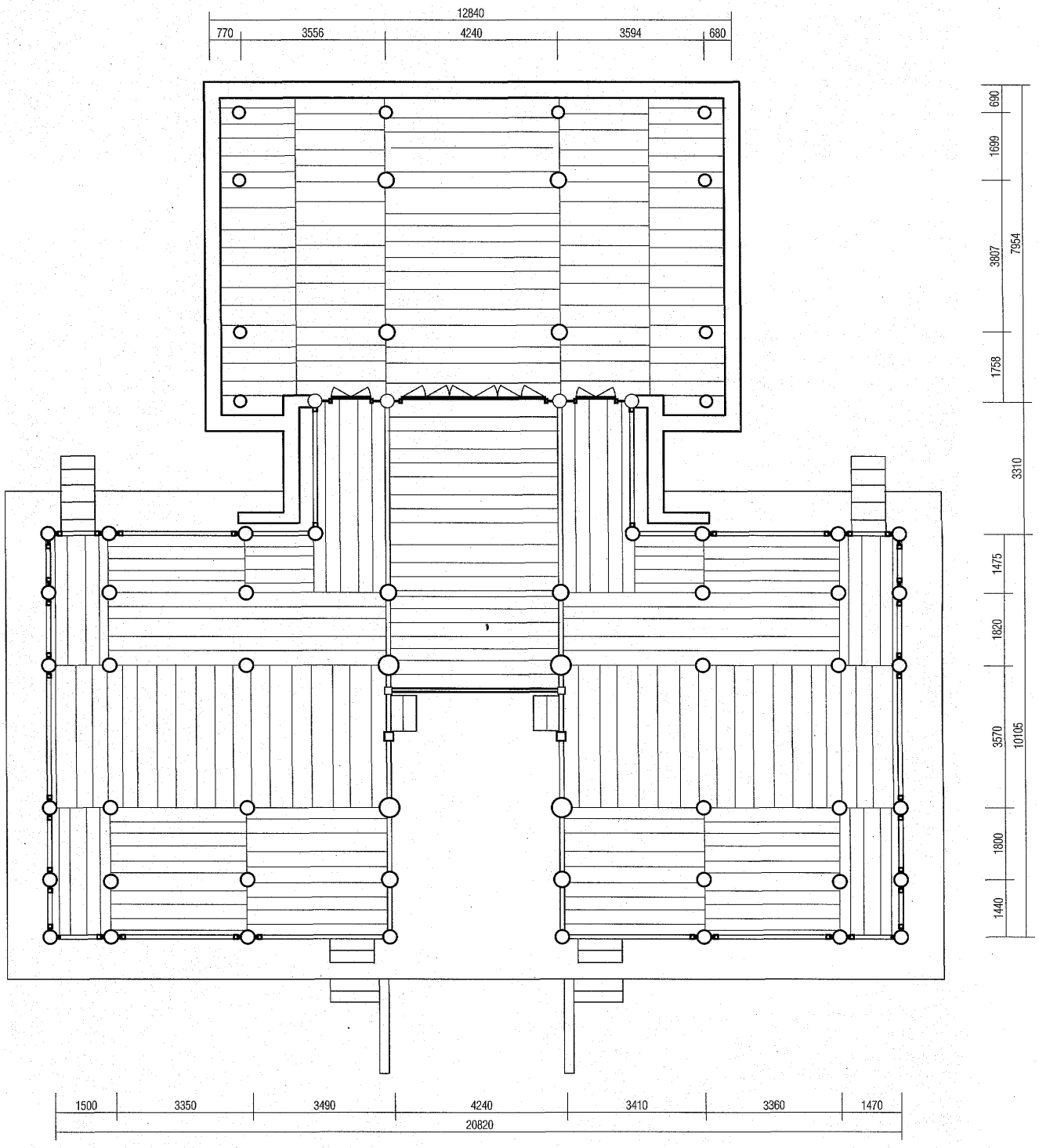


図６-43　ディン　平面図　1：150

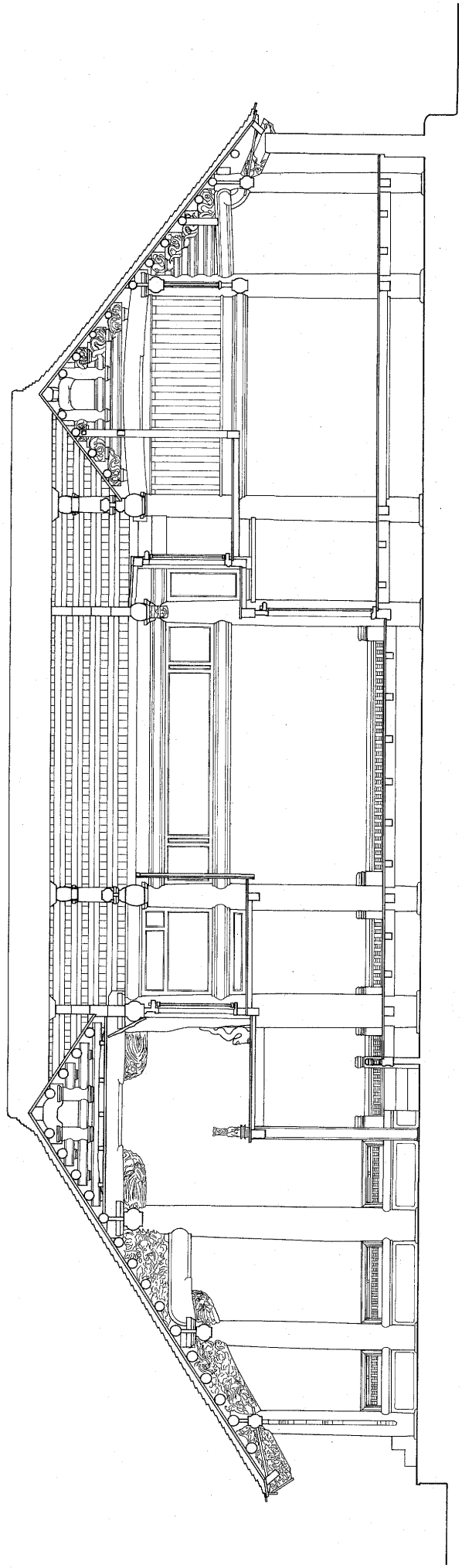


図6-44 ディン　断面図　1:100

図6-45　ディン　東ターマック　正面

図6-46　ディン　東ターマック　内部

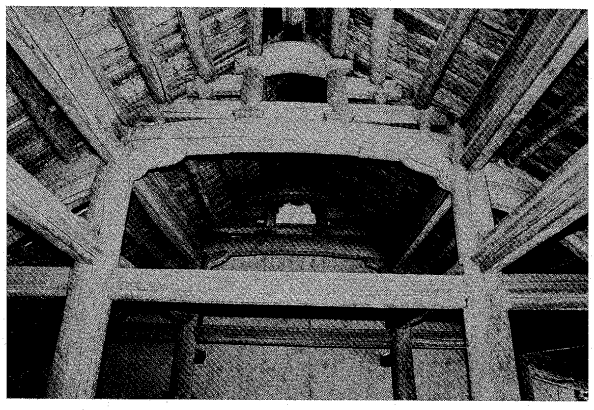


図6-47　ディン　東ターマック　架構

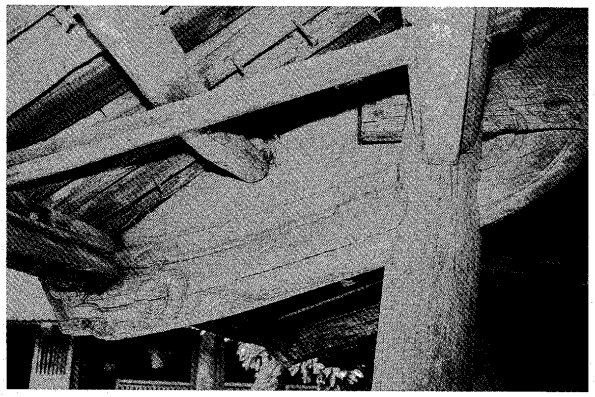


図6-48　ディン　東ターマック　軒先

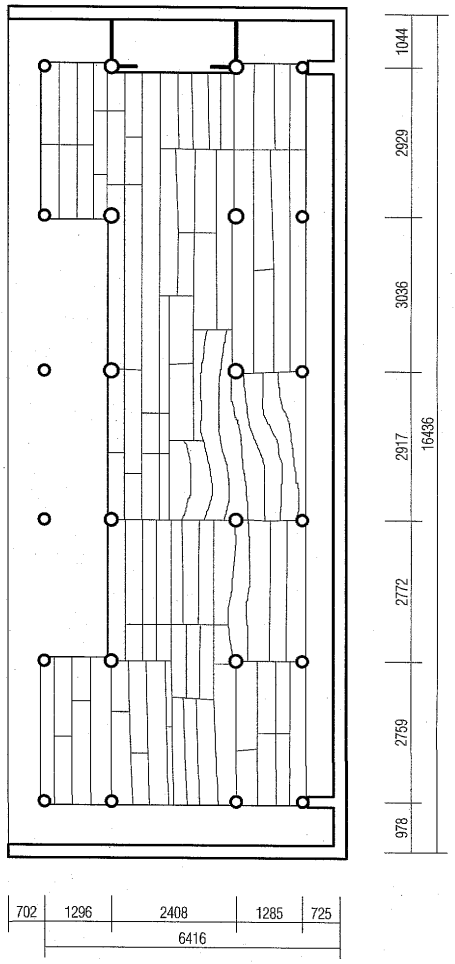


図6-49　ディン　東ターマック　平面図　1：150

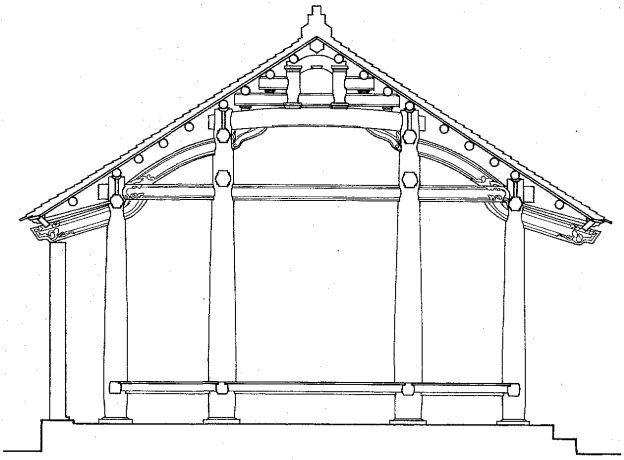


図6-50　ディン　東ターマック　断面図　1：100

図6-51　ディン　西ターマック　背面

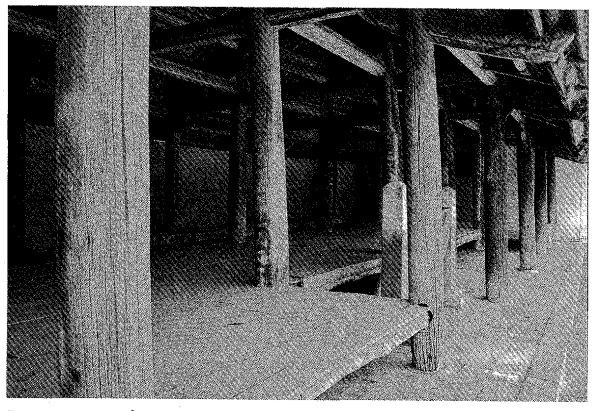


図6-52　ディン　西ターマック　内部

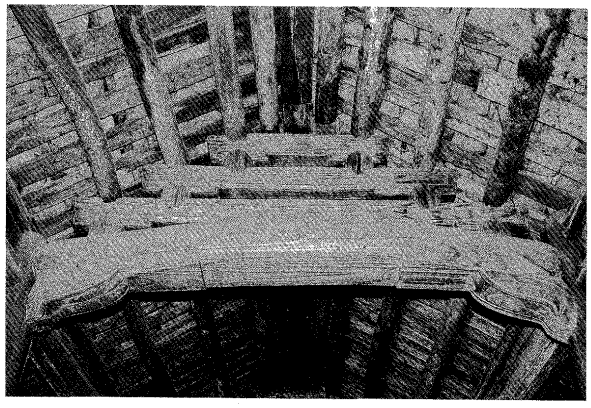


図6-53　ディン　西ターマック　身舎架構

図6-54　ディン　西ターマック　廂架構

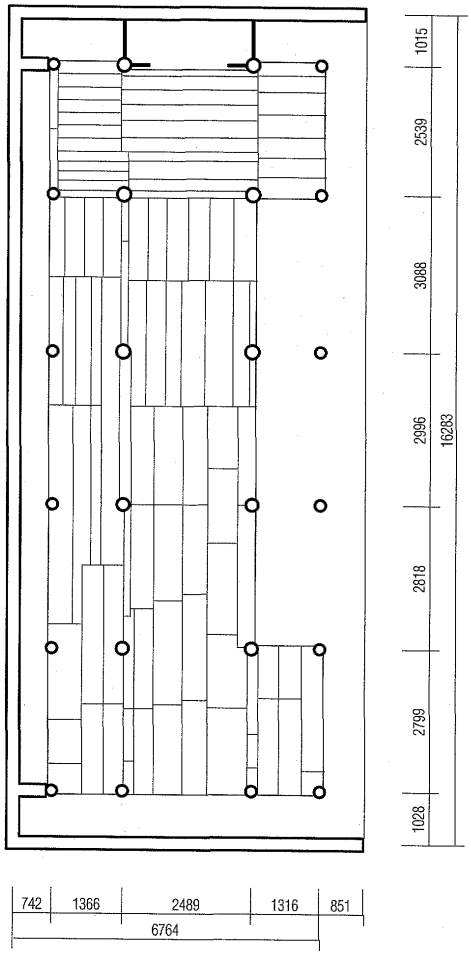


図6-55　ディン　西ターマック　平面図　1：150

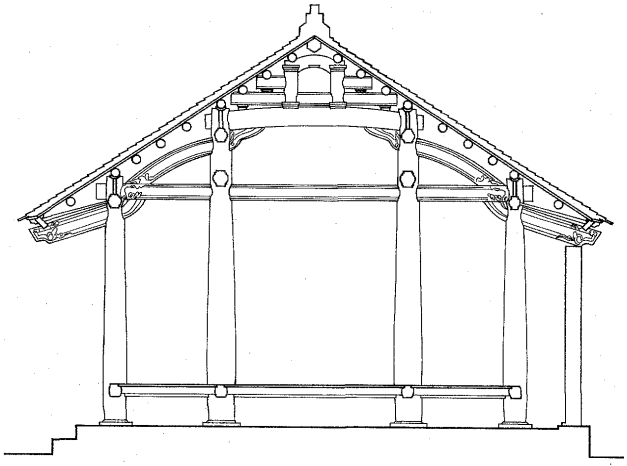


図6-56　ディン　西ターマック　断面図　1：100

（２）シックハウ

モンフー集落（Ⅲ－87）

シックハウは、ディン門前の西側に位置する。ディンと同じくモンフー集落が管理する建物である。現在は、ディンへのお供え物を売る場所となっている。かつては、ディンへ入る前にここでディンへのお供え物を揃えて、その確認をしていたと伝える。また、一時期は、村民はここに入れなくて、太鼓が架けられていて、様々な合図にも使ったと伝える。

シックハウは、桁行３間、梁間３間、入母屋造、シングル瓦葺で、側背面を壁で囲い、全体規模は桁行7.8m、梁間5.0mである。現状では、コンクリートの床に方形煉瓦が敷かれているが、かつては木造の床があったと伝え、柱には腰位置にホゾ穴が残っている。古老によれば、1967年以前は、壁は背面のみであったが、1967年に壁を四方に設置して、正面中央を戸口とし、内部は牢屋に使用したという。そして、1991年に正面の壁を撤去して現在のような形式にしたという。

柱はやや湾曲したものを使用しながらも、全体に破綻無く架構を組んでいる。構造は、身舎と廂からなり、身舎で柱頂部に小屋梁を落とし込み、小屋梁上に短い束で支えられた水平材を３段組む。廂は斜梁で母屋桁を受け、軒先は廂柱から片持ちの斜梁を架けて受ける。隅木は、身舎柱筋まで引き込み、身舎桁行方向の端間に架けられた梁上に束を立てて隅木尻を受け、束頭を水平梁でつないで、ここに妻架構を組む。大梁を受ける持ち送りに簡素な彫刻があるが、全体に装飾的な要素は少ない。

建築年代を示す資料はないが、17世紀の建築という伝承がある。1859年に建築されたディンに比べれば、架構・装飾ともに古式には見えるが、17世紀～18世紀の年代判定の基準となる事例が少なく、現段階では、17世紀までは遡り得ないとし、18世紀の建築と判断しておく。

ディン門前で広場に面して、景観上も重要な建物である。（島田敏男）

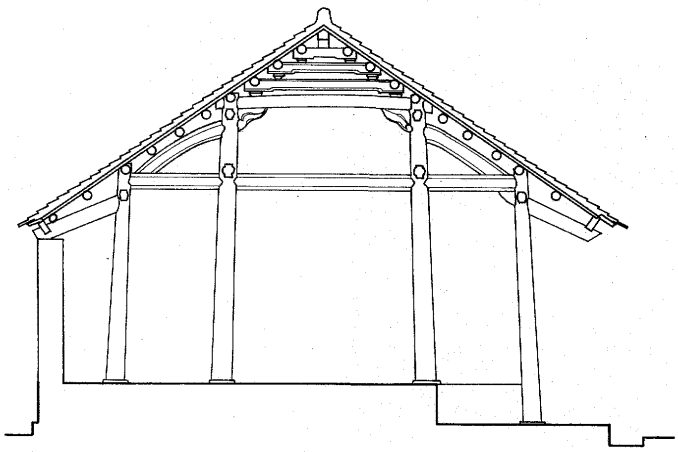


図６-57　シックハウ　断面図　１：75

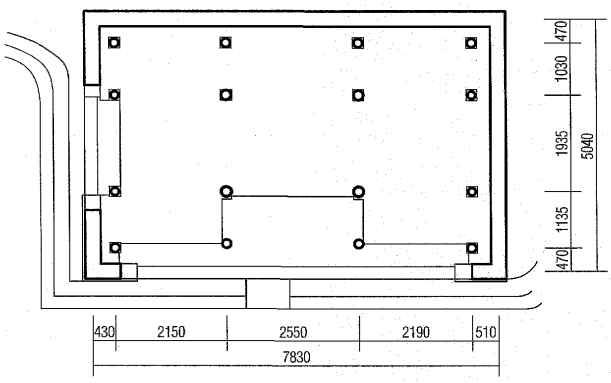


図６-58　シックハウ　平面図　１：150

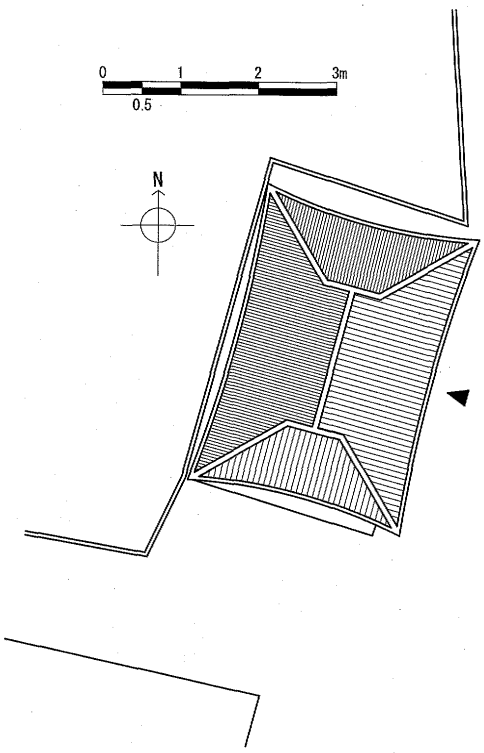


図6-59　シックハウ　配置図

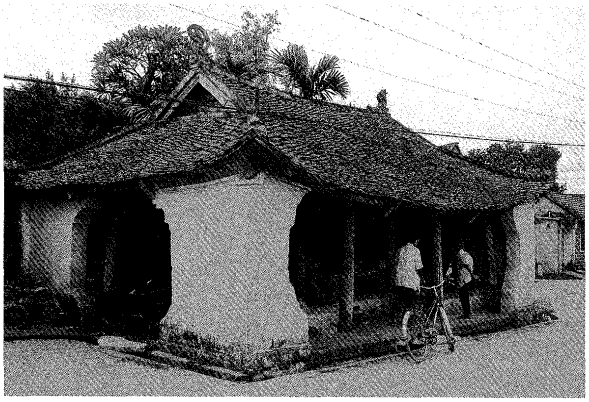


図6-60　シックハウ　正側面

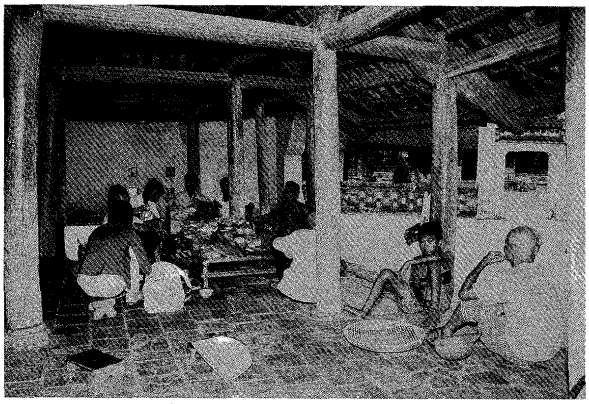


図6-61　シックハウ　内部

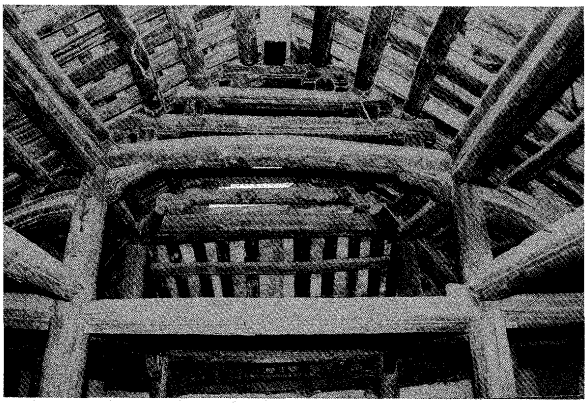


図6-62　シックハウ　架構

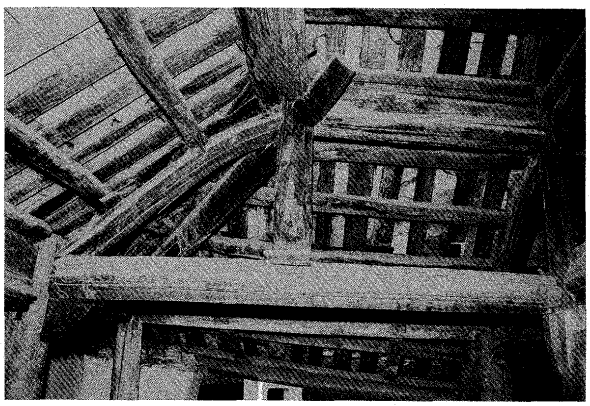


図6-63　シックハウ　隅架構

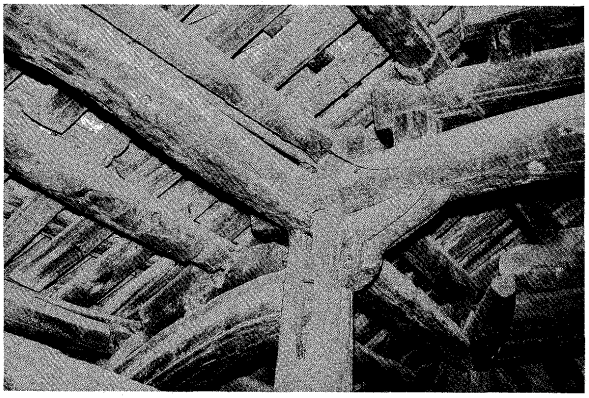


図6-64　シックハウ　架構詳細

図6-65　シックハウ　軒先

（３）教会

モンフー集落（Ｉ－081）

モンフー集落南東部に位置するキリスト教教会。教会の敷地は、東西が道に面する大きなもので、東側を正面とする。教会は敷地中央に配され、北側裏手には神父控所と管理人住居が置かれる。周囲は塀を巡らし、東側に正門、北側に脇門を構える。

聞き取りによると、1930年頃、キリスト教信者がこの敷地を提供し、木造の教会を建て、その後現在の鉄筋コンクリート造の教会に建て替えたという。現在の教会は、正面に掲げられる銘から1953年に建築されたことが知られ、設計監理はベトナム人神父、施工は集落外の業者を招き、工事には信者も参加したことが伝えられる。

教会の間口は10m、奥行は24.7mで、切妻造、フランス瓦葺とし、正面中央に鐘楼を立ち上げる。外壁はモルタル塗りとし、正面３間にそれぞれアーチを造り出して扉口を開く。両脇のアーチ弧下には鉄製の飾りを備え、側面５間の柱間には水平の小廂をつけた窓を開け、中央部を扉口とする。

鐘楼の２・３階間はコーニスで区切られ、２階と３階の正面には縦長窓を２つ並べて配す。大きなファイニアルが聳える頂部は、四方にバラストレイドを巡らせ、各柱上に十字架を配す。こうした鐘楼以外には装飾性は少なく、外観は柱形により垂直性が強調された簡素で整然とした姿をみせる。

教会内部は身廊と側廊から構成され、奥に祭壇が配される。床はタイル張りとし、身廊はボールト天井、側廊は水平梁を架け渡して漆喰塗りの天井を張る。窓上部に設けたハイサイドライトには色ガラスを用い、ここから室内に淡い光を取り入れる。二階は正面側上部のみに設け、十字架を掲げた聖歌壇とし、正面右手の階段から至る。

フランス植民地時代には100戸の信徒がいたといいうこの教会では、現在も朝夕に礼拝を行い、水曜の礼拝日には、多くの信者が集う。ドゥオンラム村に残る唯一の教会として貴重であり、鐘楼を頂く姿は遠くから眺めることができる。ドゥオンラム村のランドマークとして、集落景観の印象を決定づける重要な建造物である。（清永洋平）

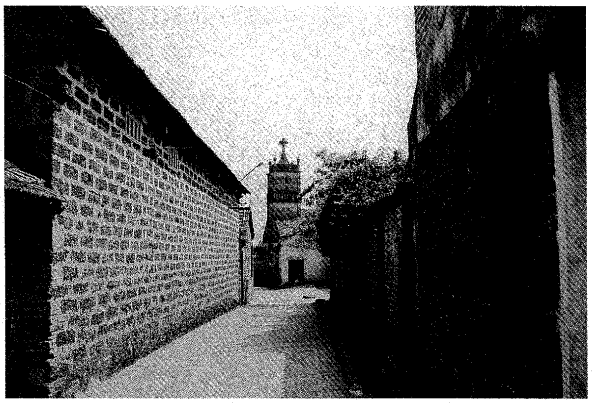


図６-66　教会　遠望

図６-67　教会　側面

図６-68　教会　正面

図６-69　教会　内部

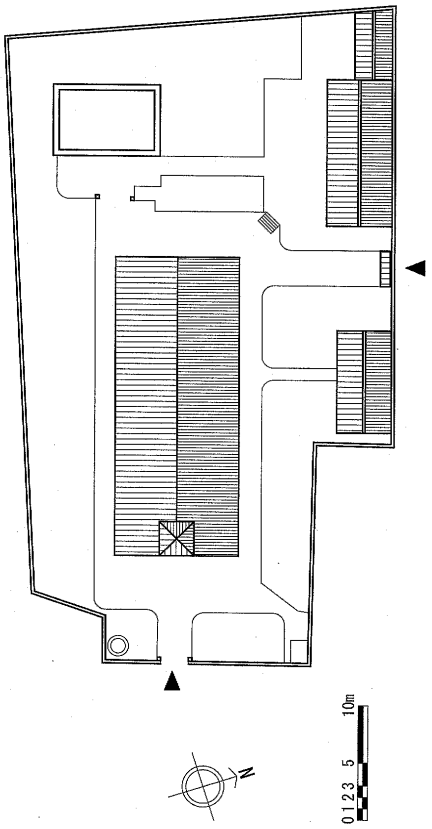


図6-70　教会　配置図

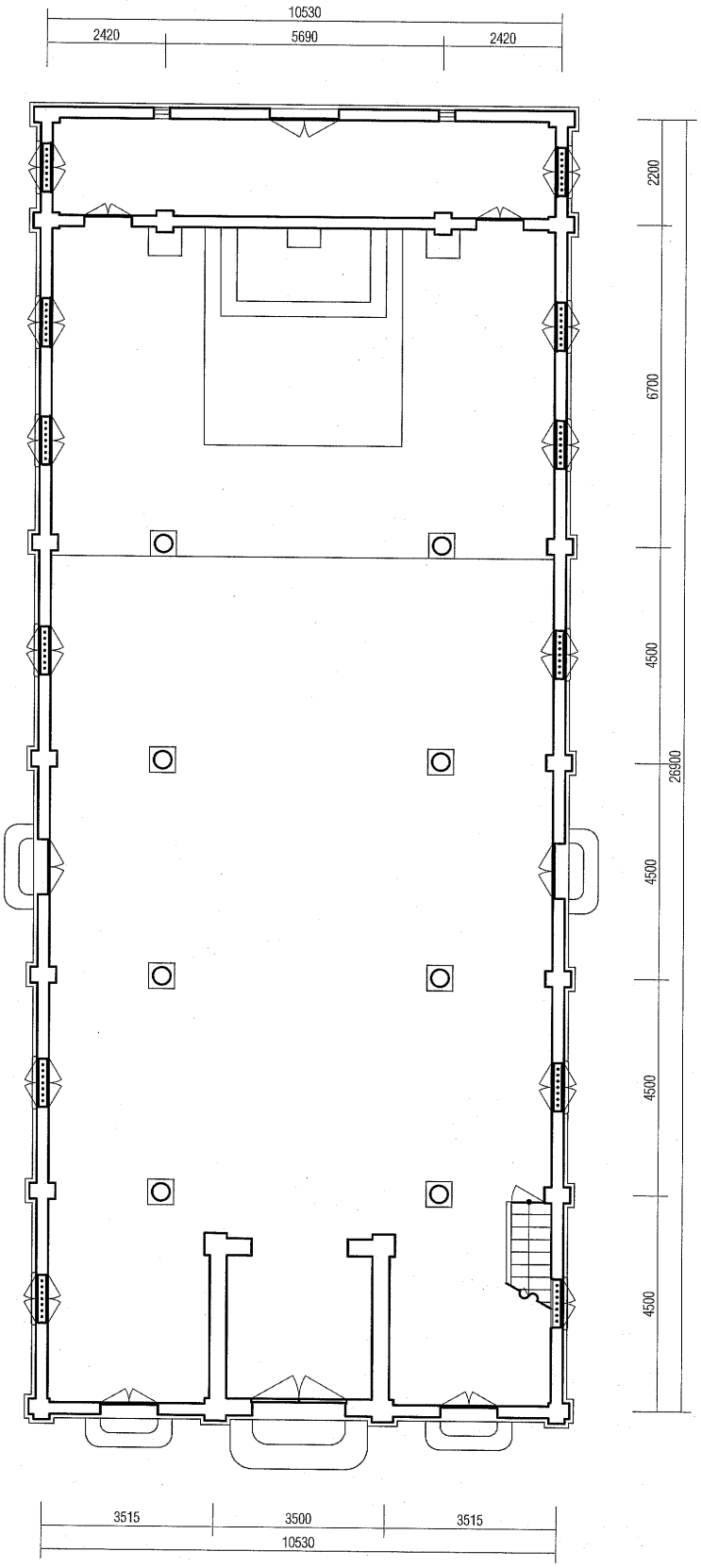


図6-71　教会　平面図　1：150

（４）門

モンフー集落

集落東側の入口に、大樹とともに位置する門。聞き取りによると、かつては朝早くに開け、夜８時頃に閉める慣習があったが、約60年前から常時開放したままになっているという。門の正面左手の大樹は、重要な門であることを示し、門の周辺に植わる低い樹木は馬繋ぎに用いられた。

門は、桁行１間、梁間３間、切妻造、シングル瓦葺で、ラテライトの妻壁が前後に突出し、全体規模は桁行4.9m、梁行6.7mである。床面を土間とし、各柱を礎石上に立てる。両側面にはラテライト積の壁を立ち上げ、表面はモルタルを塗って仕上げる。壁は控柱より外側に出て袖壁となり、壁両端と控柱前面に装飾を施した柱形をそれぞれ備える。

親柱は棟筋より正面側に立てられ、これに繋梁を通して正背面の控柱を繋ぐ。正面右手のみに残る門扉は内開きの板戸で、軸摺穴は下面のコンクリートと、親柱に渡された長押に穿つ。長押上部には格子をはめ、現在は切断されて失われているが、当初は蹴放があった。また床面はかつてバッチャン煉瓦を敷設していたという。

繋梁上部の小屋組は、束を２本立て、挿肘木と虹梁で構成し、軒先を斜梁で受ける典型的な形式を持つ。束下には皿斗を置き、丁寧なつくりである。

この門は、グエン朝期に建てられたと伝えられ、梁下には「巳卯孟夏□□月□□上梁大吉」と記されており、干支からは1819年もしくは1879年の建築と推定される。ただし、元号が記されないことを勘案すれば、1819年に建造された可能性が高い。

なお、聞き取りによると、屋根修理や屋根替えはなく、妻壁表面にモルタルを塗られたのは1953年で、門扉も同時期に造り替えたものであるという。

ドゥオンラム村に残る唯一の門として貴重であり、前面に立つ大樹とともに村の正面を構え、集落の景観上欠かせない遺構である。（清永洋平）

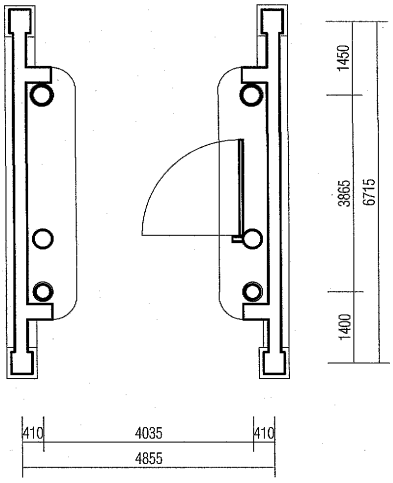


図６-72　門　平面図　１：150

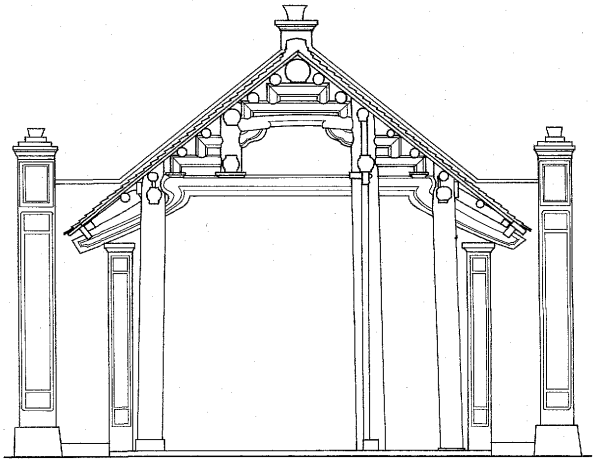


図６-73　門　断面図　１：100

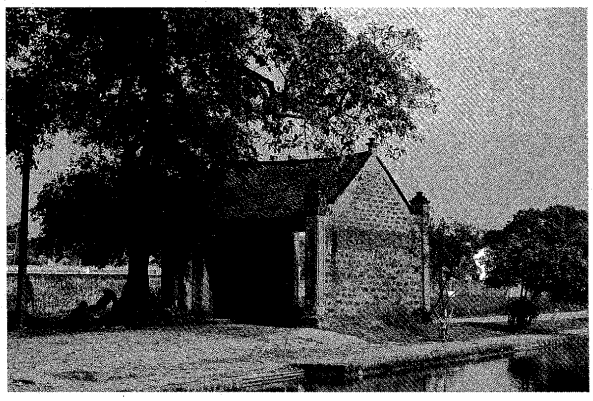


図６-74　門　正側面

図６-75　門　架構

（5）オン寺

モンフー集落

オン寺はモンフー集落の門から南へのびる道沿いに、田園に囲まれて位置する。かつてモンフーに住んでいた華僑が、帰国する際にこの寺を建てたと伝える。その帰国の際にここで相撲大会を開催したことから、その後も毎年旧暦３月３日の節句にはここで相撲大会が開催されるようになり、現在もこの日にはハタイ省各地から力自慢が集まって相撲大会が開催されている。なお、かつて、寺内には大きな鐘が置かれていたが、現在は盗難防止もあってディンに置かれている。

堂の南側はラテライト積の塀で囲まれた広場となっているが、塀は基礎部分を残すのみとなっている。40年位前までは60～70cmの高さのラテライト積の塀が取り囲んでいたという。

堂は桁行３間、梁間３間、切妻造、シングル瓦葺で、側背面にラテライト積の壁がめぐり、全体規模は桁行7.1m、梁間3.5mである。背面に棟を並行にする厨子部分が張り出し、厨子部分はラテライト積の壁体に簡略な切妻屋根をのせる。

柱間装置をもたない吹き放ちの建物で、内部は１室とする。現在はコンクリートで床がつくられているが、これは相撲の際の見物席になるという。なお、現状では、妻壁は足元にラテライトを積み、その上に煉瓦を積み、窓部分のみをラテライトとしているが、背面及び厨子部分がラテライトであることから、妻壁は中古の修理の時に、煉瓦に積み替えられたものと考えられる。架構は梁間３間で、身舎・廂の形式をとるが、桁行中央の２本の柱筋では、身舎柱を省略して全体に大梁をかけ、大梁上で身舎柱位置に束を立てて、柱のない空間を確保している。身舎には大梁を架け、大梁上で水平梁と短い束を門字型に組み、それを２段重ねている。廂部分では、片持ちの水平梁と束を卍くずし状に組み、軒先は廂柱から片持ちで持ち出した斜梁で受ける。

虹梁や束のつくりは丁寧で、軒梁先端に施された彫刻の様相から19世紀中頃の建築と思われる。梁下には「皆在丙寅年春王干日卯刻動土平基乙卯日酉時竪柱上梁吉」とある。干支にあう西暦は、1806年、1866年、1926年が考えられるが、1866年とみる。

小規模な建物ながら、集落外側の正面に位置し、景観上のおおきなポイントとなっている。また、民俗文化財としても貴重である。（島田敏男）

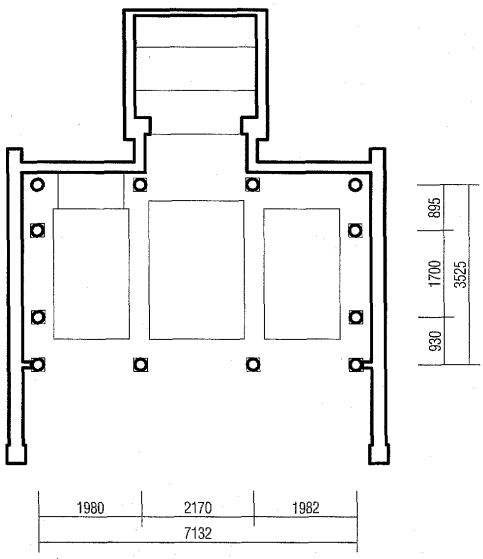


図６-76　オン寺　平面図　1：150

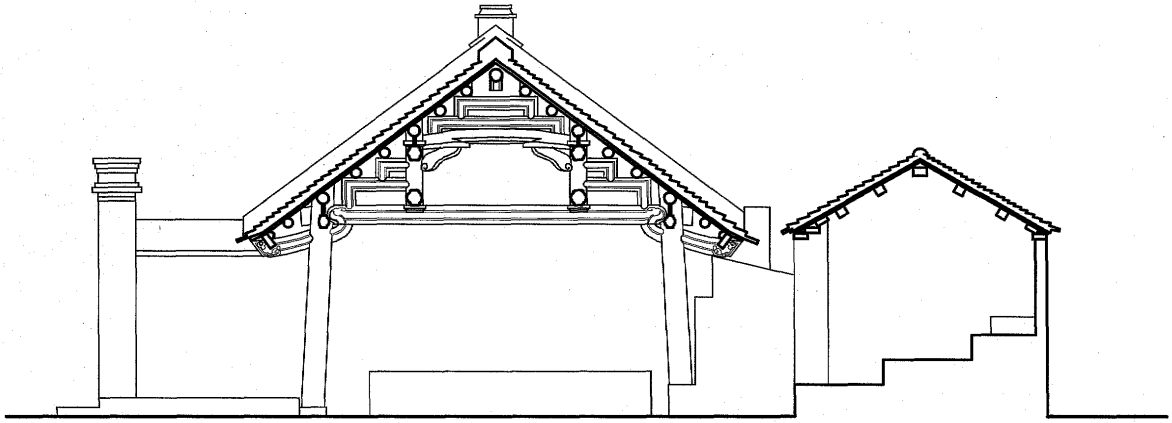


図６-77　オン寺　断面図　1：75

図6-78　オン寺　正側面

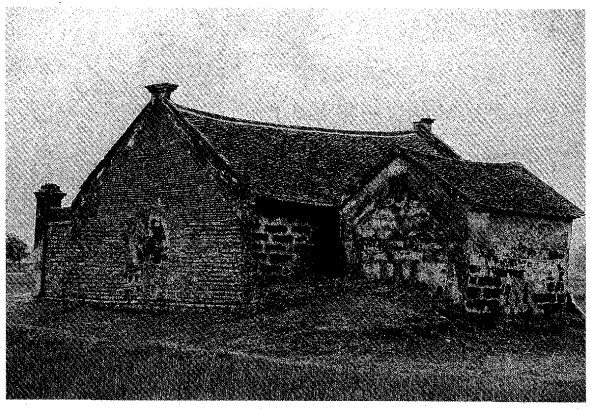


図6-79　オン寺　背側面

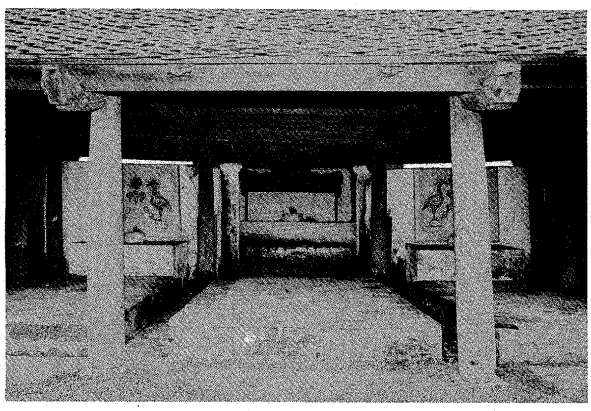


図6-80　オン寺　内部

図6-81　オン寺　内部

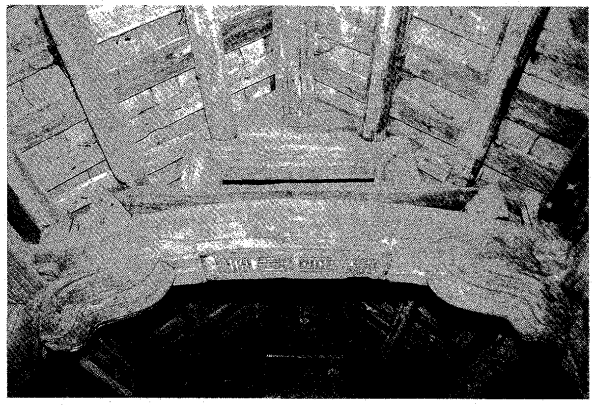


図6-82　オン寺　身舎架構

図6-83　オン寺　架構詳細

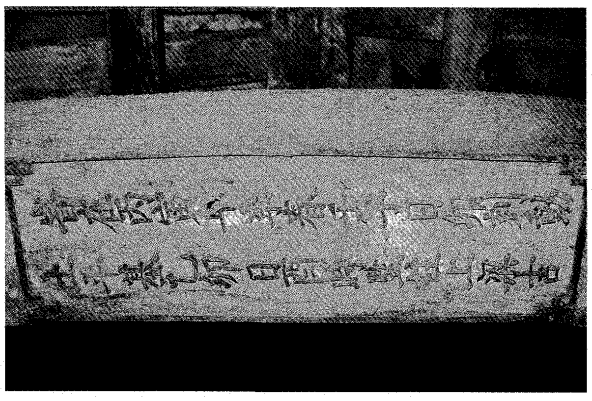


図6-84　オン寺　梁下銘

図6-85　オン寺　厨子部内部

（6）ディエム　サイ（Sai）

モンフー集落（Ⅳ－069）

モンフー集落の北に位置し、40年前まではモンフー集落とカムティン集落の門があった十字路に北面している。ディエムの東側は、ディエムの側壁を利用して、棟高を揃えた形で増築されたもので、現在は床屋を営業している。また、背後には3階建の建物が新築されているように、集落の中でも開発が進む一帯である。

桁行3間、梁間2間、切妻造、フランス瓦葺で、全体規模が桁行7.3m、梁間5.2mである。正面3間を開放とし柱間装置は設けない。両側面及び背面は、煉瓦積モルタル塗の壁でふさぐ。西側壁中央に開口があるが、現在は隣家の門によりふさがれている。

小規模な建築である為、他の民家のように身舎と廂の区別が明確ではないが、正面入側柱列を廂柱と考え、架構の解説を行う。身舎柱を省き煉瓦造モルタル塗の廂柱・孫廂柱を設ける。背面の廂柱は、壁体を厚くする形で柱を造り出している。この廂柱に大梁をのせ本来身舎柱のある位置に束を立てる。この束を小屋梁で繋ぎ、さらに棟位置から廂柱まで続く叉首を落としこみ母屋桁をうける。廂柱と孫廂柱間は繋梁を渡し、梁の小口及び垂木小口に鼻隠を取り付ける。叉首は廂柱位置で継いで、尻を繋梁の上にのせる。合掌の拝み下端には飾り彫刻が取り付く。側壁が立ち上がる形で、うだつのように降棟が立ち上がる。道路レベルより3段高い位置を床面とし、煉瓦敷で礎石は使用しない。内部背面中央には漆喰で装飾された祭壇をおいている。

聞き取りによると、以前は床を張った木造のディエムがあったが、これが1970年に壊れたため、1999年に現在の建物を再建したという。

近代の簡略な架構形式の新しい建物であるが、モンフー集落の北に位置しており、村の構成を示す意味でも、景観上重要な位置にある。かつては、この道沿いにモンフー集落の北門があったが、40年前に取り壊されたという。（中村文美）

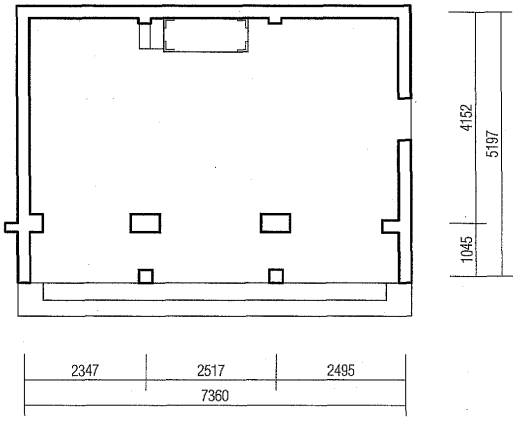


図6-86　ディエム　サイ　平面図　1：150

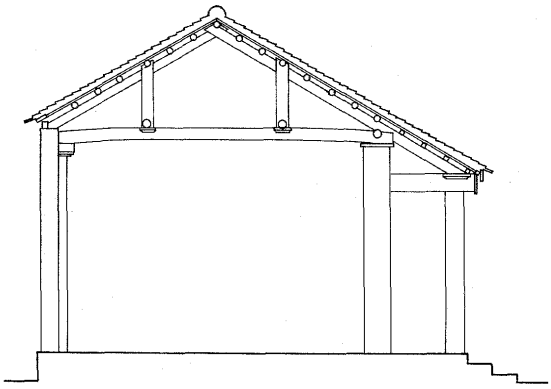


図6-87　ディエム　サイ　断面図　1：100

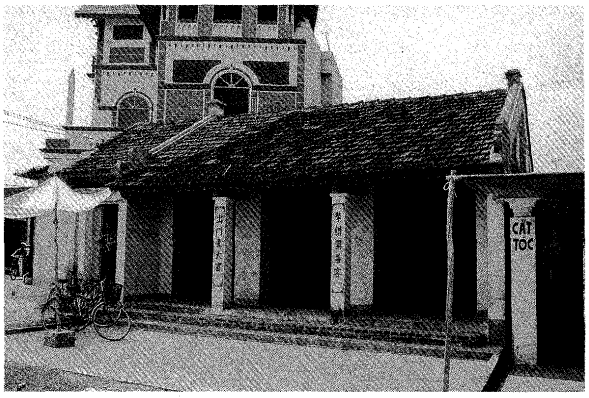


図6-88　ディエム　サイ　正面

図6-89　ディエム　サイ　内部

（７）ディエム　へ（He）

モンフー集落

モンフー集落の西北の、モンフー集落とドアイザップ集落の境界付近に位置している。建物前には空地を設け、東西に延びる道路に直交している。聞き取りによると、1956年頃までディエムから西に少し離れた場所に門があったという。

桁行３間、梁間１間、切妻造、フランス瓦葺で、全体規模は桁行4.3m、梁間3.9mである。正面３間を開放とし柱間装置は設けない。両側面及び背面は、煉瓦積モルタル塗の壁でふさぐ。両側壁中央にはアーチ型の開口がある。

架構は、廂柱を省き、正面に煉瓦積モルタル塗の側柱を設ける。小屋組は、ディエムサイに似ており、大梁上の束に叉首を落としこんだ合掌型の架構とし、母屋桁に丸竹を、垂木と小舞に割竹を使用し、叉首尻は軒先まで延び、垂木と共に鼻隠を取り付ける。叉首上の母屋桁間は幕板で塞いでいる。床面は煉瓦敷で礎石は使用しない。内部背面中央には祭壇をおく。側壁の位置で、降棟と棟が立ち上がる。

棟木下端に「1996」と銘があり、小屋梁下端に２箇所「越南共和吉」「丙子年春造」とあることから、建築年代は1996年とわかる。聞き取りによると、この敷地にあった前身の建物は木造床張りであったが、1976年に壊れて、その後空地となっていた。その後、部材を転用して建築し食料倉庫として使っていた。ドザイアップ集落にはその屋根部材を使用した建物が残っている。

簡素な形式の新しいディエムであるが、この一帯はラテライトの壁が比較的良く残り、その中に位置するディエムとして重要である。（中村文美）

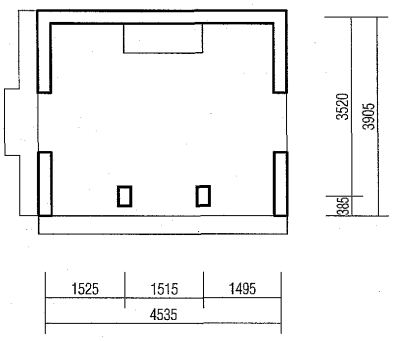


図６-90　ディエム　へ　平面図　１：150

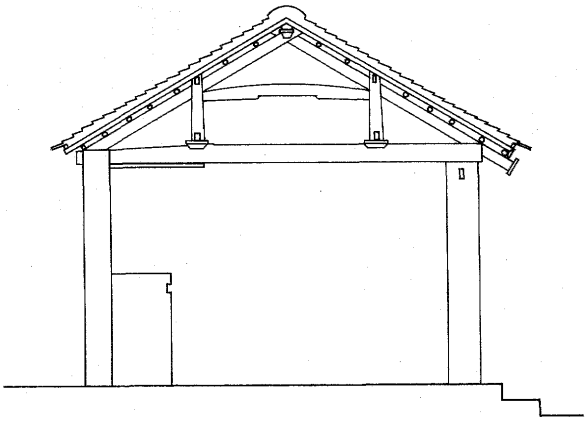


図６-91　ディエム　へ　断面図　１：75

図６-92　ディエム　へ　正側面

図６-93　ディエム　へ　内部

（8）ディエム　スイ（Sui）

モンフー集落（Ⅱ－122）

モンフー集落の南に位置し、池の北側に東面して建つ。かつては門がディエム前の池沿いにあり、このディエムは門を守る人の詰め所で防衛上重要な建物であった。

桁行３間、梁間１間、切妻造、シングル瓦葺で軒先のみフランス瓦を用いている。全体規模は桁行9.7m、梁間4.3mである。正面３間と、池方向の南側壁中央に半間ずつの開口を設け、柱間装置はない。南側面壁は煉瓦積モルタル塗で、北側面壁と軒先位置にくる背面壁は、ラテライト積モルタル塗。背面壁を厚くする形で柱を設ける。東側面半間分には木製建具を構える祭壇が取り付いている。床面は煉瓦敷で、祭壇前の床は一段高くなっている。

正背面とも側柱は木造の柱が残っているが、正面の柱は1964～1965年頃に前面煉瓦積を設置した際に、塗り込められたものである。かつては木造の床があったが、1956年に取り除いたと伝え、背面の側柱には、腰高にホゾ穴の痕跡がみられる。1956年の改修前は、正面全面開放、側面の開口はアーチ型であったと考えられ、南側側面の煉瓦積モルタル塗は後世の改修である。小屋架構は、大梁の上に棟束と湾曲した斜梁を立て、棟束下には斗をおく。正面の軒は、海老状の斜梁で軒桁を受け、斜梁の上は幕板で塞ぐ。梁・叉首には丁寧な面取りがあり、斜梁の尻には雲形の彫刻が施されている。

年代判定は難しいが、整った形式、材料よりモンフーのディンが建築された年代と同時期の19世紀中頃と推定される。

このディエムは、木製建具の整った祭壇を残す唯一の建物として貴重である。架構も、正統的形式であり小規模建築の場合の構造として評価できる。また、かつて床張りであった点も注目される。昔は門を守る人がここで寝泊りしていたので床が必要であり、独立後は門を守る人が必要なくなり、維持も大変であるので土間敷へと変化した。他のディエムも昔は床張りであったことが偲ばれる。（中村文美）

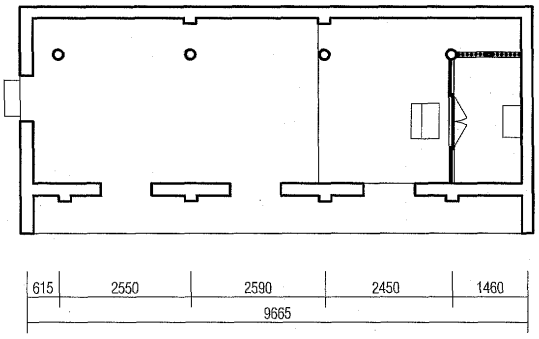


図６-94　ディエム　スイ　平面図　1：150

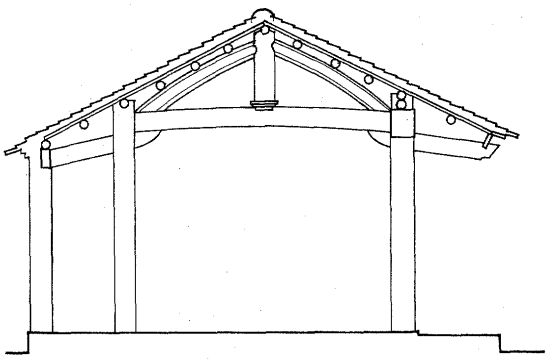


図６-95　ディエム　スイ　断面図　1：75

図６-96　ディエム　スイ　正側面

図６-97　ディエム　スイ　内部

（９）ディエム　スイ（Sui）

モンフー集落（Ⅱ－125）

モンフー集落の中央、道の突き当たりに位置する。桁行３間、梁間２間、切妻造、シングル瓦葺で、軒先のみフランス瓦を用いている。全体規模は桁行6.4m、梁間4.2mである。正面を開放とし、両側面と背面は煉瓦積モルタル塗の壁で囲っている。床面を煉瓦敷とし、祭壇は設けない。

本来は、身舎柱、廂柱とも木製の円柱であるが、前面の柱は煉瓦積モルタルで塗り込められている。架構は、身舎柱に廂に延びる斜梁と大梁を落し込み、さらに母屋桁を頂部におく。大梁の上に束と挿肘木と小屋梁を組み合わせて構成し、棟木を支持する。両妻小屋の架構は、もう一方のスイのディエムと同様で棟束と斜梁からなる。廂の斜梁上は幕板で塞ぐ。廂柱に母屋桁と面戸板を落し込み、茅負内側で野地板兼垂木を納める。

建築年代は、小屋梁下端の銘「咸宜酉春」より1885年と判断できる。聞き取りによると、1964年に木造柱を煉瓦造に替え、同時に屋根替と、周囲の壁体改修を行った。この改修前から木造の廂柱があり、身舎前面は開放されていた。しかし、廂の材は全て当初材ではないこと及び身舎柱の痕跡から、当初は廂がなく身舎柱位置で仕切り両脇間に壁もしくは建具が入り、中央間のみ開放であったかと推測される。また、かつては床張りであったという。

このディエムは、角地に建ち、アイストップとして重要な位置にある。また、年代は梁下銘から明確であり、このような小規模建物の年代判定の指標となり得る。装飾が少なく簡素なつくりであるが、廂の斜梁や、束と挿肘木により構成される形式、棟束と斜梁で棟を支持する形式等、バリエーションのある小屋組を持つ。（中村文美）

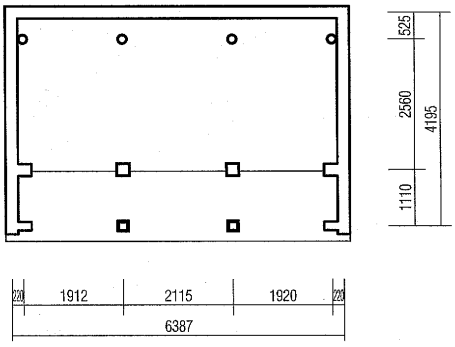


図６-98　ディエム　スイ　平面図　1：150

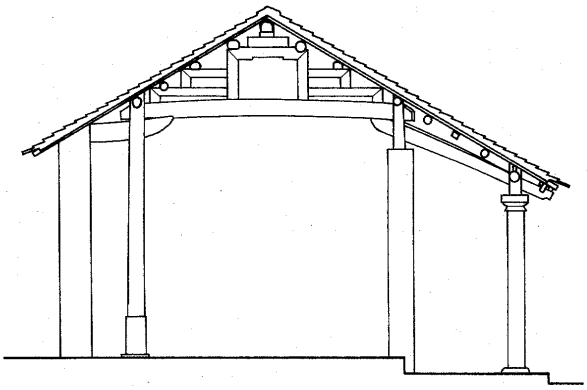


図６-99　ディエム　スイ　断面図　1：75

図６-100　ディエム　スイ　正側面

図６-101　ディエム　スイ　内部

(10) ディエム　ディン（Dinh）

モンフー集落（Ⅰ－006）

モンフー集落のほぼ中央、教会の北側に位置し、十字路の角地に前面に少々空地を設け、東面している。

桁行３間、梁間１間、切妻造、フランス瓦葺で、全体規模は桁行7.3m、梁間3.6mである。柱は木製の角柱で、正面は煉瓦造積モルタル塗の柱を前面に添えている。正面のみ開放で、両側面及び背面は側柱を囲うように煉瓦積モルタル塗の壁面が廻り、東側面壁中央に開口がある。柱間装置はない。床面は道路より一段高く煉瓦を敷き、内部背面中央に祭壇を設ける。東南隅に1600㎜ほどの木魚が梁から掛けられている。

架構は、サイとへのディエムと似ており、大梁に束を立て叉首を落し込む小屋構造であるが、側柱に大梁をのせるのではなく、叉首と共に落し込んで母屋桁をのせる形式をとる点が異なる。その他の母屋桁は、叉首を欠き込こんで乗せている。割竹垂木、割竹小舞（引掛け桟）に直接瓦をのせる。垂木尻は、割竹で包み込む。螻羽は、母屋等の小屋材を塗り込めず表に出している。

地元の古老（82歳）によると、1945年に以前の建物が焼失し、その後1954年に現在のディエムが再建された。2003年に修復されている。1945年焼失後の再建時に費用がなかったのか、転用材の利用が多く、構造的にも近代の最も簡略化した架構形式であるが、民俗資料および、街路景観に欠かせない存在である。（中村文美）

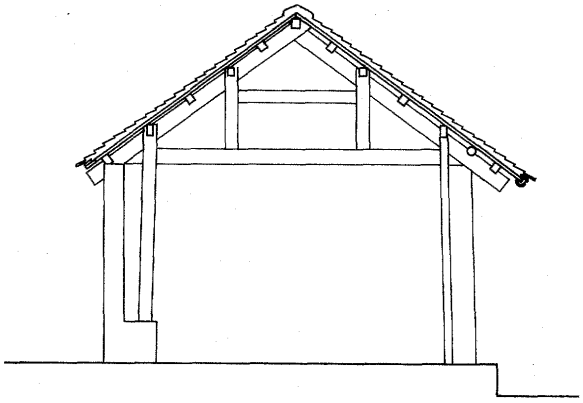


図６-102　ディエム　ディン　断面図　1：75

図６-103　ディエム　ディン　正側面

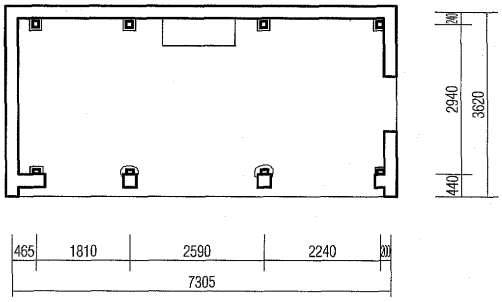


図６-104　ディエム　ディン　平面図　1：150

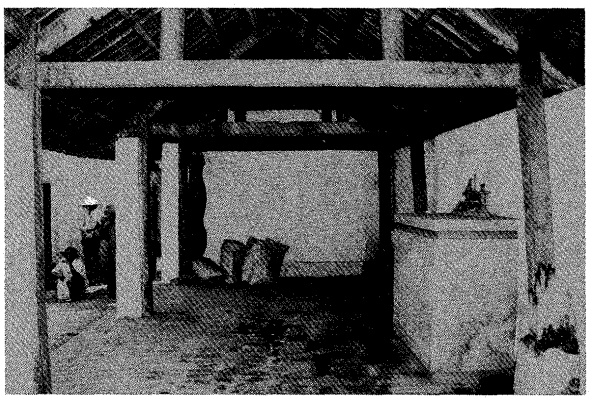


図６-105　ディエム　ディン　内部

図６-106　ディエム　ディン　架構

(11) クアン　ロ（Ro）

モンフー集落

モンフー集落の東南隅、集落の門がある道路沿いに北面して建つ。門とクアンの間は、現在は駐車場となっているが、最近まで水田に囲まれた場所であった。

桁行３間、梁間１間、切妻造、フランス瓦葺で、全体規模は桁行7.9m、梁間4.4mである。正面と背面が開放で、妻壁はラテライト積で中央に格子の入った窓がある。柱間装置はない。一部東面妻壁を煉瓦で補修。側柱はラテライトの一本柱で、北側の柱は、瓦で養生しながらモルタルを塗っている。床面は地面と同じレベルとし、煉瓦を敷く。

架構は、柱上に斗を置き大梁を渡す。現在、斗があるのは柱の北西一箇所のみであるが、その他３箇所にも、梁下に斗と噛んだ痕跡があることから、全４箇所の柱に斗があったことがわかる。大梁上に斗を置き束を立て、小屋梁を渡し斜梁と幅のある棟束を立て棟木を支える。母屋桁も兼ねた軒桁は、大梁をせり出して受ける。大梁上の斜梁は、当初材と中古材が見られる。10年前に修理したという。

簡略な構造ながら、梁を丁寧に面取りし、要所に斗を置く架構から19世紀後半の建築とみることができる。

このクアンは、遺体を一時安置するための建物である。村の外で死んだ人は村の内に入れないので、墓地へ運ぶ前にこの建物で１時間～２時間程遺体を仮安置させる。遺体は、集落のある北側から運び入れ、頭をバーヴィ山の方向、足をホン（大）川、テック（小）川の方向に向け、運び出すときは集落と反対の南側へと運び出す。現在も死体安置所として使用されている。

当初から柱を１本のラテライトでつくった珍しい建物である。緑の田園の中にポツンと建つ茶色い建物が独特の景観を形成している。また、村の外に出た死者を仮安置する場として、現在も使用されており、民俗資料としても貴重な遺構である。

（中村文美）

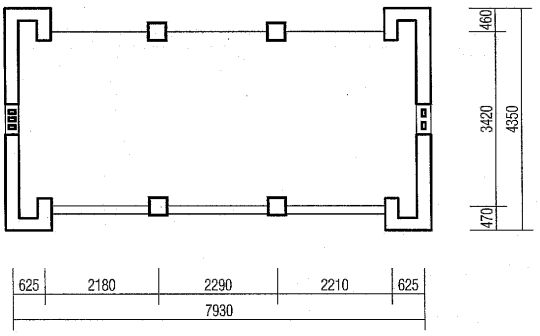


図６-107　クアン　ロ　平面図　1：150

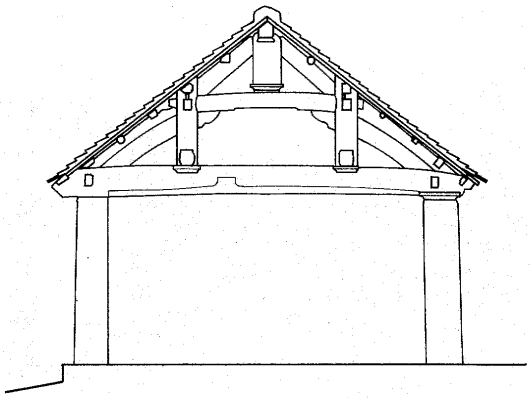


図６-108　クアン　ロ　断面図　1：75

図６-109　クアン　ロ　正側面

図６-110　クアン　ロ　内部

(12) クアン　ロブオウ（Lo Buou）

モンフー集落

モンフー集落南側の200m程離れた場所にあり、周囲は水田に囲まれている。

桁行4間、梁間2間、入母屋造、シングル瓦葺、一部フランス瓦を使用。全体規模は桁行9.8m、梁間4.3mである。四方を開放としている。8本の側柱と、両妻側2本の柱はラテライトの1本柱。四隅を固める壁材は、ラテライト積で、一部モルタルで塗っている。床面は土間とする。

架構は、側柱に斗をおき梁間方向に大梁をかけ、桁行方向に梁を4本おく。さらに、本来身舎が来る位置に斗をかまして束を立て、小屋梁と斗を3段重ねる。軒先は小屋束からのびる斜梁で支える。斜梁上は幕板で塞ぐ。軒先には斜梁上に鼻隠を兼ねる茅負がのり、さらに裏甲が取付く。10年前に屋根が替えられており、この時母屋桁と垂木は取り替えられたが、その他の架構材はすべて当初材が残っている。化粧隅木を軒先で2段重ね、軒に反りをつくる。鼻隠は隅で反り増して交差し、より軒反りを大きく見せている。入母屋の妻部分には破風が取付く。

小屋梁下端2箇所に銘「元亨利貞」「癸丑年孟冬下幹穀日良辰竪柱上梁大吉」とある。彫り物がシンプルなこと、材質が比較的しっかりしていることから、建築年代は20世紀前半と見、「癸丑」を維新7年(1913)を示すものと推定する。

小規模ながら屋根を入母屋造とする珍しいクアンである。低くてどっしりした構えの良い建物で、架構材を木太くつくり、入側の繋梁をそのまま軒先に出したり、中央部は斗だけで虹梁を積み上げる等、特徴のある架構形式をもつ。また、取替材が少なく、保存状態の良いクアン である。民俗資料上、景観上も重要な建物である。(中村文美)

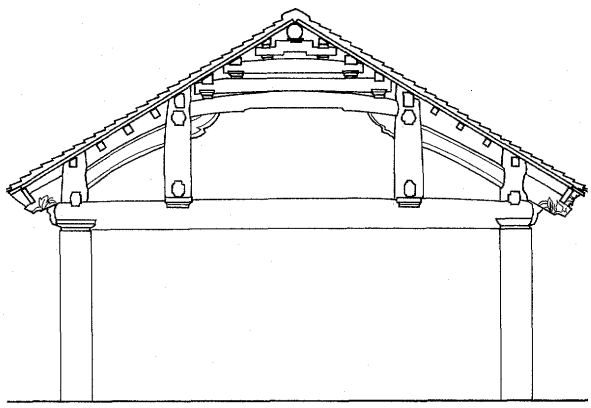


図6-111　クアン　ロブオウ　断面図　1：75

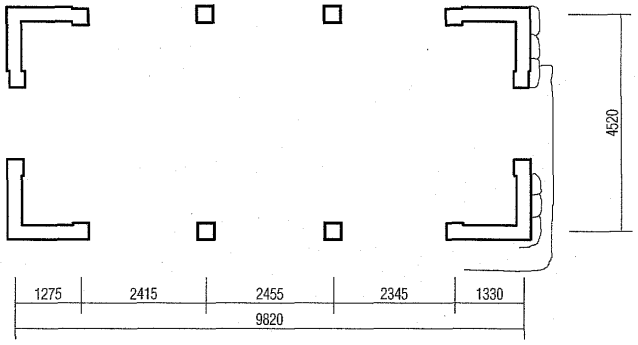


図6-113　クアン　ロブオウ　平面図　1：150

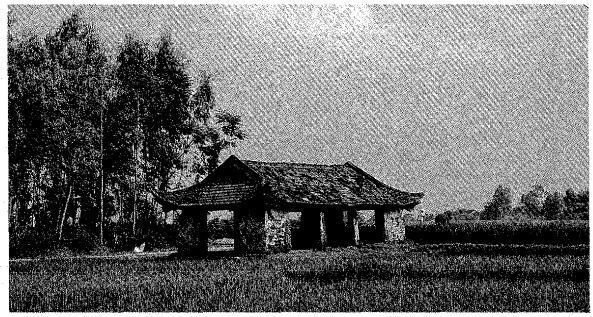


図6-112　クアン　ロブオウ　正側面

図6-114　クアン　ロブオウ　内部

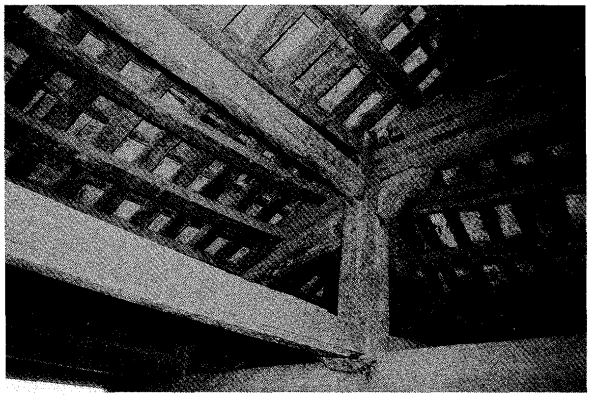


図6-115　クアン　ロブオウ　隅架構

(13) クアン　ドンナン（Don Nang）

モンフー集落

モンフー集落南側にある池辺に南面し、前面は池に面した道路、南には水田が広がっている。

桁行３間、梁間１間、切妻造、シングル瓦葺、一部軒先にフランス瓦を使用する。全体規模は桁行7.8m、梁間4.2mである。側柱はラテライトの一本柱にモルタル塗りで、両側面はラテライト積モルタル塗の壁を設ける。モンフー集落にあるクアンの側柱は全てラテライトの１本柱である。正面全面を開放とし、背面は中央間にラテライト積の線香壇を設け背後を煉瓦積モルタル塗の壁で塞ぐ。背面両脇を開放する。床面は、地面と同じレベルで土間とする。

架構は、側柱上に大梁を渡し桁で繋ぐ。大梁上に束を立て、束下位置で桁行方向に梁を渡す。束には斜梁と小屋梁を落し込んで母屋桁をのせる。斜梁の上は幕板で塞ぐ。小屋梁の上は横木と斗で構成し棟木を支える。小屋組は、ロブロウのクアンと似ているが、茅負を斜梁で受けず、側柱の上に大梁をおき鼻を延ばし直接鼻母屋と茅負を受けている点で異なる。

建築年代は小屋組の架構と細部意匠の様子から、ロのクアンと同じ19世紀後半と推定する。梁下銘が墨書で２箇所あるが、いずれも読み取れない。大梁鼻に彫刻を施したり、柱上の大斗を大虹梁からつくり出す等、丁寧なつくりのクアンである。

(中村文美)

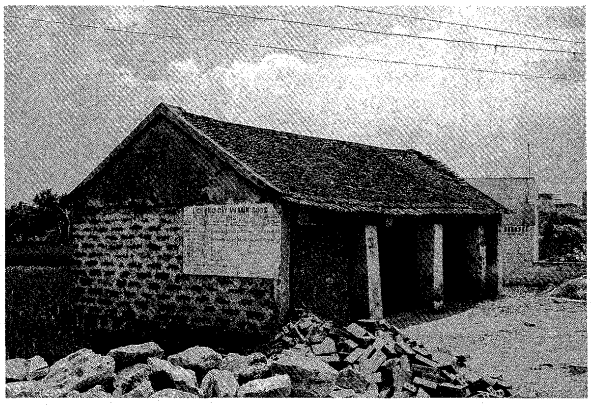


図６-118　クアン　ドンナン　正側面

図６-119　クアン　ドンナン　内部

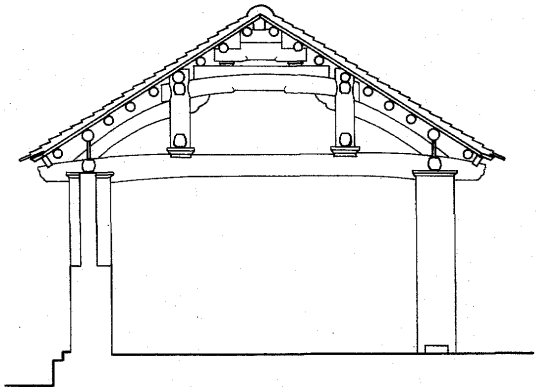


図６-116　クアン　ドンナン　断面図　1：75

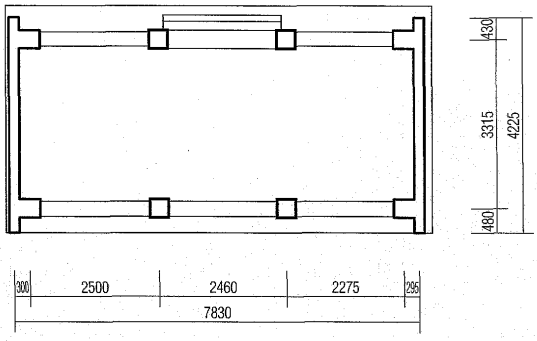


図６-117　クアン　ドンナン　平面図　1：150

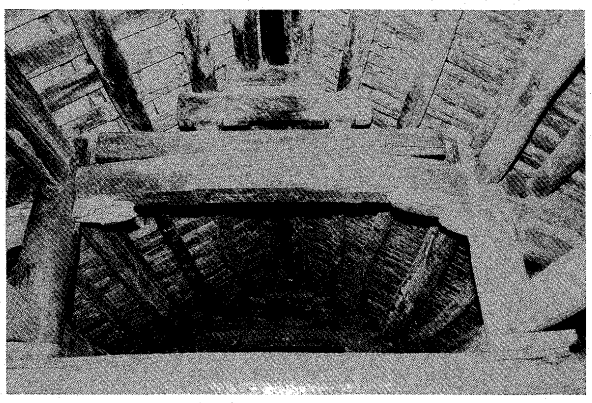


図６-120　クアン　ドンナン　架構

(14) ザン氏祀堂（ザンヴァンミン廟）

モンフー集落（Ⅰ－009）

ザン（江）氏の4代目、ザンヴァンミンを祀る堂。モンフー集落中心部のディン前広場の南方に位置する。本来は住宅として使用していたが、ザン氏の5代目が祀堂とし、以後は別所に移り住んだという。

街路より入ると、拝殿にあたるティエンテ（Tien Te）と、本殿にあたるハウドゥオン（Hau Duong）が街路に対し直交して並立し、ティエンテの前面には、土間の庭を構える。ティエンテ正面北西部の建物は、当初は台所棟であったが、1945年に戦争で崩壊、2000年に再建されたものである。

ハウドゥオンは、桁行3間、梁間4間、切妻造、シングル瓦葺で、全体規模は桁行8.3m、梁間7.9mである。平面は、前面の2間を開放とし、行事を行う場とする。身舎前面柱列の各柱間に板戸を入れ、以後2間を1室とし、中央にザン氏初代より5代まで、その左右に6代目を祀る。

柱間寸法は、身舎中央間の正柱間を桁行約2.5m、梁間約2.2mとし、廂の梁間は約1.3m、孫廂の梁間は約0.9mである。

軸組は、基本的には身舎を胴差で繋ぎ、廂も胴差と同高で繋梁を架ける形式であるが、身舎前側柱列中央の柱2本を省略しており、特殊な例である。身舎柱上の小屋組は、束と斜梁で構成される形式である。身舎柱と廂柱の間は斜梁を架けるが、前側の廂柱位置に立つ束より前の孫廂にある部分は、短い横木と束が一体化した構造を持つ。

建築年代は、1845年に前身建築の老朽化に伴い再建したと伝えるが、棟木下には「保大十八年癸未孟春重修」とあり、大部分は1943年のものと考えられ、正面を2間飛ばしとする改造も同時であろう。

ティエンテは、桁行5間、梁間3間、切妻造、シングル瓦葺で、全体規模は桁行14.0m、梁間5.5mである。主室にあたる中央3間を開放とし、側室にあたる脇間1間を壁とする。柱間寸法は、桁行柱間寸法は中央脇間を2.5m、脇間を2.2mとし、正柱の桁行を2.55m、梁間を2.24mとする。廂柱間を約1.1～1.1mとする。主室は家族のお祭りなどをおこなう空間で、側室には亡くなった家族を祀る。軸組は、中央3間分の身舎柱列の柱を抜き、ここでは梁間方向に大梁を2間飛ばしとし、孫廂柱はもたない。小屋組は、束と横木が一体化した形式を持つ。小屋組の部材には文様装飾を施さない。

ティエンテの建築年代は、側柱の年記により1943年とされる。改修箇所が明確ではないが、2001年に軒回りの部材交換をおこなう。また、廂柱も現在は角柱であるが、本来は木製の円柱であった。

ハウドゥオン・ティエンテ共に、主要部分の建築年代が明確であり、保存状態も良好である。祀堂の数少ない事例として貴重な物件である。（大林　潤）

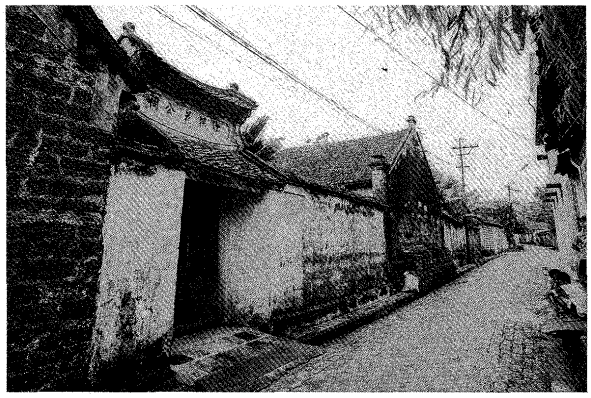


図6-121　ザン氏祠堂　門

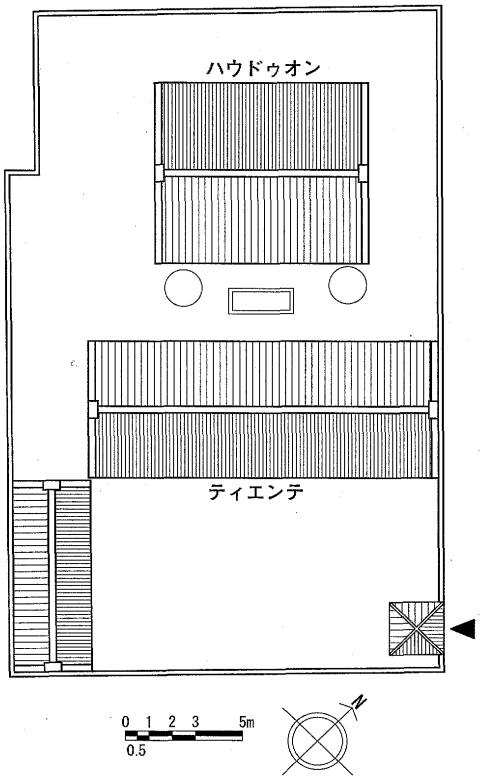


図6-122　ザン氏祠堂　配置図

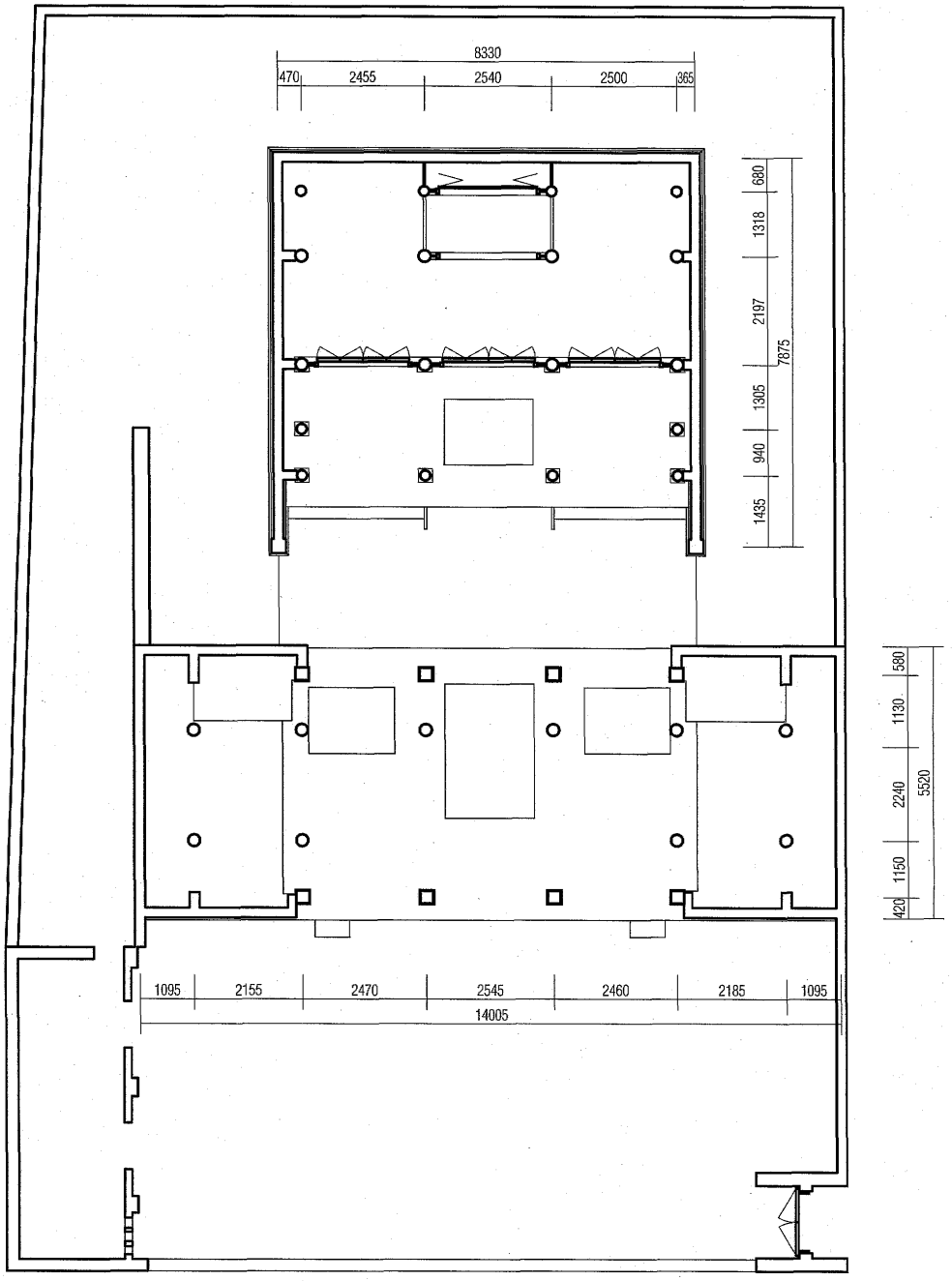


図６-123　ザン氏祠堂　平面図　１：150

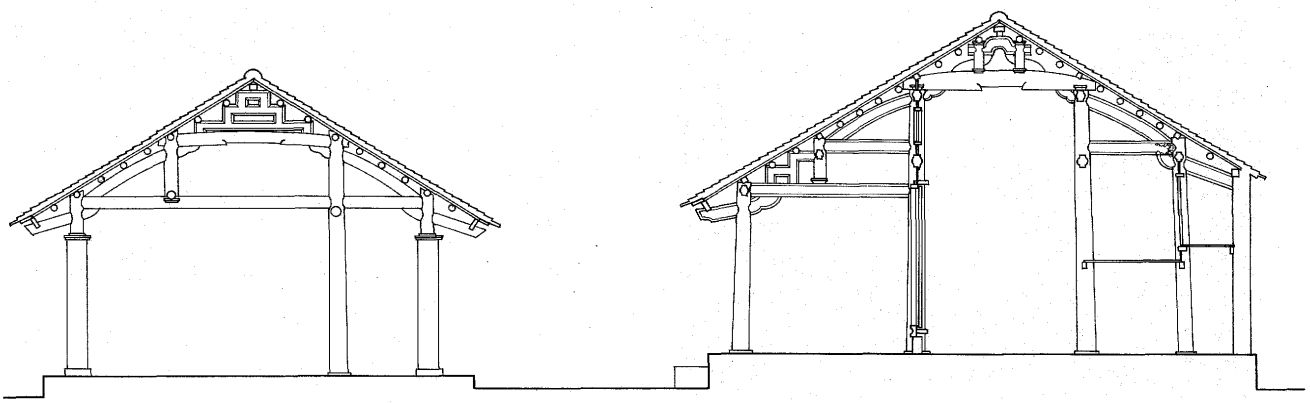


図６-124　ザン氏祠堂　断面図　１：100

図6-125　ザン氏祠堂　ハウドゥオン外観

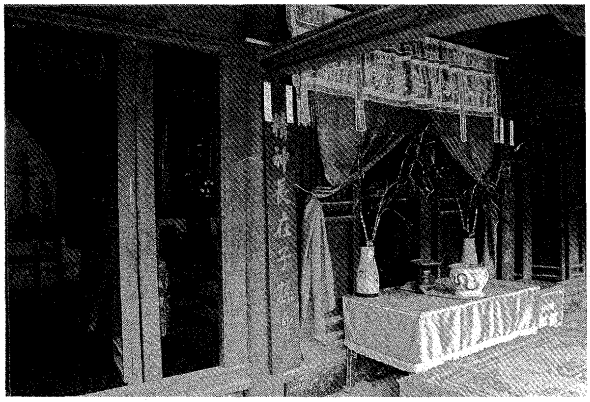


図6-126　ザン氏祠堂　ハウドゥオン吹き放ち部

図6-127　ザン氏祠堂　ハウドゥオン吹き放ち部架構

図6-128ザン氏祠堂　ハウドゥオン軒先

図6-129　ザン氏祠堂　ティエンテ　外観

図6-130　ザン氏祠堂　ティエンテ　内部

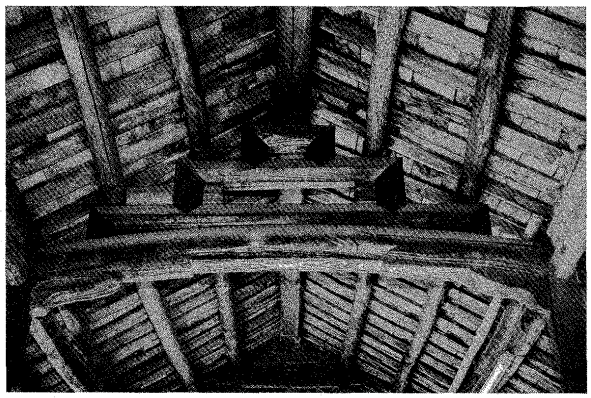


図6-131　ザン氏祠堂　ティエンテ　架構

図6-132　ザン氏祠堂　ティエンテ　軒先

(15) ハ氏祀堂

モンフー集落（Ⅱ－121）

ハ（河）氏一族の祀堂である。本来は農家建築で、初代の住宅を祀堂に改めたものである。伝承によると、建物は村内の他の場所より移築し、同時に改造もおこなっているという。敷地内には、主屋と、1995年に建てられた納屋2棟、近年建てられた台所棟が建つ。台所棟に面して井戸を設け、中庭を介して主屋の正面に植え込みを設ける。

主屋は桁行5間、梁間4間、切妻造、シングル瓦葺で、全体規模は桁行14.0m、梁間6.4mである。正面は中央3間分の柱を角柱とし、建具には両折れの板戸を入れる。側室部分はモルタルの装飾窓をはめた煉瓦壁とし、正面以外の3方も、煉瓦壁を回す。建物内部には間仕切りを設けず1室とし、各柱間に祭壇を設ける。柱は円柱で各柱筋に柱を立てる。柱間寸法は、身舎中央の正柱では桁行2.35m、梁間2.31mのほぼ正方形を呈し、その他桁行方向は2.35～2.42mで柱を配る。梁間方向は、廂梁間を1.15～1.22mとし、孫廂梁間は0.97mとする。軸組は、身舎柱を胴差で繋ぎ、廂を胴差と同高の繋梁で繋ぐ。小屋組は、束と斜梁で構成された形式である。

痕跡および聞き取りにより平面を復原すると、当初は桁行7間だったものを5間に縮小していると推定できる。また前側柱筋に扉を、中央間口3間の両端に壁を設け、当初は前面に孫廂をもち、室内は主室と側室に仕切っていたことがわかる。1960年頃、孫廂筋への扉位置の改変の際に、室内の間仕切りも変更している。

部材に施された装飾も、この室境筋の小屋組がもっとも豪華で、材端部に丸彫り状の彫刻を施す。また、孫廂柱にかかる斜梁の端部にも彫刻を施しているが、小屋組よりも若干簡素である。なお、近年に水平材の取替えや、軒先に鼻隠しを付与するなどの修理をおこなっている。

小屋梁には、「龍飛壬戌秋」とあり、平面形式、装飾要素などから、1802年頃の建物と思われる。復原すると一般的な中規模農家建築とすることができ、19世紀前半の代表的事例のひとつといえる。後世の修理も質がよく、保存状況も良好である。（大林　潤）

図6-133　ハ氏祠堂　門

図6-134　ハ氏祠堂　外観

図6-135　ハ氏祠堂　内部

図6-136　ハ氏祠堂　架構

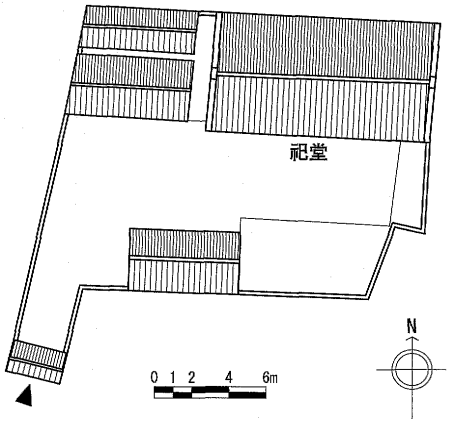


図 6 -137　ハ氏祠堂　配置図

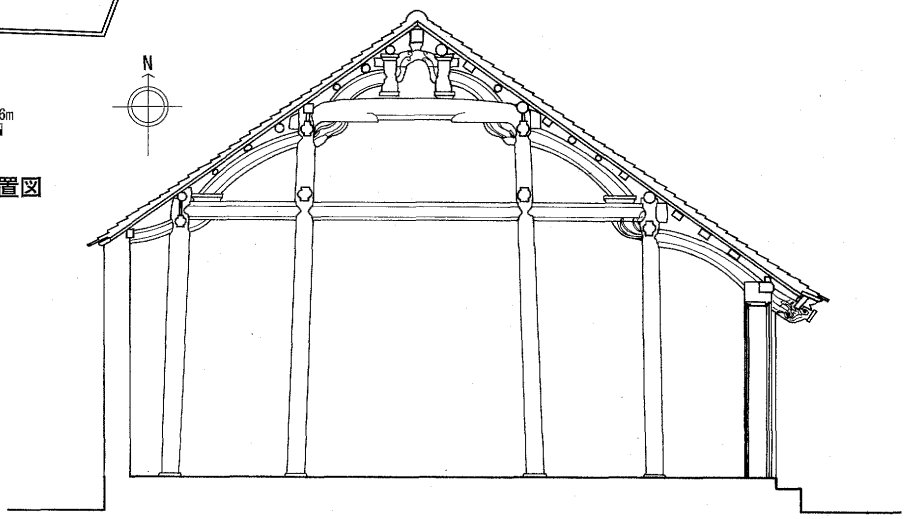


図 6 -138　ハ氏祠堂　断面図　1：75

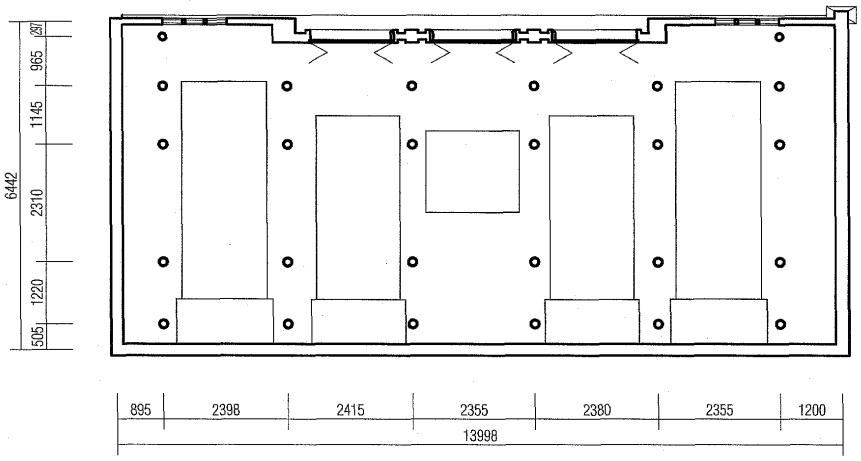


図 6 -139　ハ氏祠堂　平面図　1：150

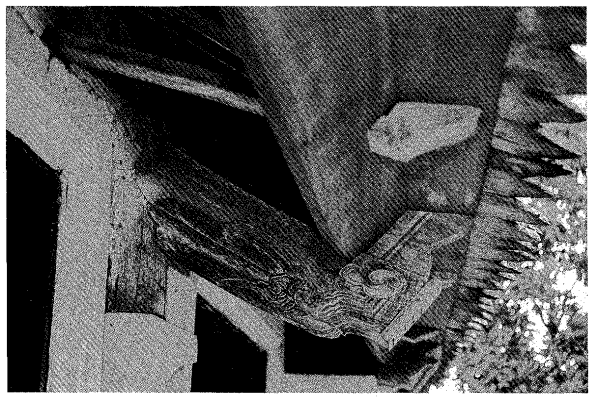


図 6 -140　ハ氏祠堂　軒先

図 6 -141　ハ氏祠堂　付属屋

(16) ファン氏祀堂

モンフー集落（Ⅲ－110）

ディン前広場に面する、ファン（潘）氏の祀堂である。ファン氏は、初代は農業を営んでいたが、6代目以降朝廷の大臣に就任する人物が登場する。ファン氏祀堂は、4代目が1790年頃に創建し、現在の建築は、1840年頃に再建したものである。敷地は広場に東面し、拝殿にあたるティエンテ（Tien Te）を構え、ティエンテの西に中庭をはさんで本殿にあたるハウドゥオン（Hau Duong）が並行する。敷地形状は、西側がやや狭い台形を呈し、本殿の南に植栽を施した張り出し部分を持つ。広場側に門や塀などの施設はない。

ハウドゥオンは桁行5間、梁間4間、切妻造、シングル瓦葺の建築で、全体規模は、桁行14.0m、梁間5.6mである。正面の廂部分を開放とし、3方をラテライト壁とする。柱間寸法は、桁行方向が2.46～2.52mとほぼ同規模であるのに対し、梁間方向は、身舎柱間を1.84mとし、前面では廂柱をすべて省略し、身舎・孫廂廂柱間を2.00m、後の廂柱間を1.09mとする。正面間仕切りは身舎柱筋に板壁を入れ、中央間は板扉を入れる。内部は、主室と側室には分けず1室とし、背面側の廂に祭壇を設け、中央に初代および長男を、その両側にそれぞれ次男から五男までを祀る。

柱は礎石建の円柱で、軸部の木割りは細い。軸組は身舎柱を胴差で繋ぎ、身舎・廂間を胴差よりは一段低い位置で繋梁を架ける。正面3間分は身舎正柱と孫柱間に梁を渡して廂柱列を省略しているが、当初は廂柱筋に建具が入る形式に復原でき、両妻の部分では、当初の架構を残している。小屋組は、束と横木で構成された形式である。身舎柱と廂柱間には斜梁を架け、前側柱と孫廂柱間には束と横木とを一体化した構造をもつ。部材の装飾は、彫りが浅く比較的簡素である。

建築年代は、正柱上部の梁の銘からも1840年であることが明確である。その後中央4本の虹梁を入れ替えて柱を省略し、間仕切りを身舎柱筋に改めたと考えられる。19世紀中期と後期の特徴の変遷を示す建物である。

ティエンテは、桁行5間、梁間5間、切妻造、シングル瓦葺で、全体規模が桁行14.6m、梁間7.9mである。広場に面する前面の中央3間に扉を設け、側室部分は壁で閉じる。一方背面には間仕切り等は設けず開放とする。柱間寸法は、身舎中央の正柱では桁行2.56m、梁間2.18mとし、その他の桁行方向は2.42～2.49mで柱を配るが、再南の1間のみ2.54mとやや広い。

柱は円柱で、前面中央1間の孫廂柱は煉瓦積の角柱、背面中央3間の軒支柱は上下に造り出しの煉瓦造円柱である。中央3間分の前面身舎柱を省略する形式で、背面に壁を持たないことから、軒を支えるために支柱をいれる。軸組は、前面身舎柱を省略し、後方身舎の柱と前面廂を胴差で繋ぎ、背面廂はこの胴差と同高で繋梁を架ける。小屋組は束と横木で構成する形式である。廂及び孫廂には、それぞれ斜梁を架ける。部材に施された装飾は、部材輪郭を強調する繰型のほか、わずかに飛貫の両端に彫りの浅い彫刻を施す程度である。

妻の胴差と中央部の胴差の絵様はよく似るが、仕上がりに差が見受けられ、後者は後補のものと思われる。したがって、当初は前面身舎柱筋にも柱があったが、後世に柱を省略したものと思われる。また、持送りも数回の交換がおこなわれている。そのほか、母屋桁に断面角の部分が見られ、少なからず屋根葺き替え等の改修がある。背面の支柱は2004年に挿入したものである。

建築年代を示す資料はないが、平面形式や装飾の状況より、ティエンテと同じく1840年頃であろう。19世紀前半の祀堂のティエンテの形式を残す事例である。

ハウドゥオン・ティエンテとともに、保存状態が良好で、所有者の保存の意思も高い。敷地形状は変化するものの、2棟合わせて19世紀前半の祀堂形式を持つ貴重な物件である。（大林　潤）

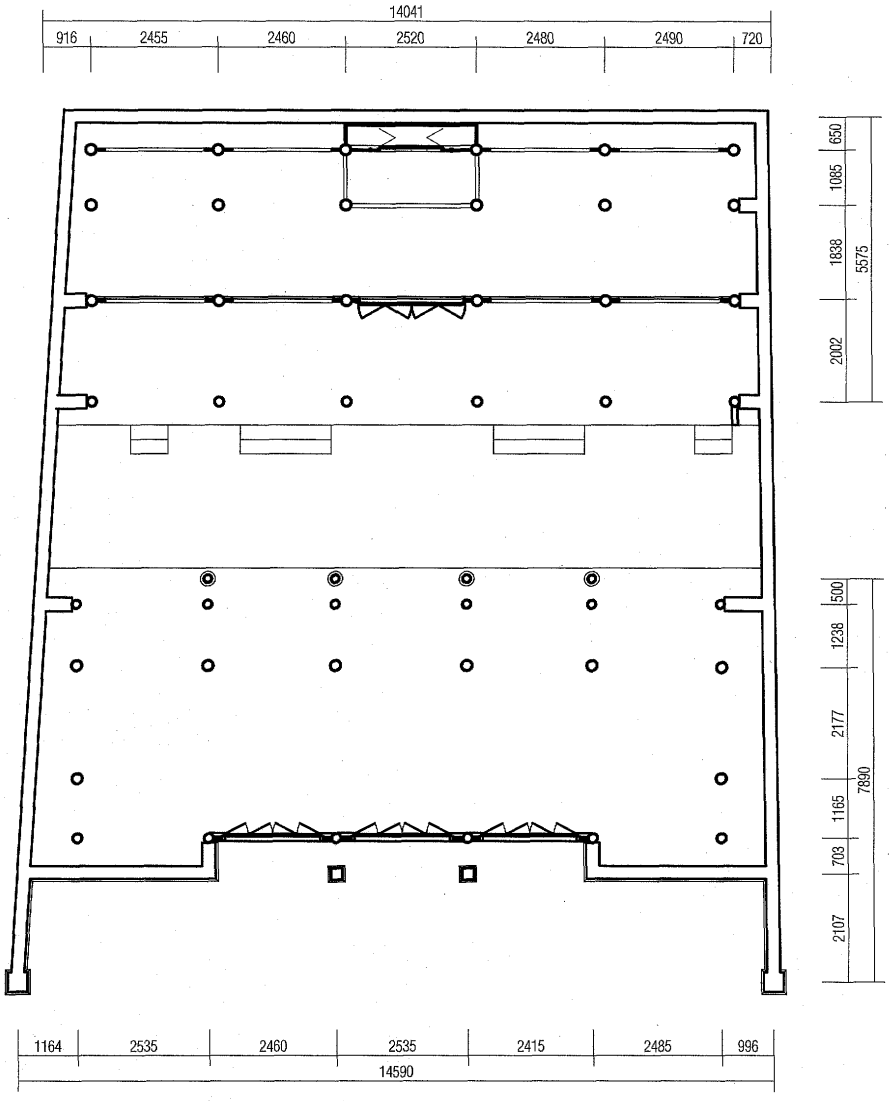


図6-142　ファン氏祠堂　平面図　1：150

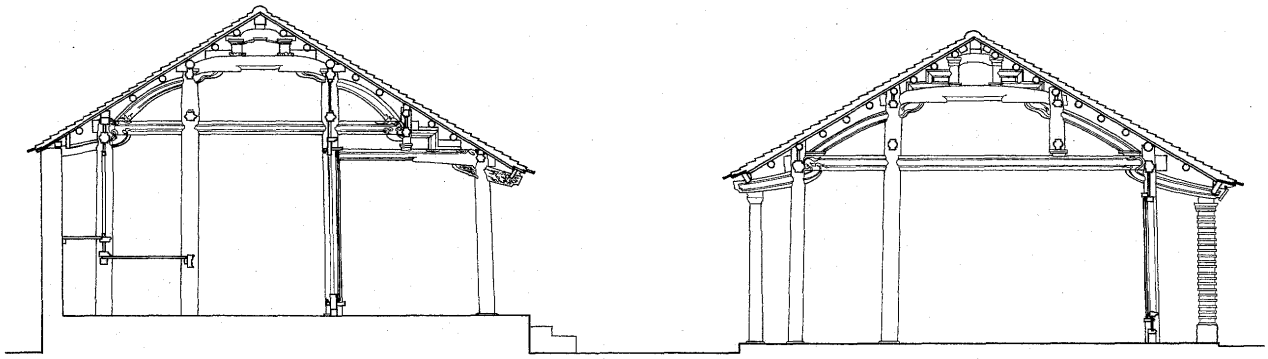


図6-143　ファン氏祠堂　断面図　1：100

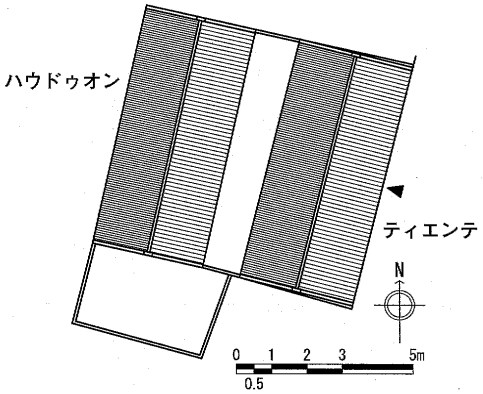


図６-144　ファン氏祠堂　配置図

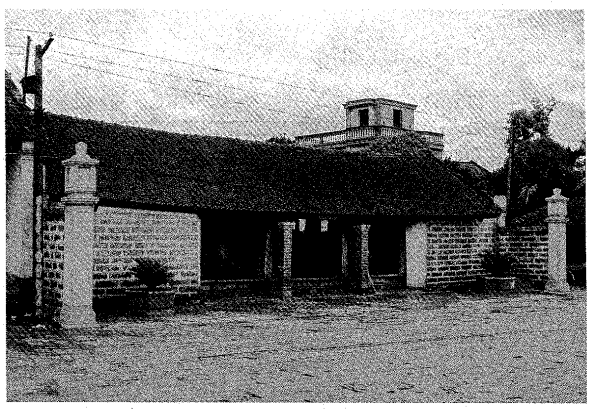


図６-145　ファン氏祠堂　外観

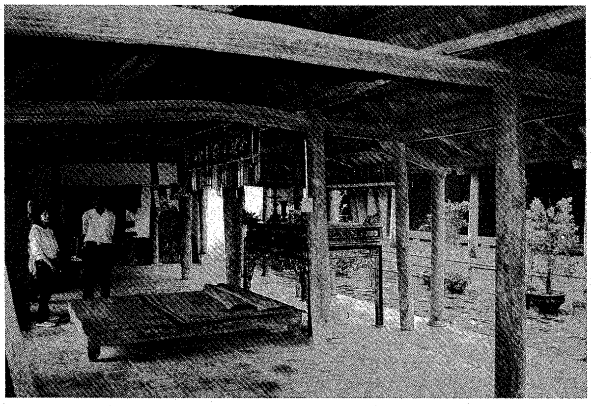


図６-146　ファン氏祠堂　ティエンテ内部

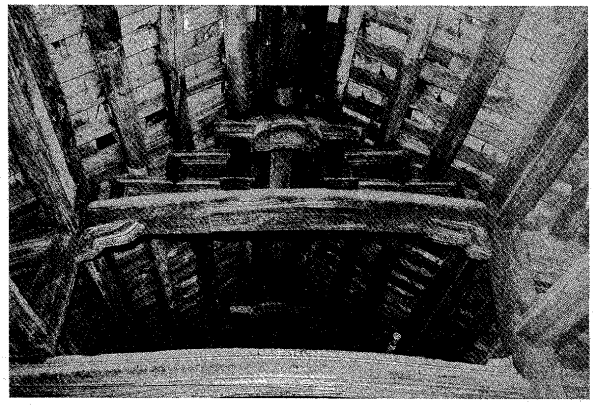


図６-147　ファン氏祠堂　ティエンテ身舎架構

図６-148　ファン氏祠堂　ハウドゥオン正面

図６-149　ファン氏祠堂　ハウドゥオン内部

図６-150　ファン氏祠堂　ハウドゥオン廂

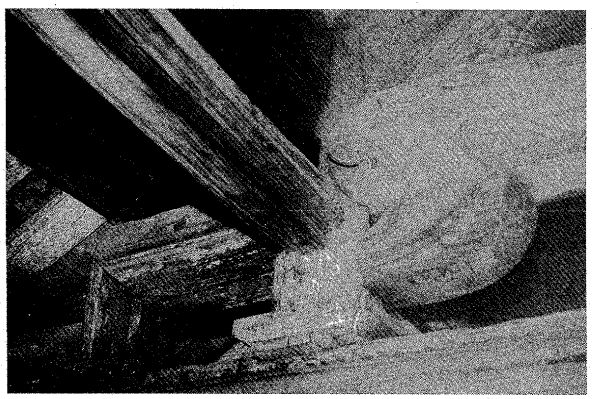


図６-151　ファン氏祠堂　ハウドゥオン架構詳細

(17) ファン・ケ・トアイ記念館

モンフー集落（Ⅲ－088）

革命政権下で副首相を務めたファン・ケ・トアイを記念する建物で、モンフーのディンの北西に位置する。ディンの門前から西に進む路地に面して敷地を構え、記念堂となる建物を妻壁と塀を共用する形で路地に直行して配する。入り口の門には、モルタルによる装飾が施され、門を入ってすぐにモルタル製の装飾壁を設ける。北側の隣地も当初はこの家のもので、現在隣地に建つ東西棟が主屋で、当建築は住宅の機能を持つ付属屋であった。北側の敷地と主屋は1970年頃に売却し、その際隣家は主屋の入り口を北側に改めたという。

建物は、木構造の軸部をもたない構造で、桁行14.0m、梁間6.1m、切妻造、シングル瓦葺である。柱は、正面の側柱以外、壁と一体にしてモルタルを塗布しているが、前面の側柱と入側柱間を吹き放ちとし、前面入側筋に建具を入れ、室内は、中央3間を主室、両端1間を側室とし、内部の柱はすべて省略されている。現在は、主室を祀堂とし、両側室には祭壇を設ける。

柱間寸法は、正面3間を桁行2.40～2.47mとほぼ同規模とし、側室は3.15～3.53mとし、主室柱間よりも1mほど広い。架構は、天井を張るため定かではないが、孫廂架構部のみ木部が露出しており、直材の斜梁が架かる。軒高は、約2.7mと高い。正面側柱がモルタル塗りの八角形断面を持ち、柱頭にオーダーを設ける。吹き放ち部分にかかる斜梁には、彫刻は施されておらず、わずかに軒先に曲線の繰型を持つのみである。

現在のモルタル塗込の天井は1998年に改修したものであるが、それ以前は藁の天井が張られていたという。聞き取りによると1940年頃の建築というが、内部柱の省略、軒高、天井を張る点などから、建築年代は若干降る可能性がある。そのほか、平面形式などに時代性が現れており、20世紀中期の一資料となりうる物件である。（大林　潤）

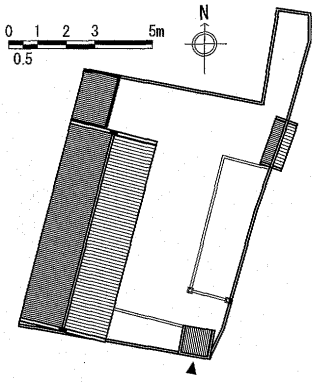


図6-152　ファン・ケ・トアイ記念館配置図

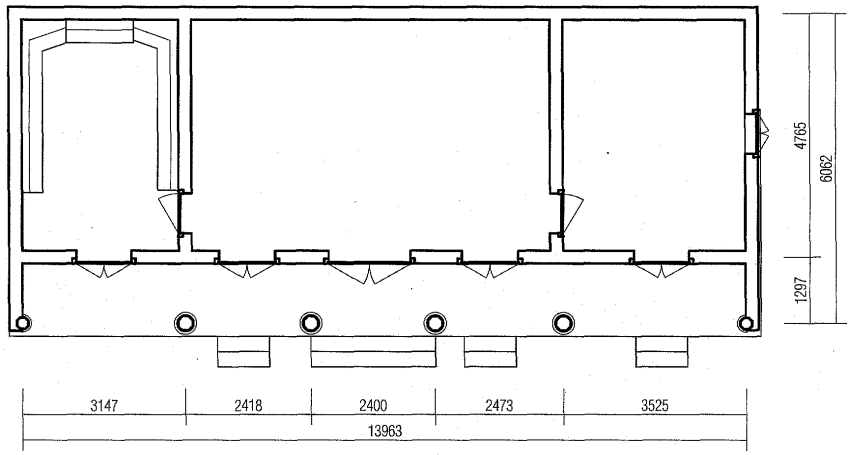


図6-153　ファン・ケ・トアイ記念館　平面図　1：150

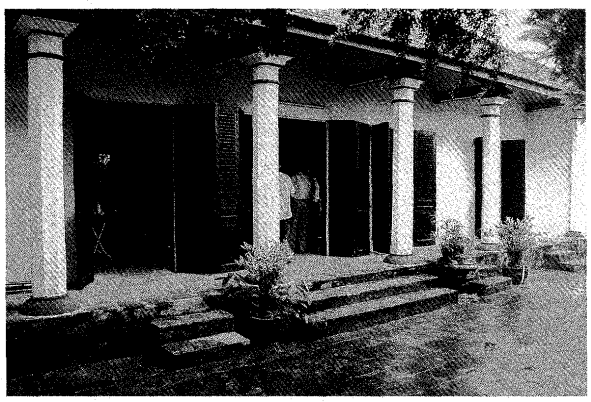


図6-154　ファン・ケ・トアイ記念館　外観

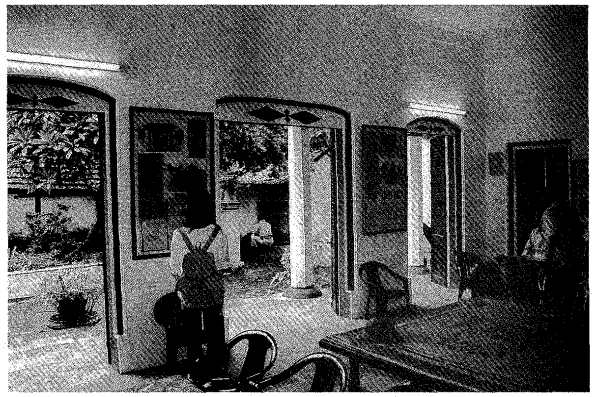


図6-155　ファン・ケ・トアイ記念館　内部

(18) Gian Du Thuan邸

モンフー集落（Ⅰ―010）

当家はモンフー集落の南東部に位置する。初代からこの地に居を構え、現在の当主は10代目にあたる。先代まで農業を営んでいたが、現在はおこなっていない。

敷地は、南北に通る路地に東面し、形状は矩形を呈し、東面中央に路地に開く門を構える。敷地内には北側に南を正面とする主屋を構え、中庭を介して西面に南北棟の付属屋と東西棟の台所、敷地西南隅に井戸を備える。東南隅には、鶏小屋が取り付く。敷地西側と南側には、次男と三男の敷地が並ぶ。

主屋は、桁行５間、梁間４間、切妻造、シングル瓦（軒先のみフランス瓦、後補）葺で、全体規模は、桁行14.7m、梁間7.2mである。平面形状は両妻面が桁行方向と直行しない不整形である。柱間寸法は、身舎中央の正柱間が桁行2.57m、梁間2.67mとし、桁行方向は中央の脇間を１間を2.35～2.37m、側室部分を2.19～2.28m、梁間方向は、廂を1.44～1.50m、孫廂を0.97mとする。間仕切りは、前面奥行１間の孫廂を吹き放ちとし、廂柱筋の各間を板扉で間仕切り、前面以外の３方はラテライト煉瓦の壁面で閉じる。内部は、主室と側室に間仕切りされる一般的な形式である。

柱は礎石建の円柱で、各柱筋とも柱を省略しない。身舎柱筋の架構は、身舎間を胴差、廂を繋梁でつなぐ形式で、小屋組は束と横木によって構成される形式である。ただし室境筋では、小屋組が横木を重ねる形式で古式を示す。

装飾は、身舎柱筋は斜梁端部や木鼻程度に限られるが、室境筋は小屋組や建具の板枠など、彫りが深く繊細である。

建築年代は、額銘にある1827年頃と考えられ、木割りも太く当初の建具等もよく残っている。軒先の彫刻が、他と比べ彫りが深いため、後世に交換していると考えられるが、他に屋根葺き替え以外の大きな修理はおこなっていないため、当初の部分を多く残している。モンフー集落で年代のわかる建物のうち最も古い建築であり、積極的に保存すべき建築である。（大林　潤）

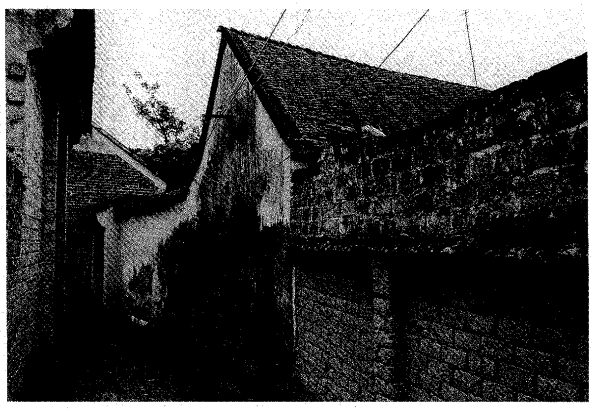


図６-156　Gian Du Thuan邸　路地と門

図６-157　Gian Du Thuan邸　主屋　外観

図６-158　Gian Du Thuan邸　主屋　内部

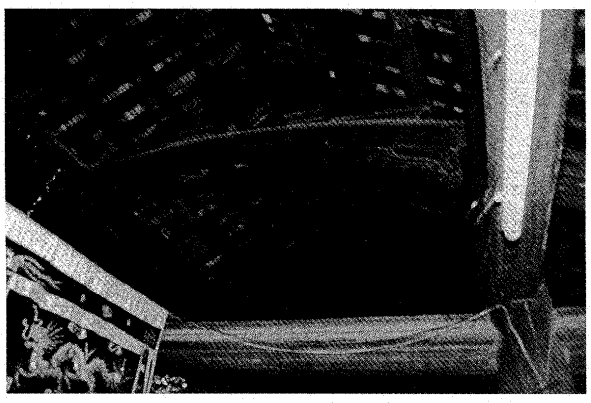


図６-159　Gian Du Thuan邸　主屋　架構

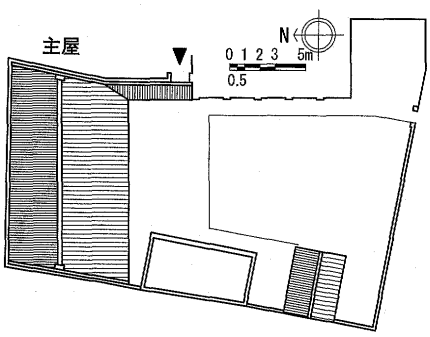


図 6 -160　Gian Du Thuan邸　配置図

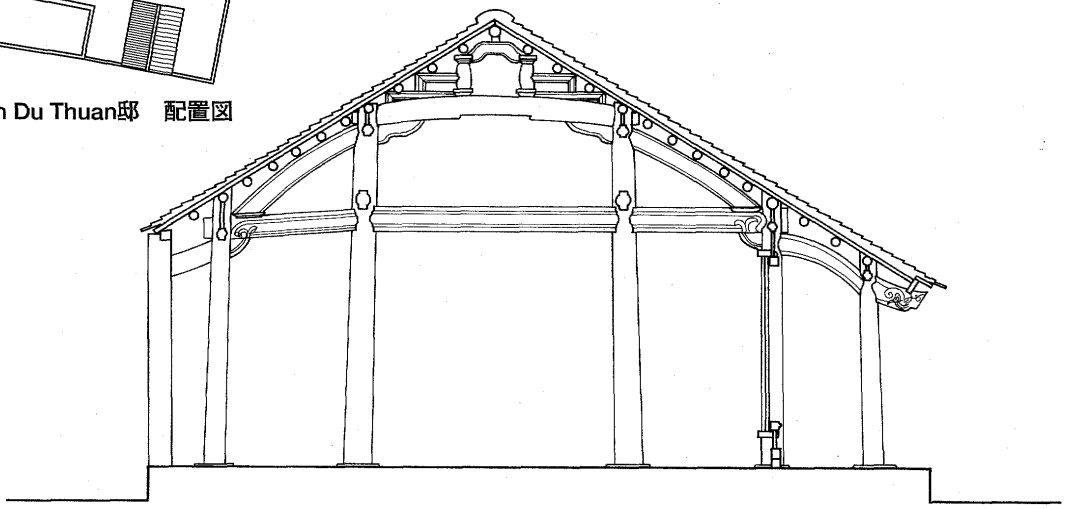


図 6 -161　Gian Du Thuan邸　断面図　1：75

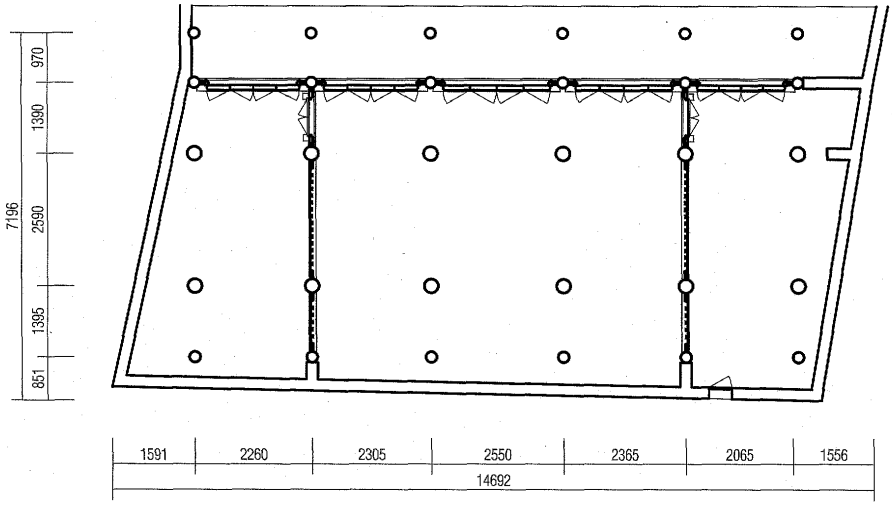


図 6 -162　Gian Du Thuan邸　平面図　1：150

図 6 -163　Gian Du Thuan邸　主屋　廂

図 6 -164　Gian Du Thuan邸　主屋　軒先

(19) Ha Thi Dien邸

モンフー集落（Ｉ－035）

モンフーの門からディンへ続く道路に面して位置する農家である。当初は阮朝の大臣が祠堂としていたが、後世に農業組合の倉庫に転用され、1964年頃に当家に分け与えられたものという。後述のNguyen Van Vung邸（Ｉ－036）との間には、門扉を設けない塀が建つが、本来はひとつであった。

敷地は、道路に北面して門を構え、東中央部の中庭を囲むように、家畜小屋、主屋、付属屋がコの字型に並ぶ。井戸は敷地東中央部の隅に設ける。

主屋は、桁行５間、梁間４間、切妻造、シングル瓦葺で、全体規模は桁行15.3m、梁間7.3mである。正面中央３間を奥行２間の開放とし、両側はモルタル塗込の壁とする。北妻面はラテライト壁とし正面に袖壁を持つ。南妻面と背面はラテライト壁とする。

柱は礎石建の円柱で、一部モルタルで補修がされている。柱間寸法は、身舎中央の正柱で桁行2.64m、梁間2.31mとし、その他の桁行方向は2.52～2.55m間で柱を配り、梁間方向は廂を1.28m、孫廂を1.03mとする。前面の廂柱筋中央１間分の柱が抜かれる形式で、正面は前正柱筋に主室の出入り口として両開きの板扉を設ける。内部は、主室と側室に間仕切り、壁面はすべてモルタルで塗り込められている。

軸組は、基本的には身舎を胴差で繋ぎ、廂を繋梁で繋ぐ形式であるが、中央１間は身舎柱と孫廂柱間に大梁を架け、廂柱を省略する。小屋組は、２本の束と緩やかに彎曲する斜梁で構成される形式である。廂は斜梁を架け、孫廂は束と横木を一体化した架構とする。

装飾は、繋梁と斜梁の端部に彫りの浅い簡素な彫刻が施され、孫廂の軒持ち送りには、全面に彫りの深い彫刻が施され、仕事の差が見られる。

梁下に「嗣徳参年歳在庚戌十二月初三日竪柱」の刻銘があり、1850年の建築であることがあらかであるが、当初より中央正面２間を吹き放ちとしている点では、若干年代が降るようにも感じられる。側室内の柱を入れ替えるなどの修理をおこなうが、大部分は当初のものであり、保存状態もよい。19世紀後半の珍しい平面形式を持つ建物といえる。（大林　潤）

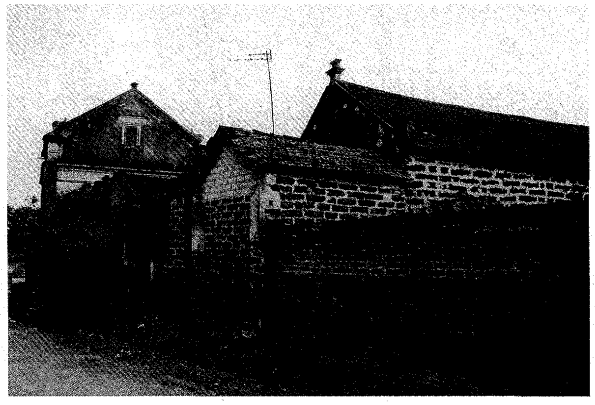


図６－165　Ha Thi Dien邸　街路からの景観

図６－166　Ha Thi Dien邸　主屋　外観

図６－167　Ha Thi Dien邸　主屋　内部

図６－168　Ha Thi Dien邸　主屋　側室

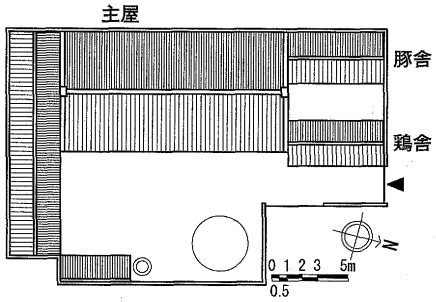


図 6 -169　Ha Thi Dien邸　配置図

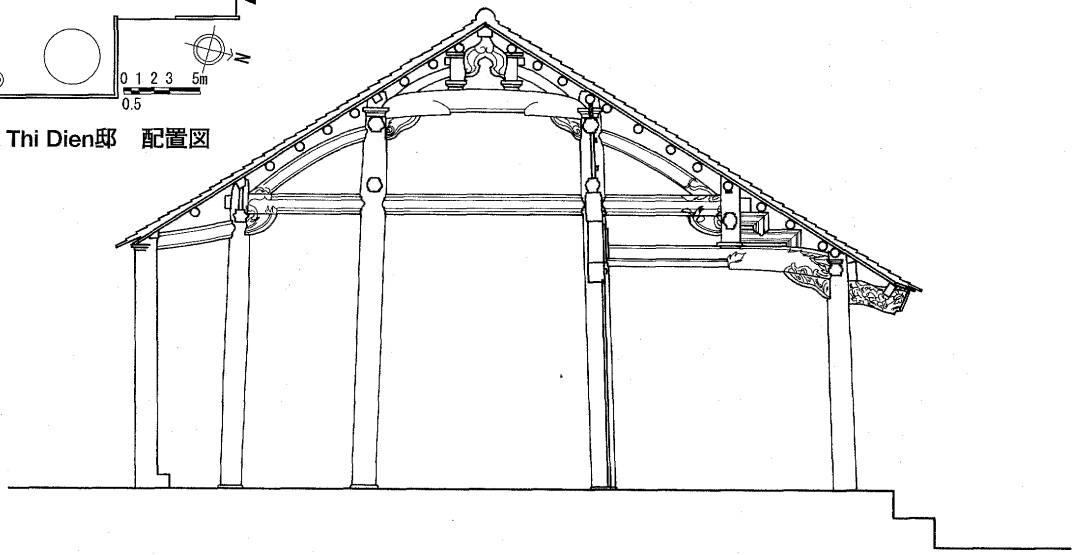


図 6 -170　Ha Thi Dien邸　主屋　断面図　1：75

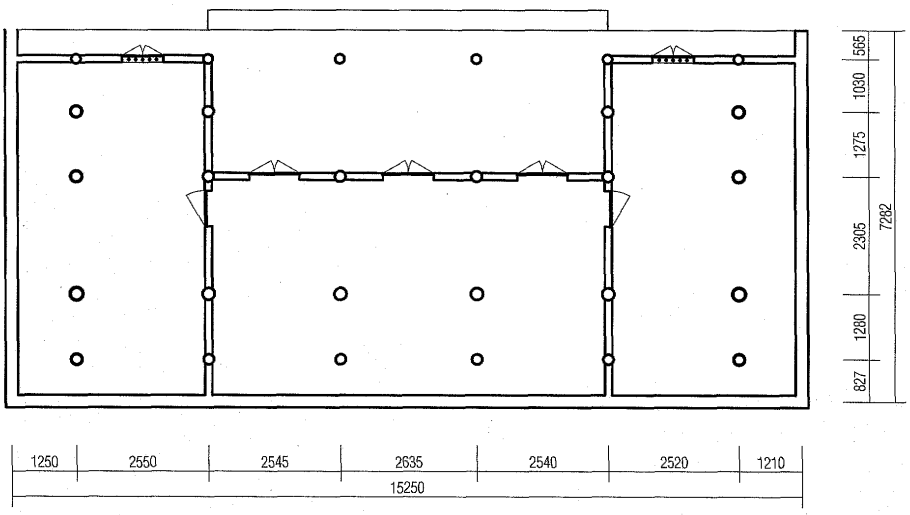


図 6 -171　Ha Thi Dien邸　主屋　平面図　1：150

図 6 -172　Ha Thi Dien邸　主屋　廂架構

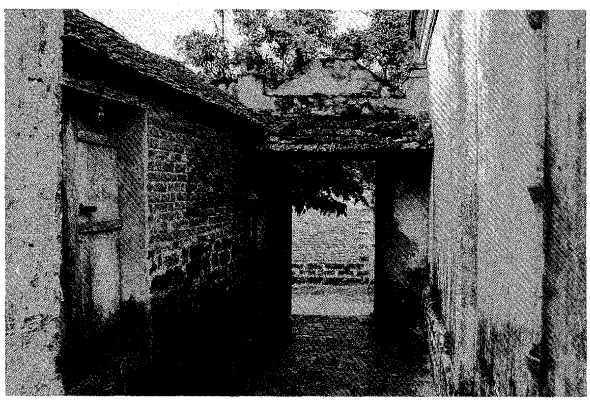


図 6 -173　Ha Thi Dien邸　門と鶏舎

(20) Nguyen Van Vung邸

モンフー集落（Ⅰ－036）

Ha Thi Dien邸（Ⅰ－035）に隣接する次男の家である。現在は別所に居を構えており使用していない。Ha Thi Dien邸とは道路より入る門を共有し、中庭の南に位置する。2軒はかつて敷地をひとつのものとしていたが、1989年に次男が結婚したのを機に分割している。敷地形状はL字型で、北部に主屋を建て、中庭を挟んで台所棟が並列する。さらに南にはやや広い庭と付属屋が建つ。

主屋は、組積造、切妻造、シングル瓦葺の建物で、桁行11.03m、梁間6.65mである。西1間を別室とする。いわゆるフランスコロニアル風の建築で、西側1間は2階建、東側3間は平屋建とし、棟の高さが若干異なる。西側の正面には3連アーチを備え、正面より奥行約（1.80m）の位置を間仕切りとし、中央に両開きの板扉を備え、内部を1室とする。東側3間は、正面奥行1間分を吹き放ちとし、入側筋で閉じ、東の1間に両開きの板扉、それ以外の2間に窓を備える。内部は1室とし、漆喰天井を張る。

柱間寸法は、桁行方向では西側1間を3.49m、東側3間をそれぞれ2.49～2.55mとし、梁間方向は、正面1間を1.80m、室側を4.86mとし、室内に柱を設けない。東3間部分の架構は、直材の梁に束を立て母屋桁を直接受け、壁上から直材の叉首を架け、棟木を乗せる。

装飾は、建物全体を西洋風に仕上げ、西側1間の正面上部には、モルタルによる装飾が施され、アーチ部分の柱はオーダーを持ち、背面の窓上部にも装飾を施す。東側3間は、側柱にオーダーを備え、入側筋の壁面にモルタルによる装飾を施す。

木部の装飾はわずかに吹き放ち部分に架かる斜梁の輪郭を繰る彫刻のみが認められる。

室内に「保大丙子」と「1936」との銘文が残り、建築年代は1936年とあきらかである。Ha Thi Dien邸と同じくかつては農業組合の建物であり、おそらく迎賓館として建てられたものと推定される。小屋組に簡素な斜梁を用いるなど、20世紀前半の形式を持つ。天井等の破損が激しいが、当初と思われる建具を残し、原形に復することは可能であろう。同一敷地内に主屋と迎賓館がそろって残る、貴重な例である。（大林　潤）

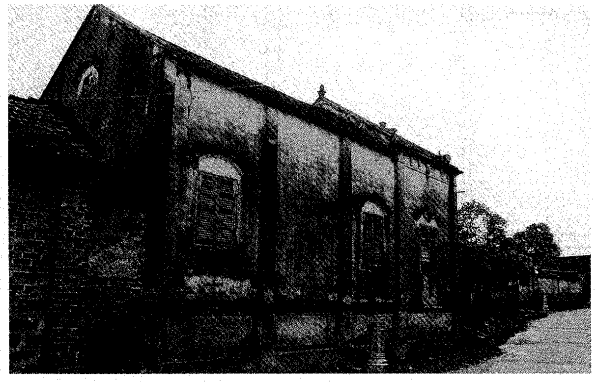


図6-174　Nguyen Van Vung邸　主屋　外観　街路側

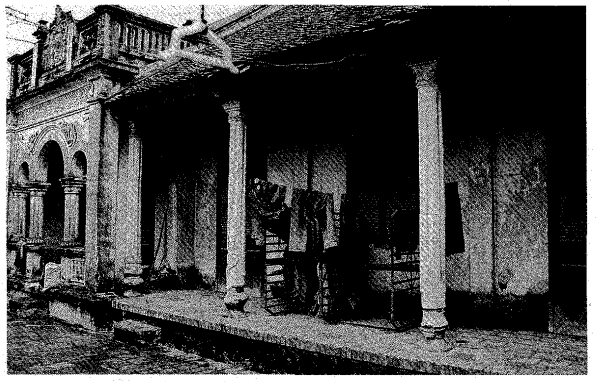


図6-175　Nguyen Van Vung邸　主屋　外観　中庭側

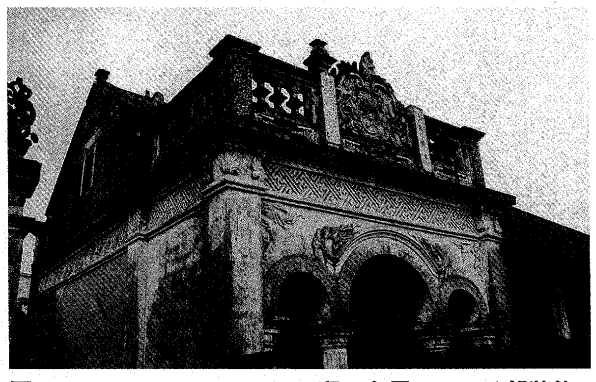


図6-176　Nguyen Van Vung邸　主屋　アーチ部装飾

図6-177　Nguyen Van Vung邸　主屋　廂架構

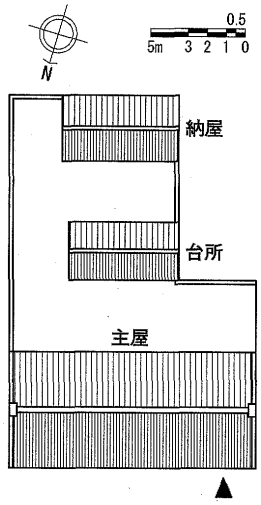


図 6 -178　Nguyen Van Vung邸　配置図

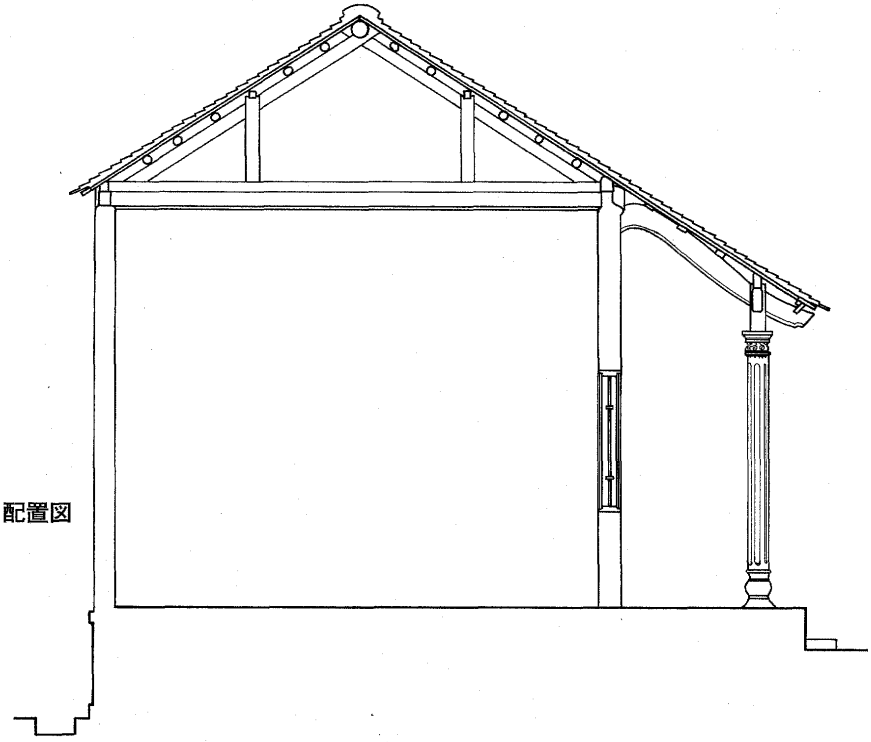


図 6 -179　Nguyen Van Vung邸　主屋　断面図　1：75

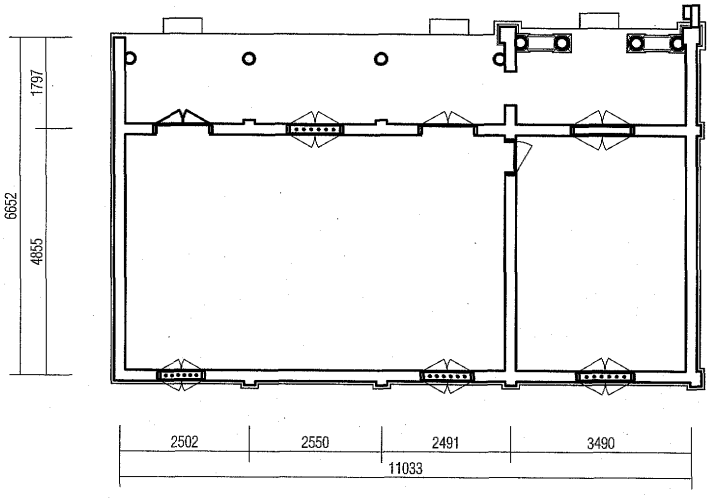


図 6 -180　Nguyen Van Vung邸　主屋　平面図　1：150

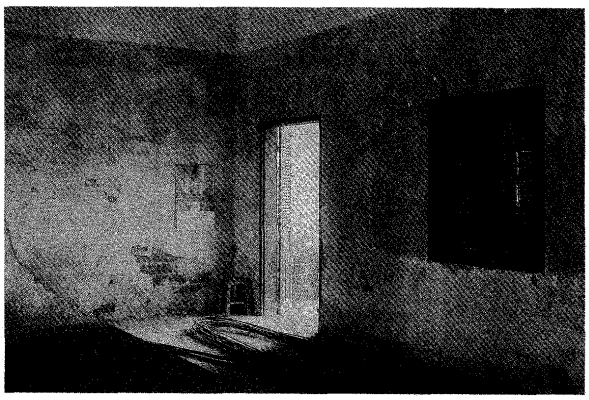


図 6 -181　Nguyen Van Vung邸　主屋　内部

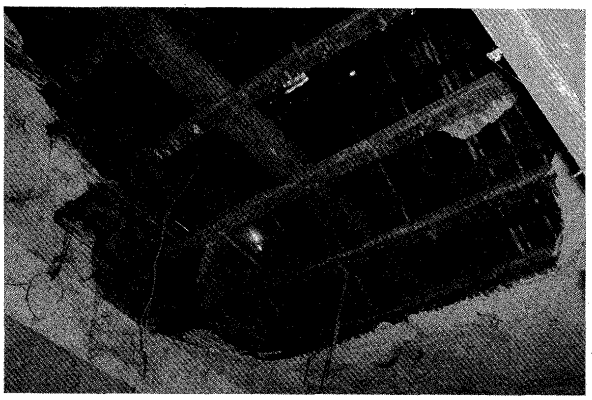


図 6 -182　Nguyen Van Vung邸　主屋　天井

(21) Ha Van Lam邸

モンフー集落（Ⅱ－055）

当家はモンフー集落の中ほどに位置し、集落内を東西に横切る路地に面して敷地を構える。敷地の規模は東西約25m、南北約20mで路地に北面し、南半の中央に設けた中庭を正面にして各建物をコの字に配置する。

建物は、敷地北側の路地沿いに主屋と納屋を並べて建て、この間に中庭に通じる正門を設ける。また敷地の南西部、主屋の正面西側に台所を別棟で建てる。この他、敷地の南側に倉庫や家畜小屋など、小規模な建物を数棟建てる。

主屋は桁行７間、梁間４間、切妻造、シングル瓦葺の平屋で中庭に面した南側を正面とする。全体規模は桁行17.8m、梁間7.8mで、正面梁間１間分の孫廂を吹き放ちとする。柱間寸法は身舎中央部の正柱を桁行約2.48m、梁間約2.44mのほぼ正方形とし、桁行方向にはこれとほぼ同等の2.20～2.50mの柱間で柱を配る。対して梁間方向の柱間寸法は狭く廂で1.45m、孫廂で0.95mである。

内部は桁行中央３間を主室とし、左右の桁行２間を側室として、室境となる柱間を竪羽目の板壁で区切る。このうち正面側柱部分には装飾的な木枠をまわした扉口を開いて板戸を設ける。また正面を除く三方には、独立した煉瓦壁を側柱の外側にまわして閉じる。開口部は正面の側柱筋のみにあり、すべての柱間に扉口を開く。建具は中敷居の上に木枠をまわし、内開き２枚の桟戸を設ける。

柱は礎石建の円柱で、すべての柱筋の交点に柱を立てる。軸部は木割が太く、繰形や彫刻も彫りが深く丁寧で、全体に上質な造りをみせる。中央部分の軸部は、身舎を胴差で繋ぎ、廂は胴差と同高の繋梁で繋ぐ。身舎上の小屋組は、２重の小屋梁の上に立てた２本の小屋束に横木を渡し棟木を支える形式が若干変形したものである。身舎柱と廂柱の間には斜梁を架けて母屋桁を支え、このうち正面の斜梁は孫廂柱まで延び、その先端には彫刻を施す。

現在の敷地は当家が1900年頃に購入したもので、主屋は250年ほど前の建築と伝えられる。建築年代を直接示す資料はないが、その建築様式は近隣の民家の中でも古式を留めるものであり、集落内の民家でもっとも古い19世紀前半の建築に推定できる。

（金井　健）

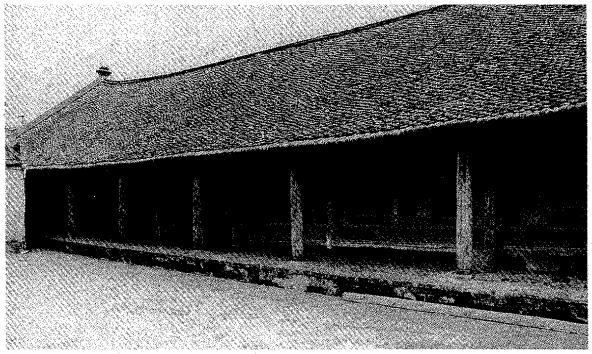


図６－183　Ha Van Lam邸　主屋　外観

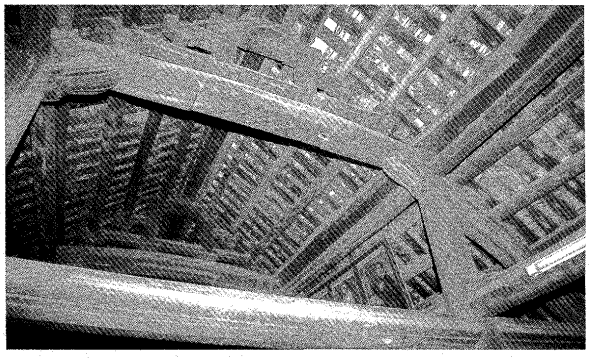


図６－184　Ha Van Lam邸　主屋　身舎架構（正柱間）

図６－185　Ha Van Lam邸　主屋　内部

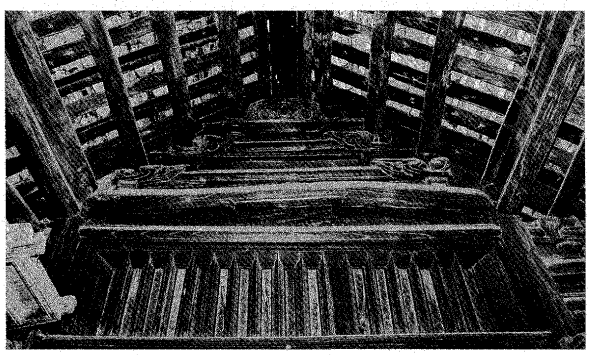


図６－186　Ha Van Lam邸　主屋　身舎架構（室境）

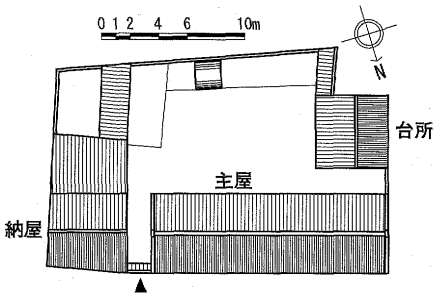


図 6 -187　Ha Van Lam邸　配置図

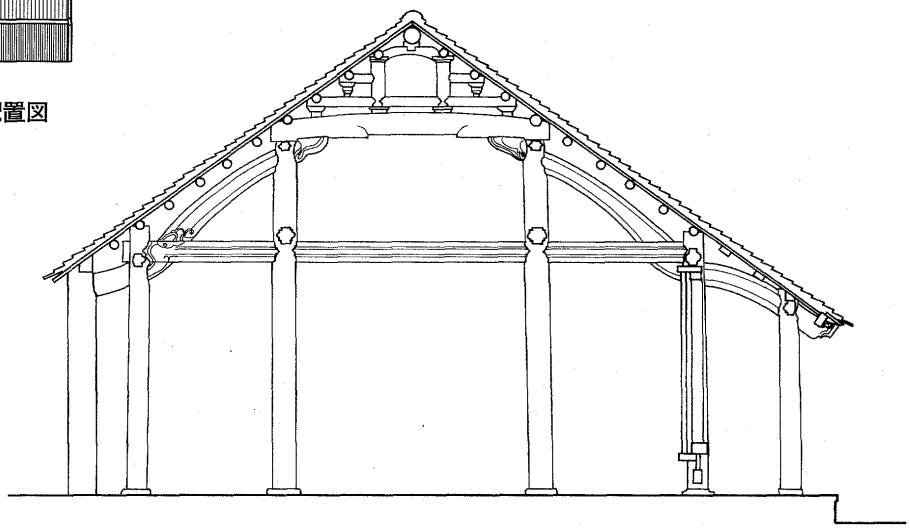


図 6 -188　Ha Van Lam邸　主屋　断面図　1：75

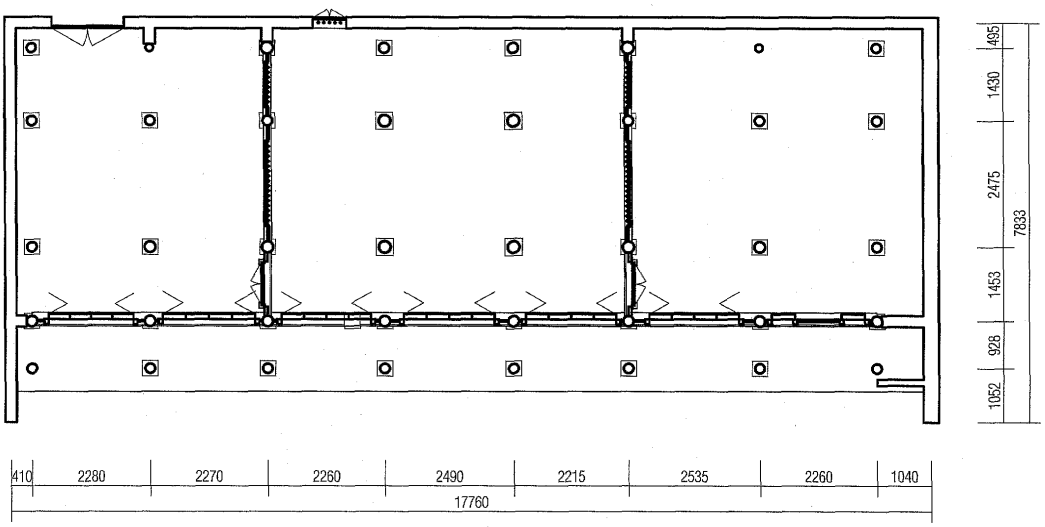


図 6 -189　Ha Van Lam邸　主屋　平面図　1：150

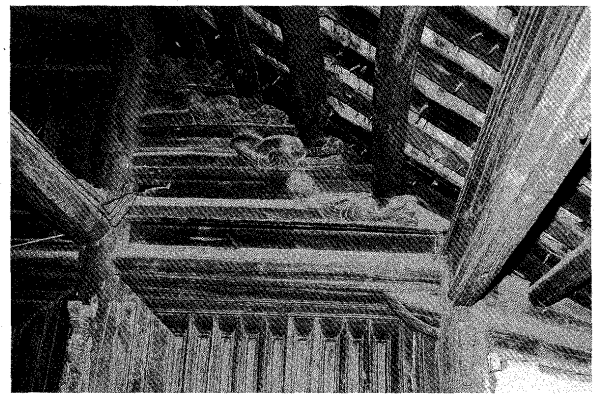


図 6 -190　Ha Van Lam邸　主屋　廂架構

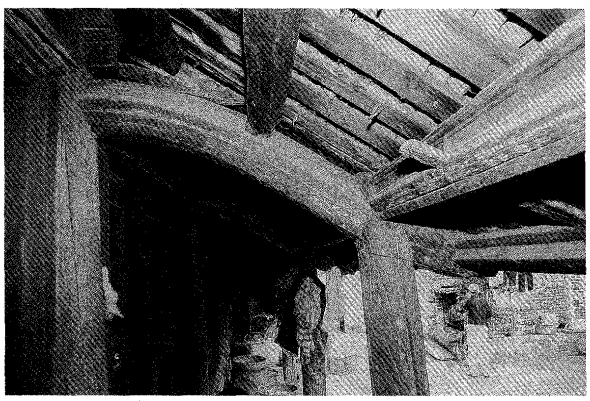


図 6 -191　Ha Van Lam邸　主屋　孫廂架構

(22) Nguyen Van Hang邸

モンフー集落（Ⅱ—074）

当家はモンフー集落の南部、集落の外周部近くに位置し、路地までを通路でつなぐ、いわゆる旗竿型の敷地である。敷地の規模は東西約15m、南北約23mで、西側の北寄りに路地と接続する通路が取り付き、敷地の南半に設けた中庭に面して各建物を配置する。

建物は、敷地の北側に主屋を南面して建て、敷地の東側南寄りに台所と納屋を南北に並べて建てる。台所と主屋の間には井戸など水場を露天で設け、また敷地の周囲を塀で囲み、路地と面したところに正門を設ける。

主屋は桁行5間、梁間4間、切妻造、シングル瓦葺の平屋建で、正面の軒先のみフランス瓦葺としている。全体規模は桁行13.6m、梁間7.9mで、正面奥行き1間部分の孫廂を吹き放ちとする。柱間寸法は身舎中央の正柱間が桁行2.49m、梁間2.33mと広く、その他桁行方向には約2.20mの柱間で柱を配る。対して梁間方向の柱間寸法は狭く廂が1.10m、孫廂が0.78mである。

内部は桁行中央3間を主室、左右を側室として、室境となる柱間を竪羽目の板壁で区切る。このうち正面側柱部分には装飾的な木枠をまわした扉口を開いて板戸を設ける。また正面を除く三方には、独立した煉瓦壁あるいはラテライト積の壁を側柱の外側にまわして閉じる。開口部は正面の廂柱筋に設けた扉口のみで、すべての柱間に扉口を開く。建具は中敷居の上に木枠をまわし、内開き4枚の桟戸を設ける。現在、東側の側室正面はラテライト積の壁とし、開口部も片開きの板戸を設けているが、これは1960年代に改造したものという。

柱は礎石建ちの円柱で、すべての柱筋の交点に柱を立てる。軸部は木割が細く、また母屋桁に曲材を多用するなど、全体に簡素な造りである。中央部分の軸部は、身舎を胴差で繋ぎ、廂は胴差と同高の繋梁で繋ぐ。身舎柱上の小屋組は、小屋梁の上に立てた2本の小屋束に横木を渡して棟木を支え、また小屋束から挿肘木を2段に出して母屋桁を支える。身舎柱と廂柱の間には斜梁を架けて母屋桁を支え、このうち正面の斜梁は孫廂柱まで延び、その先端には彫刻を施す。

主屋の建築年代は19世紀中頃と伝えられ、建築的特徴もこれと矛盾するものではない。また主屋は、基準尺を刻むという間竿を残す建物としても貴重な存在である。（金井　健）

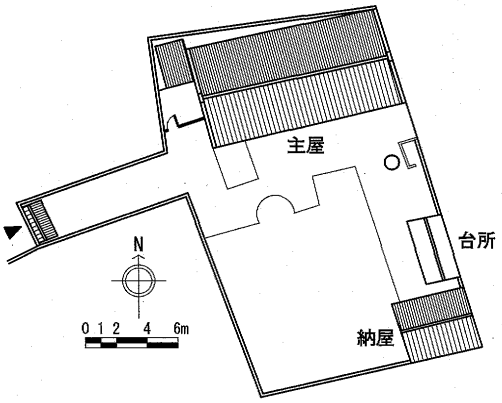


図6-192　Nguyen Van Hang邸　配置図

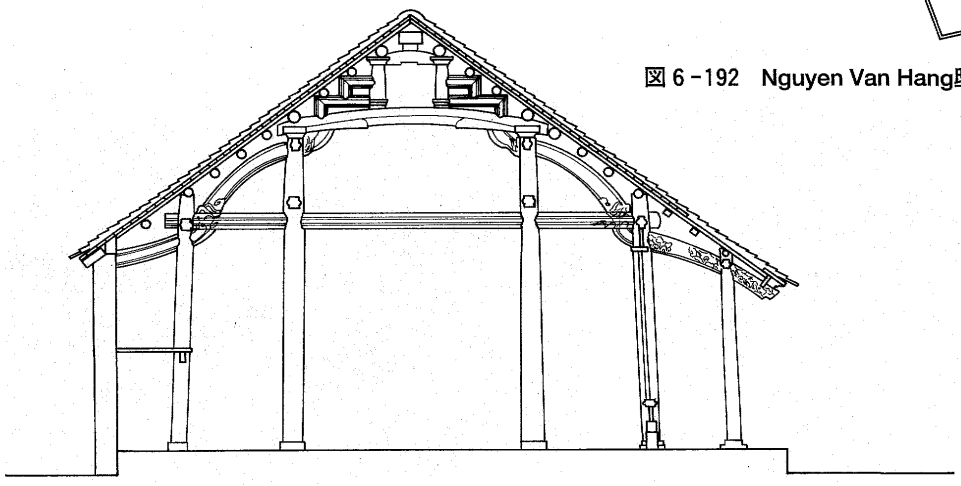


図6-193　Nguyen Van Hang邸　断面図　1：75

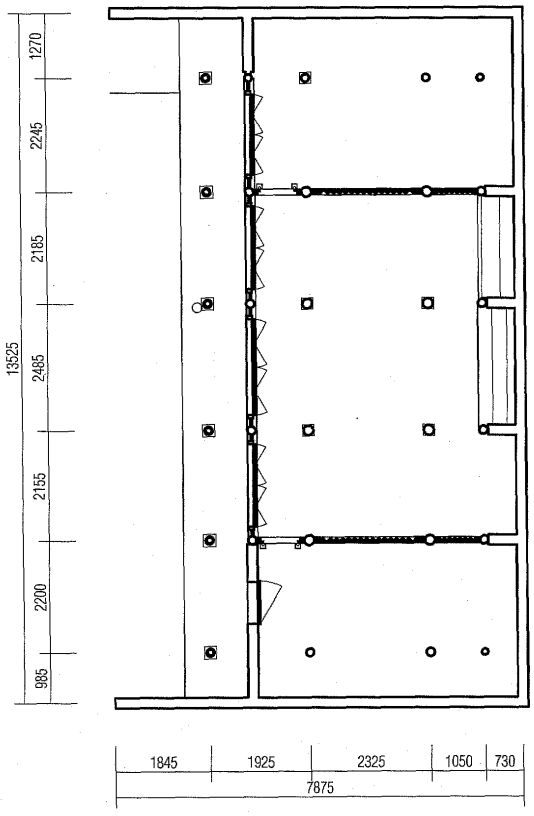


図 6 -194　Nguyen Van Hang邸　主屋　平面図
1：150

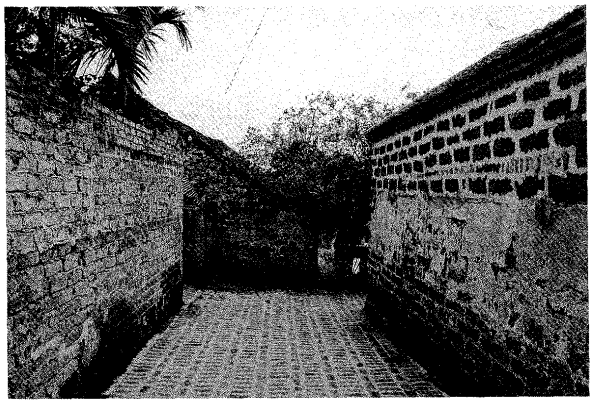


図 6 -195　Nguyen Van Hang邸　主屋　外観　街路側

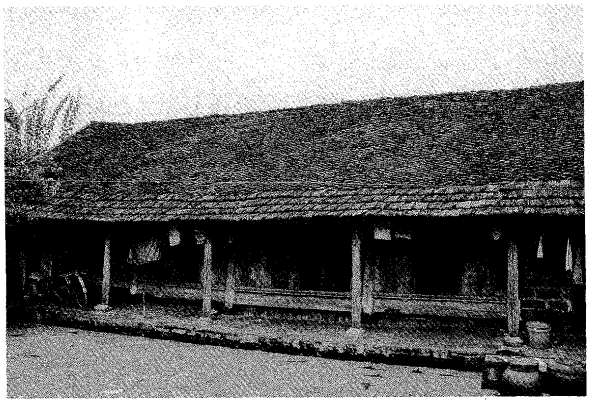


図 6 -196　Nguyen Van Hang邸　主屋　外観　中庭側

図 6 -197　Nguyen Van Hang邸　主屋　内部

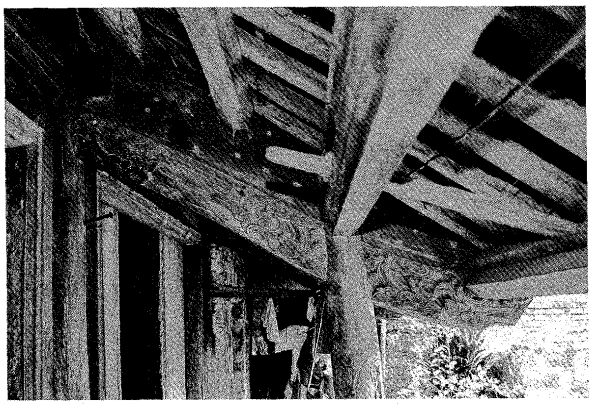


図 6 -198　Nguyen Van Hang邸　主屋　孫廂

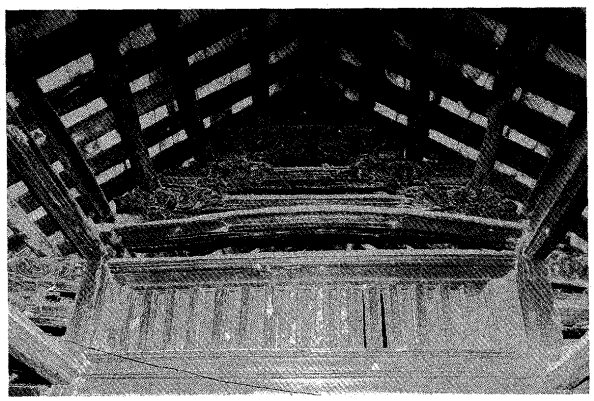


図 6 -199　Nguyen Van Hang邸　主屋　室境架構

図 6 -200　Nguyen Van Hang邸　主屋　扉まわり

(23) Phan Van Truc邸

モンフー集落（Ⅱ－107）

代々農業を生業としてきた家柄で、現在のご主人（2004年に45歳）が７代目という。ラテライト造の鶏舎の一部に門を開き、主屋は入って右手に南面し、鶏舎３棟のほか台所や浴室を建てる。これらの付属屋はいずれも1968年以降の建築である。主屋は嗣徳帝時代（1848～1883年）に建てられたと伝える。

主屋は桁行４間、梁間４間、切妻造、シングル瓦葺で、高さ40cmほどの基壇上に立つ。正面向かって右から３間を主室とし、左手（西）には側室を設けるが右手（東）の側室はない。吹き放ちの正面孫廂柱にはセメントを用いて装飾を施し、正面廂柱筋も煉瓦下地の上にセメントを塗って、外開きの扉を構える。外壁は下部をラテライト造とし、1975年に改造した東妻の上部は日干煉瓦でつくる。

主室内部は中央背面の壁に寄せて祭壇を、その前に牀をおく常套的な構成。主屋最大の特徴は、主室内部正面側の身舎柱２本を抜く点で、当初材と思われる胴差と孫廂の斜梁尻に彫られた絵様の様相が合うことから、建立当初より柱を抜く構造だったと考えられる。身舎は奥行方向を６本の母屋桁で割っており、比較的規模の小さな中下層の農家と言える。架構は、主室中央２筋は小屋梁上に束を立てて斜梁と二重梁を落とし込み、廂・孫廂は斜梁とする。主室－側室境は、身舎・廂部分を束と横材を一体化した卍崩状の架構とし、孫廂は斜梁式とする。主室中央間正面向かって右側の小屋梁下面に「丁丑参月初捌日竪柱上樑大吉」の墨書がある。

1975年に主屋全体をかさ上げしたほか、側室や廂柱筋の扉、屋根まわりなど大改造を施した。柱にはその時の仕事と思われる根継ぎ（43cm程度）がある。その際、柱底部を切断した可能性はあるが、かさ上げ前の軒高は150cmを越えないと考えられ、当初の軒高はかなり低かったろう。なお、かさ上げは瓦を下ろして建物を持ちあげたという。

軒高の低さや彫刻の彫りの浅さなど古い要素がみえるものの、小屋梁下面の装飾技法のほか、身舎正面柱２本を抜く架構などから、丁丑年は保大12年（1937）に相当すると考えられる。すると正面孫廂柱のオーダーの上部は建立当初の可能性があり、改造は多いながらも当初形態をよく保つ農家と考えられる。（箱崎和久）

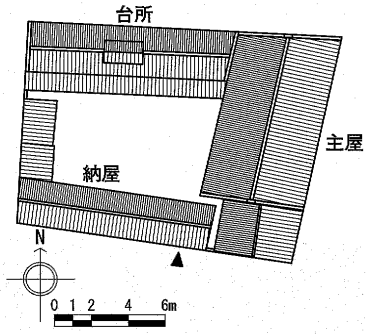


図６－201　Phan Van Truc邸　配置図

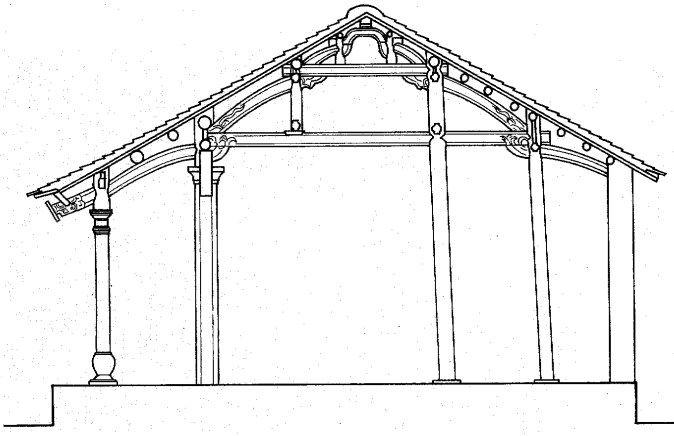


図６－202　Phan Van Truc邸　主屋　断面図　1：75

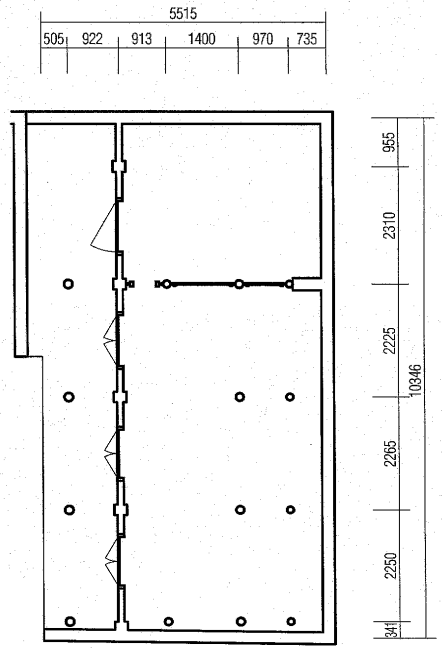


図６－203　Nguyen Van Truc邸　主屋　平面図　1：150

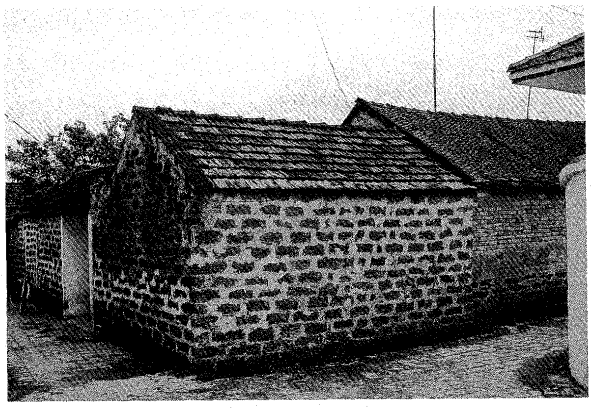


図 6 - 204　Nguyen Van Truc邸　主屋　外観（街路側）

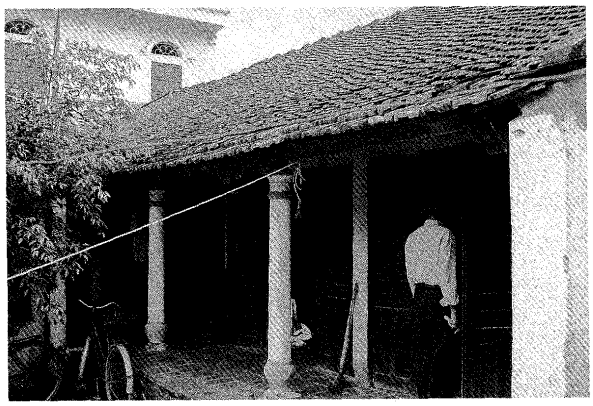


図 6 - 205　Nguyen Van Truc邸　主屋　外観（中庭側）

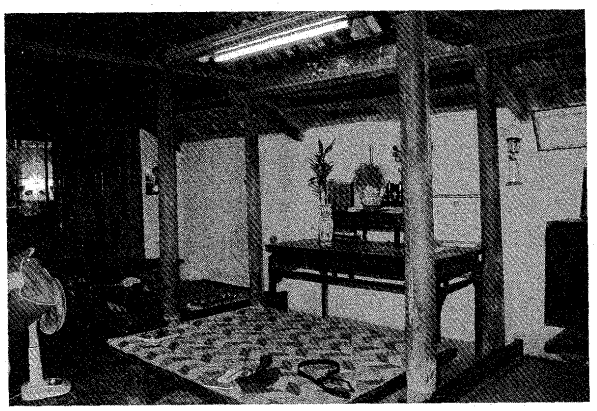


図 6 - 206　Nguyen Van Truc邸　主屋　内部

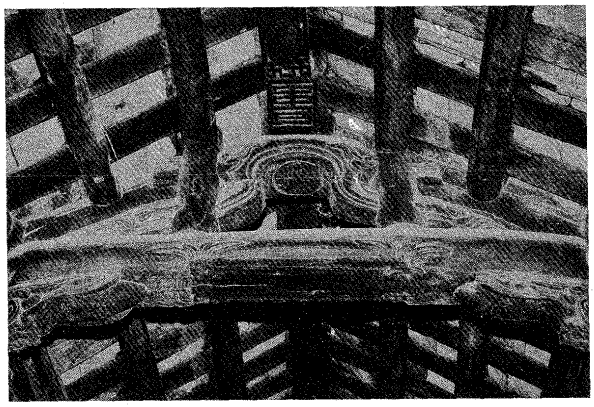


図 6 - 207　Nguyen Van Truc邸　主屋　身舎架構

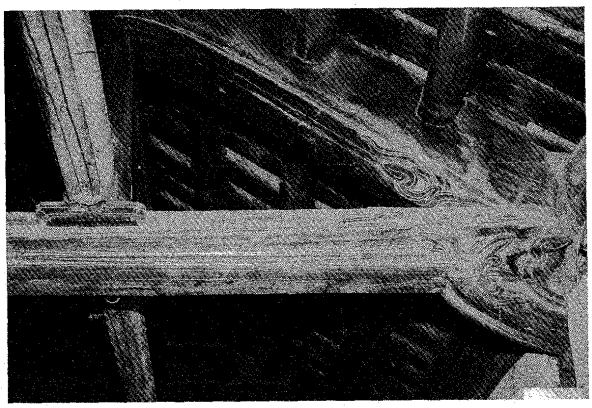


図 6 - 208　Nguyen Van Truc邸　主屋　廂架構

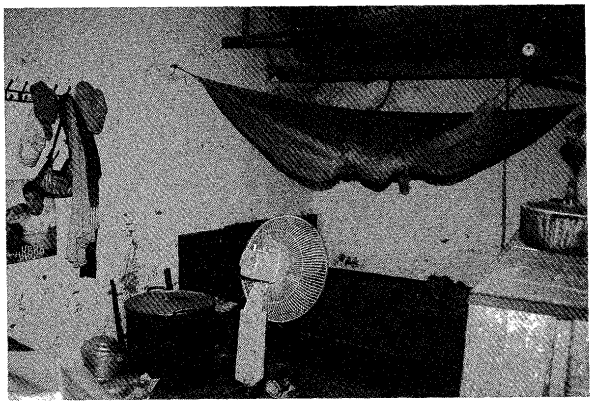


図 6 - 209　Nguyen Van Truc邸　主屋　側室

図 6 - 210　Nguyen Van Truc邸　主屋　孫廂

図 6 - 211　Nguyen Van Truc邸　軒先

(24) Nguyen Tien Dong邸

モンフー集落（Ⅲ－002）

現当主で初代から6代目という農家である。主屋は村長だった初代の当主が建てたと伝える。敷地は南の東西道路と鉄製フェンスで隔て、中庭を介して正面に主屋を、左手に台所を建てる。当初は左右の隣家の敷地もこの家の所有だったが、1958年に接収されたという。

主屋は桁行5間、梁間4間、切妻造、シングル瓦葺（正面軒先をフランス瓦に改修）で、全体規模は、桁行13.8m、梁間8.0mである。高さ34cmの基壇上に南面し、西端間のみ正面孫廂柱筋まで室内に取り込んでいるが、痕跡から、当初は吹き放ちで、他の柱間と同様、廂柱筋に腰高の扉を設けていたことがわかる。桁行中央3間を主室とし背面に寄せて祭壇を設け、両側面1間を側室として寝室に充てる一般的な平面である。

架構をみると、主室中央2筋は、身舎が小屋梁上に束を立て二重梁と斜梁、廂・孫廂が斜梁の構造で、室境は身舎が小屋梁上に束と横材を一体化した卍崩し状、廂・孫廂も胴差高の繋梁上に卍崩し状の材を置く構造とする。通常、室境は装飾彫刻で飾るが、ここでは西側の室境を1958年に煉瓦壁に改修し、東の室境も失われている。

しかし、装飾の力点は室境よりも中央2筋の構造材に彫られた彫刻にあるようだ。すなわち、小屋梁下面には向かって右に「嗣徳己卯春」、左に「竪柱上梁吉」の銘を刻み、それを四角で囲った外側を彫刻で飾っている。さらに火炎形彫刻の内部に「乾元亨利貞」のうち、右に「元」「亨」を、左に「利」「貞」を刻みだす。また、小屋梁に立つ束下には、通常、大斗を置くが、ここでは造り出した薄い蓮弁で束を受ける繊細な架構となっている。このほか、軒先の彫刻も彫りがやや深く、出来が良い。

梁銘の干支は嗣徳32年（1879）に相当し、架構や彫刻からみて、建立年代をこの年とみて誤りない。少なからず改造はあるが躯体におよぶものでなく、中規模農家の質の高い主屋として、編年の基準となる貴重な物件と言えるだろう。（箱崎和久）

図6-212　Nguyen Tien Dong邸　主屋　外観

図6-213　Nguyen Tien Dong邸　主屋　内部

図6-214　Nguyen Tien Dong邸　主屋　側室

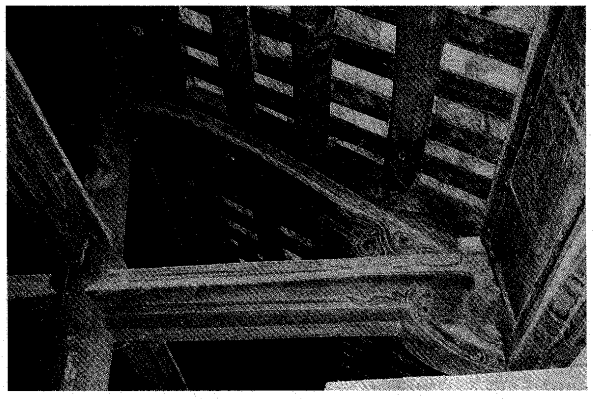


図6-215　Nguyen Tien Dong邸　主屋　廂架構

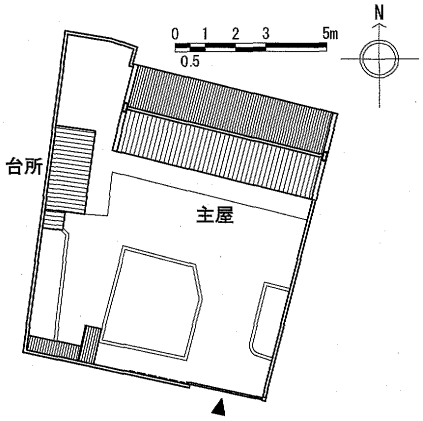


図 6 -216　Nguyen Tien Dong邸　配置図

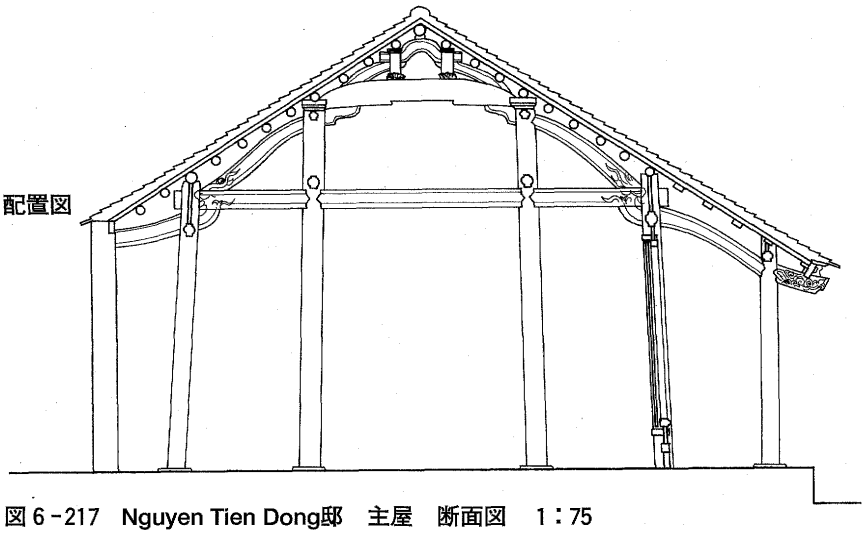


図 6 -217　Nguyen Tien Dong邸　主屋　断面図　1：75

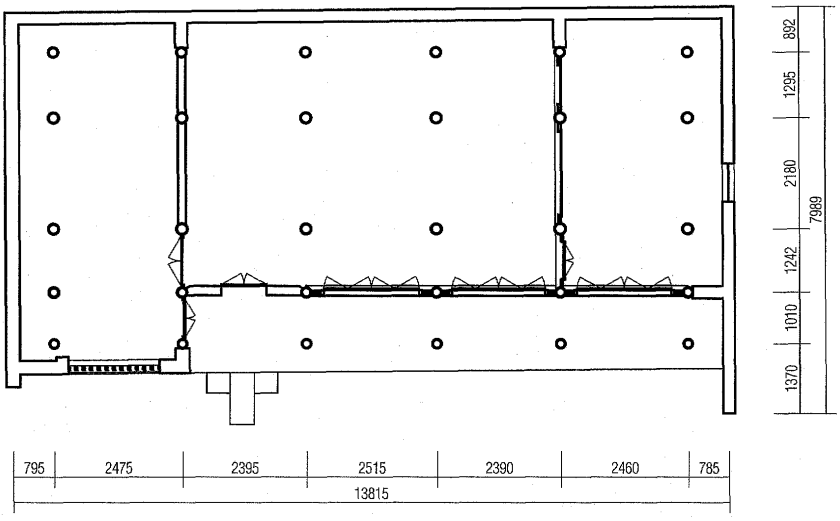


図 6 -218　Nguyen Tien Dong邸　主屋　平面図　1：150

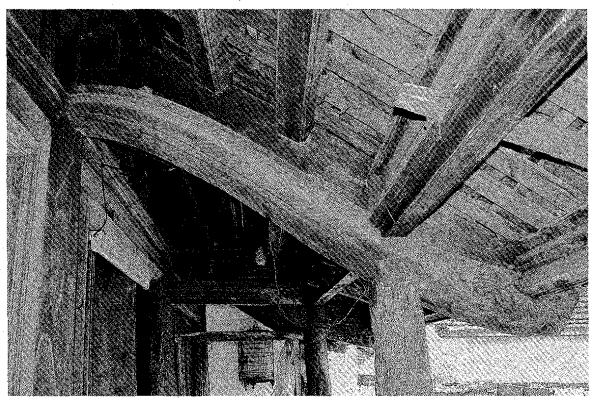


図 6 -219　Nguyen Tien Dong邸　主屋　孫廂架構

図 6 -220　Nguyen Tien Dong邸　主屋　扉まわり

(25) Ha Van Vinh　邸

モンフー集落（Ⅲ－009）

現在の当主は2001年まで小学校の先生をしていたがもとは農家という。主屋ができてから現当主で４代目で、祖父の代には、村の人々を招く必要から1924年に主屋を改造したといい、1928年には現当主のお父さんが村長になったという。

東西道路の北側に門を開き、道路に沿って台所（1981年建築）を配し、入って左手に東面する主屋をおく。当初は敷地がもう少し広かったという。

主屋は桁行５間、梁間４間、切妻造、シングル瓦葺で、全体規模は桁行13.3m、梁間6.8mである。正面中央３間にアーチをもつ開口部と欄干を備え、あたかも門のような外観が特徴的である。内部は主室の正面廂柱２本を抜き、身舎の柱筋に内開きの板扉を設け、正面側奥行２間を接客用、背面側奥行２間を家族用として空間を分けている。また側室も正面孫廂まで内部空間として用いる。

架構は、主屋中央２筋の身舎では小屋梁上に束を立て、二重梁をのせて束の両側に斜梁をかけ、廂は斜梁をかけ下ろす。廂柱は、孫廂柱から身舎柱に２間分の梁を架けることによって省略し、廂柱位置の梁上に束を立てて上部構造を支持する。室境の架構のうち、身舎は湾曲した小屋梁上に、材端部に彫刻のある横架材を２段重ねて短い束を立て、逆Ｕ字形に強く湾曲した二重梁をのせる。廂は繋梁上に束を立て、彫刻をもつ横架材の３段重ね。孫廂は斜梁形式とする。室境のほか、接客空間の構造材に施された彫刻は優秀である。

むかって左手の小屋梁下に「嗣徳癸丑春」（嗣徳６年＝1853）の墨書銘があり、創建年はこの年と見てよい。しかし、室境の正面廂柱に腰高開口部の痕跡があり、当初は正面１間吹き放ちの伝統的な形態だったらしく、正面中央２筋の奥行２間梁に施された籠彫状に彫りの深い彫刻も、他と異なり後補である。これと外観にみられる門のような構えが1924年の大きな改修点であろう。

後世の改修も少なからずあるものの、創建および大改修の形態が判明し、有力農家の社会背景が建築に現れた貴重な事例といえるだろう。（箱崎和久）

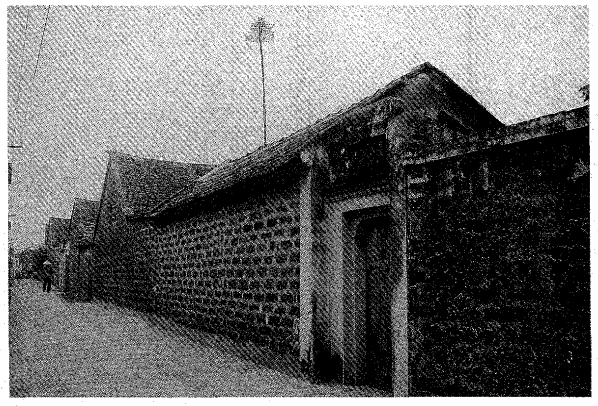


図６－221　Ha Van Vinh邸　門

図６－222　Ha Van Vinh邸　主屋　外観

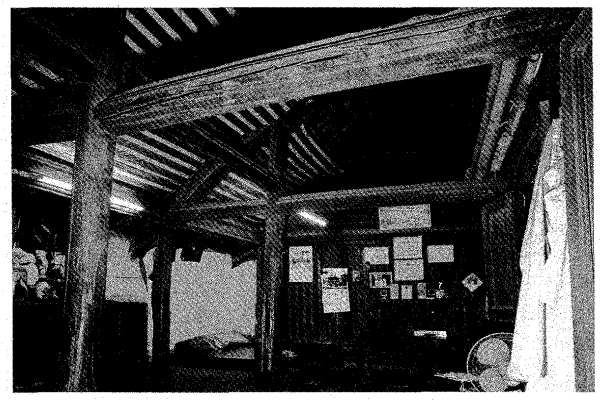


図６－223　Ha Van Vinh邸　主屋　内部

図６－224　Ha Van Vinh邸　主屋　架構

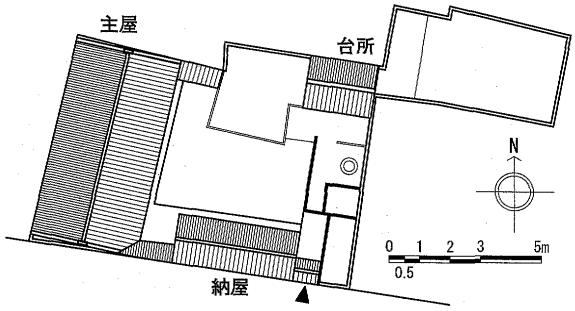


図 6 - 225　Ha Van Vinh邸　配置図

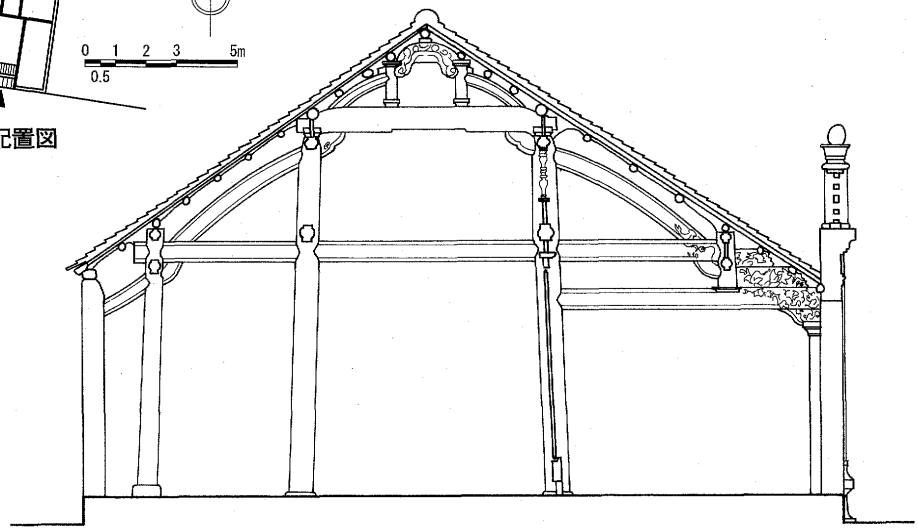


図 6 - 226　Ha Van Vinh邸　主屋　断面図　1：75

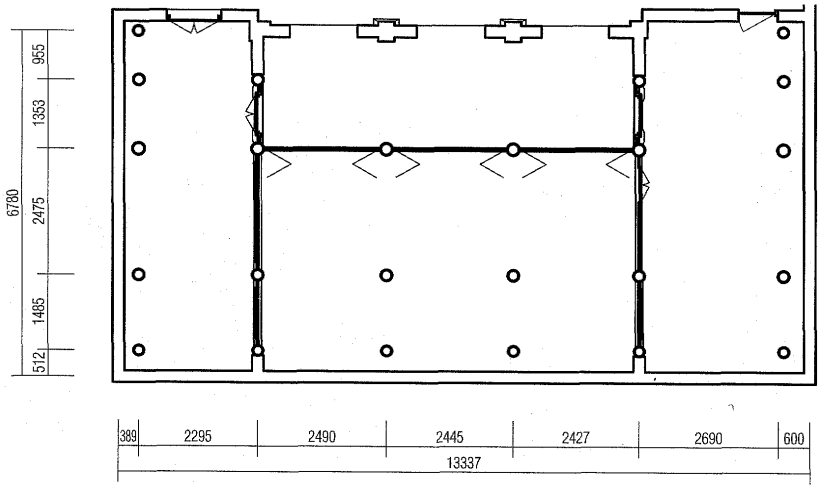


図 6 - 227　Ha Van Vinh邸　主屋　平面図　1：150

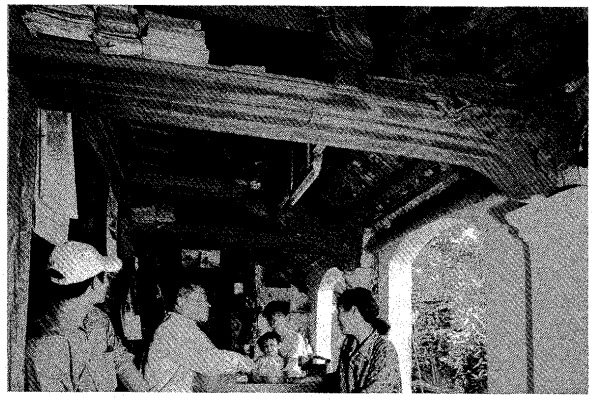


図 6 - 228　Ha Van Vinh邸　主屋　孫廂

図 6 - 229　Ha Van Vinh邸　主屋　ファサード装飾

(26) Do Doan Duong邸

モンフー集落（Ⅲ－062）

現当主がこの家の７代目。朝廷の大臣だったという初代の祖先の祠堂として、２代目が建物を移築して建築したと伝える。南進する袋小路の最奥にあり、植栽の豊富な中庭の周囲に台所・鶏舎・倉庫を建てる（いずれも1994年以降）。敷地は分割相続によって細分されたといい、以前はもっと大きかったらしい。

主屋は北面し、桁行５間、梁間４間で全体規模は桁行15.1m、梁間7.4mである。正面孫廂を吹き放ちとし、間口中央３間を主室、その両脇を側室とする一般的な間取りをもつ。側室の正面側の廂柱を立てず梁間方向に通した胴差上に束を立てるが、材の感じから２間とばしの胴差は後補で、後世に柱を切断する改修がおこなわれたらしい。正面廂柱筋は、最下部の土台に改修があるものの、56cm程度の高さをもつ当初の柱間装置を残している。

つぎに架構をみると、主室中央２筋では、身舎が小屋梁上に束を立て湾曲する二重梁をのせ、束の両脇に斜梁を備える形式で、廂・孫廂は斜梁を架け渡す。主室－側室境では、身舎および廂が横材と竪材を一体化させた卍崩し状の材で母屋桁を受け、孫廂は斜梁とする。装飾で目立つのは、両端を除く正面４筋の孫廂の斜梁に施した彫刻で、やや彫りの深い雲もしくは波状の文様が、軒先持ち送り部分だけでなく、斜梁の側面全体に彫られている。また室境の開口部にも火炎状の彫刻がある。

主室正面向かって右側の身舎小屋梁下面には、「庚辰夏月成」、左側には「竪柱上樑吉」の銘を彫り、周囲をやや控えめな彫刻をほどこした枠で囲う。庚辰年は嗣徳33年（1880）と考えられ、装飾的要素の少ない主体部には、創建当初のものをよく残していると見られる。移築後と考えられるのは、正面孫廂の彫刻のある斜梁や、側室の減柱だろう。規模的にも中下層程度に位置づけられ、室内によく当初形態を残す農家の主屋として貴重だろう。（箱崎和久）

図６－230　Do Doan Duong邸　門

図６－231　Do Doan Duong邸　主屋　外観

図６－232　Do Doan Duong邸　主屋　内部

図６－233　Do Doan Duong邸　主屋　廂架構

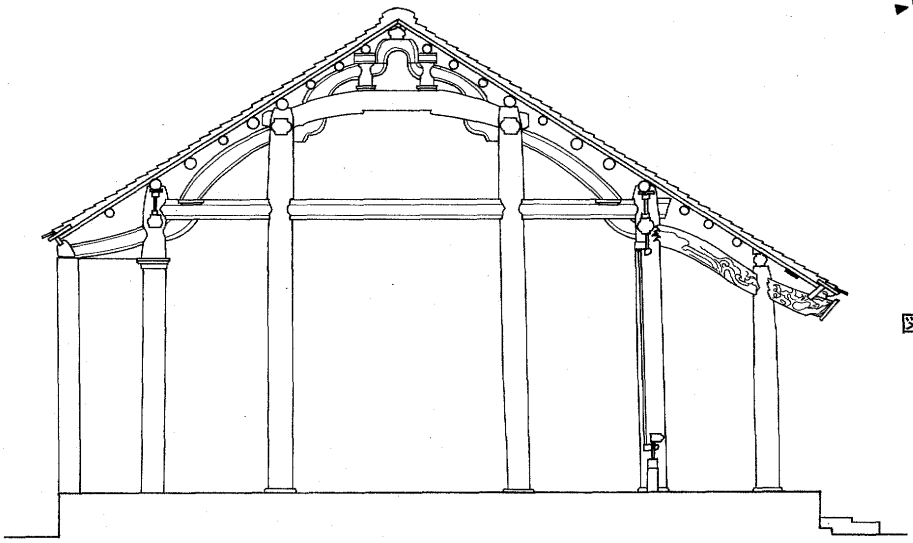


図 6 - 235　Do Doan Duong邸　主屋　断面図　1：75

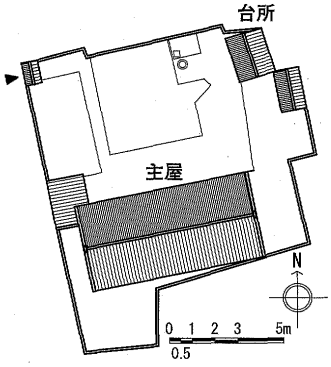


図 6 - 234　Do Doan Duong邸
配置図

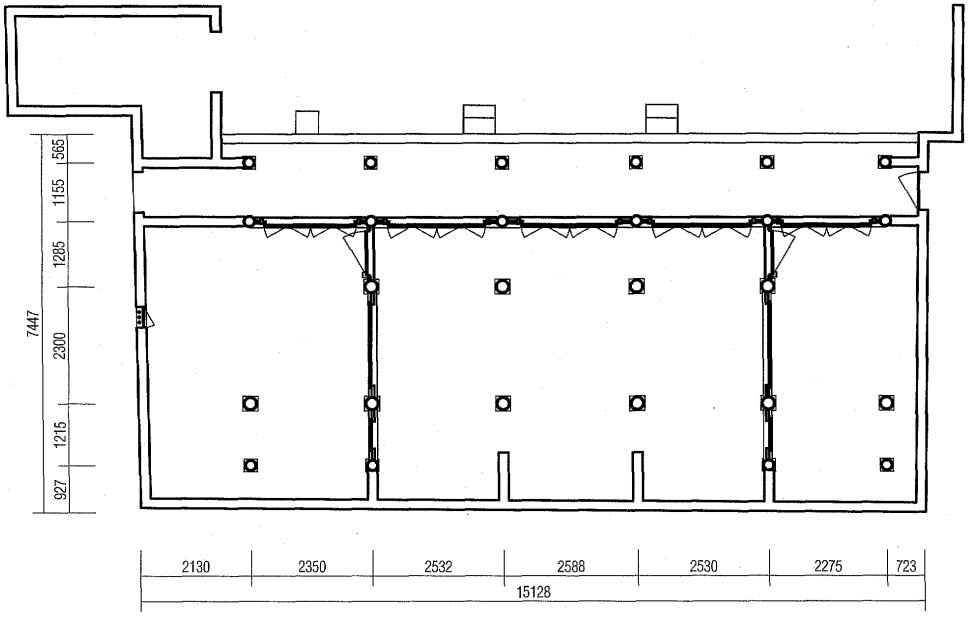


図 6 - 236　Do Doan Duong邸　主屋　平面図　1：150

図 6 - 237　Do Doan Duong邸　主屋　背面架構

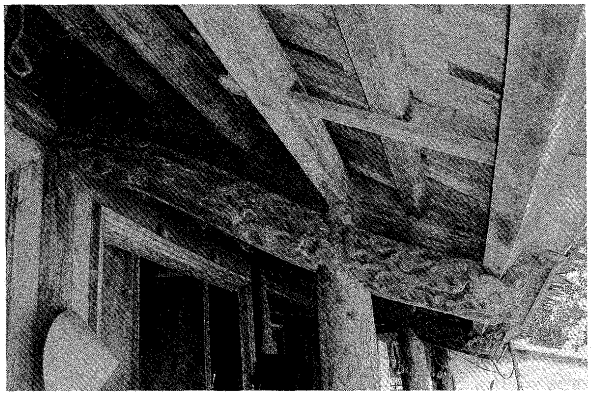


図 6 - 238　Do Doan Duong邸　主屋　孫廂

(27) ディン　カムティン

カムティン集落（Ⅳ－055）

カムティン集落の西南部に位置し、北側に集落を南北に二分する東西道路が、東側にはモンフー集落からの道路が走り、その交差点に位置する。ディンは東面し、その正面に10年ほど前に立てたという門柱および塀を設ける。前面の南北道路は幅がやや広がるものの門前の広場はなく、ディンの井戸は敷地の南側の塀の外に位置する。ディンの東方に煉瓦敷きの広場がひろがり、それを囲うようにディンの南方には東面するデンを、ディンの南東方には10年ほど前に建てたというハウクンが北面するなど、敷地構えがよく残っている。

ディンは基壇上に建ち、正面側に入母屋造の本体部分、背面に切妻造の建物を突出させ、平面凸字形をなす。前面部分はティエンバイと呼ばれ、背面突出部分はハウクンと呼ばれる。このように背面を突出させる形式はモンフー集落のディンと共通するが、ここでは切妻造妻入としている点で異なる。

ティエンバイ部分は桁行5間、梁間3間、入母屋造、シングル瓦葺で、側背面はラテライトの壁で囲まれ、全体規模は正面15.2m、奥行16.4mである。定型通りに身舎と廂の構成をとり、身舎・廂ともに中央間を方形煉瓦敷の土間とし、その両側は床張りとする。正面柱筋には、床高から少し上に敷居を入れて、内開きの板扉を備え、側背面はラテライトの壁で閉塞される。土間部分の奥には祭壇が設けられ、ハウクンに厨子をつくりつける。ハウクンはティエンバイから1.94mの取り合い部分をもち、正面3間、奥行1間で、三方をラテライトの壁で囲う。ハウクンの正面は中央間に厨子の扉を4枚構え、両脇間は片開戸として、出入り口としている。

架構は、一般農家と異なり、身舎の梁間方向に胴差を通さずに、柱上に巨大な小屋梁を架けるのが特徴的で、この小屋梁の下には、龍の彫刻を丸彫した持ち送りを飾る。小屋梁上では上下が斗で挟まれた2本の束を立て、束上の凸形の梁で棟木を受け、束の両側は斜梁で母屋桁を受ける。廂にも巨大な繋梁をかけ、繋梁上の彫刻が施された幕板で母屋桁を受ける。隅木は真隅にはいり、身舎柱筋の端の柱が廂柱的に扱われ、身舎柱筋の端から2本目の柱上に隅木が納まり、ここに妻が立ち上がる。

拝殿中央間2筋の小屋梁下面に「啓定丙辰冬」、「竪柱上樑吉」の字を刻み出しており、啓定元年（1916）の建立が明確で、年代が確定する建築として貴重である。モンフーのディンと比べると、規模も小さく装飾も簡素だが、木太く堂々としており、敷地構えも残る点で、20世紀を代表するディンと言えよう。（島田敏男）

図6-239　ディン　門

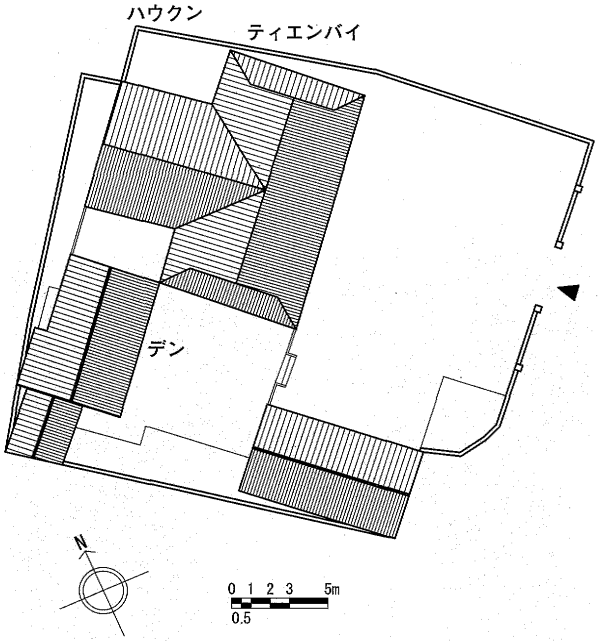


図6-240　ディン　配置図

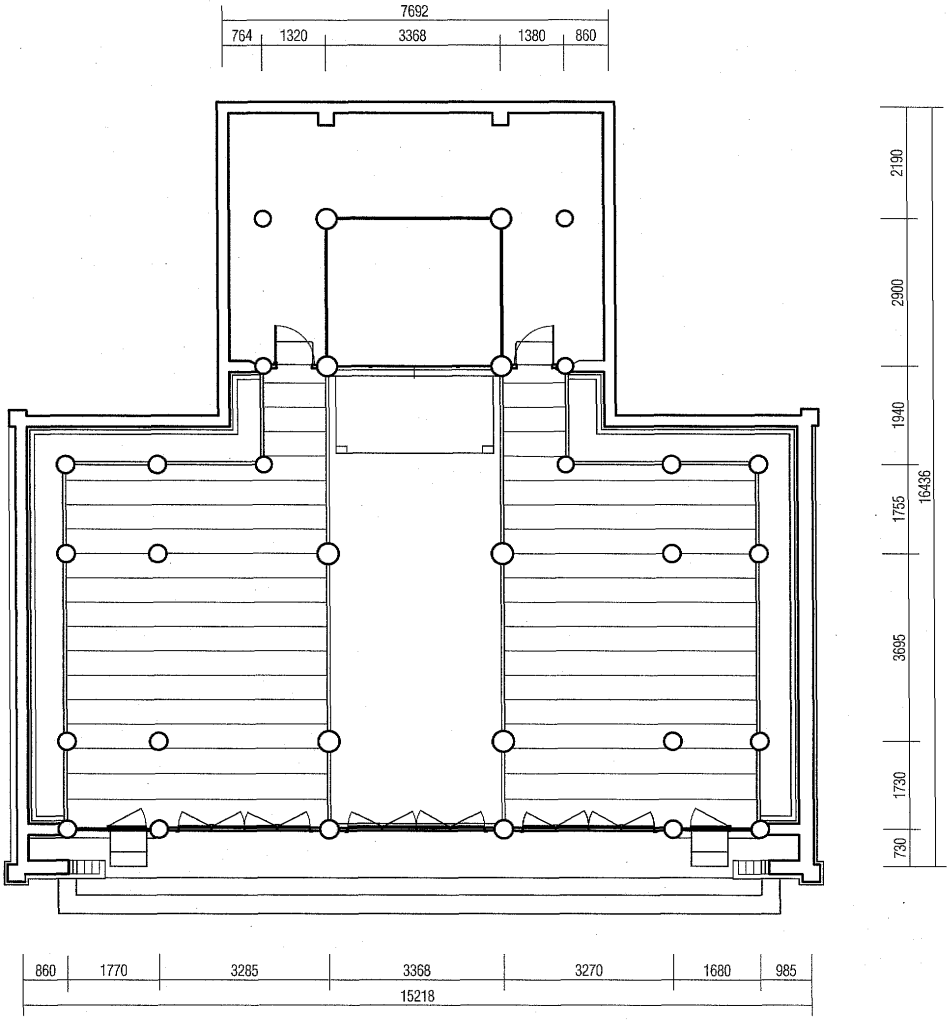


図6-241　ディン　平面図　1：150

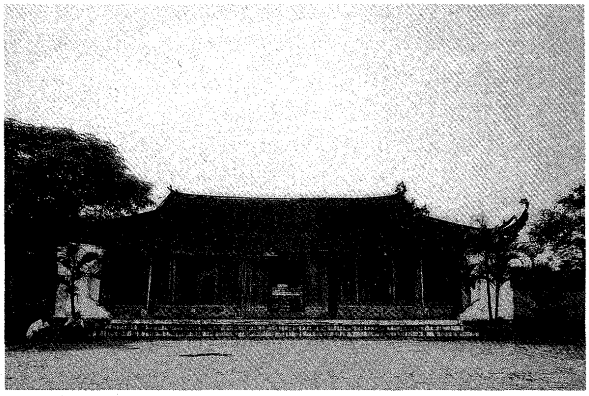


図6-242　ディン　正面

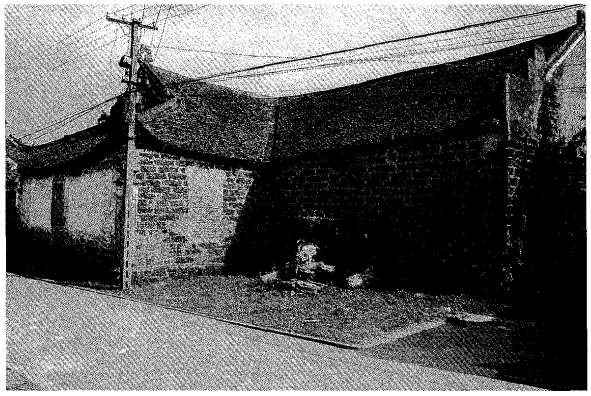


図6-243　ディン　背側面

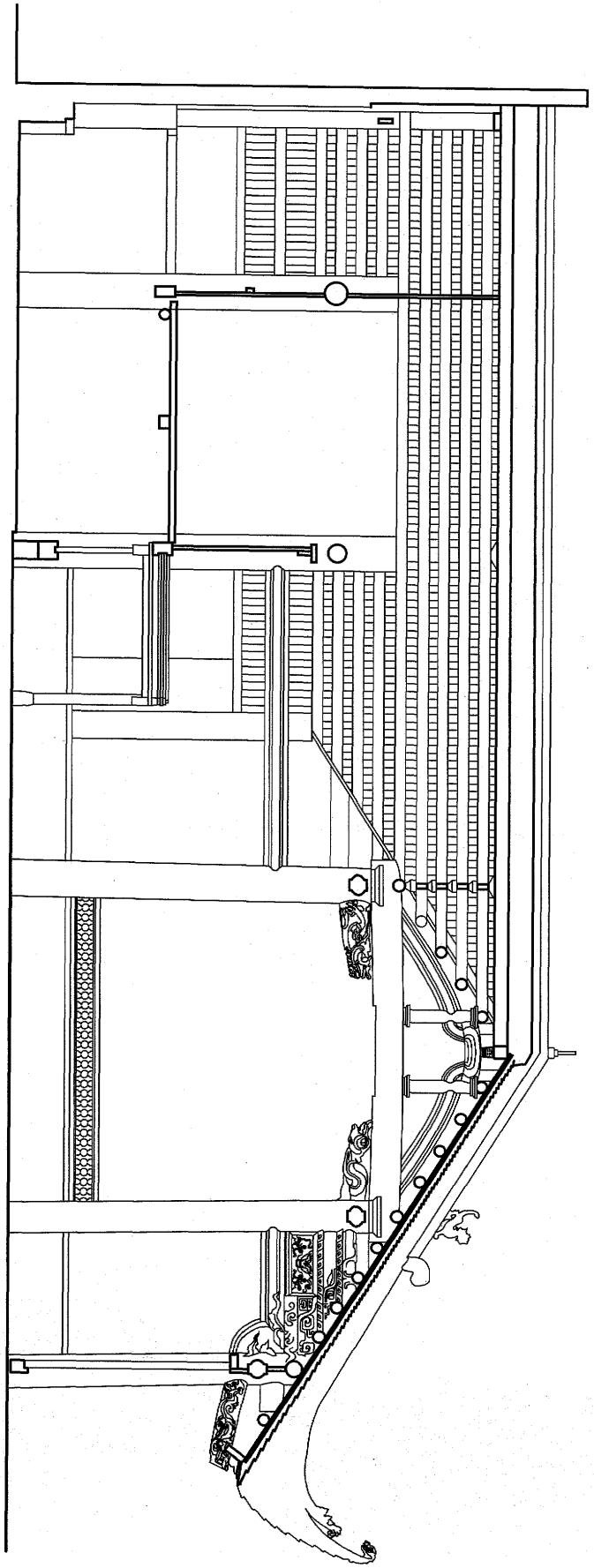


図６-244　ディン　断面図　1：75

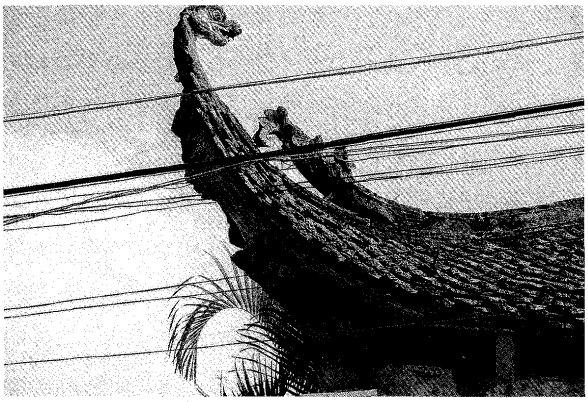


図6-245　ディン　屋根詳細

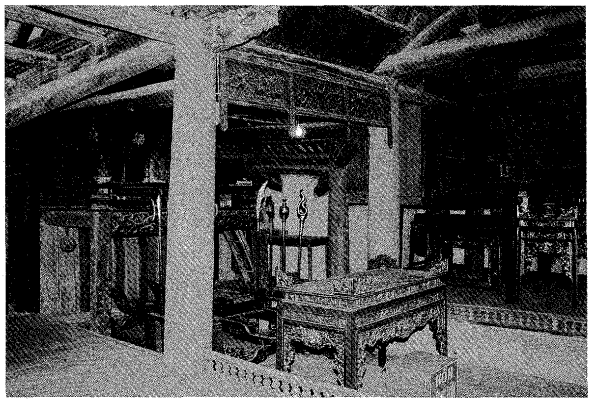


図6-246　ディン　内部

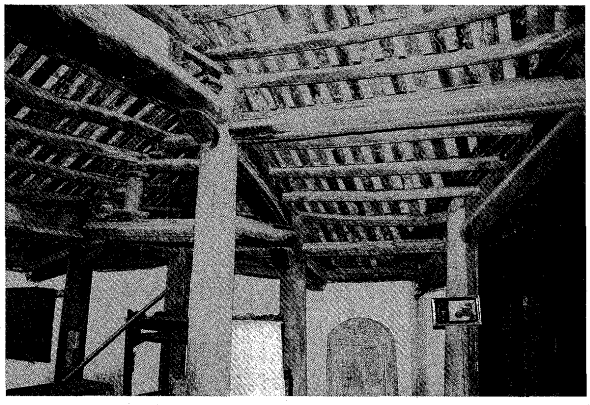


図6-247　ディン　内部隅部

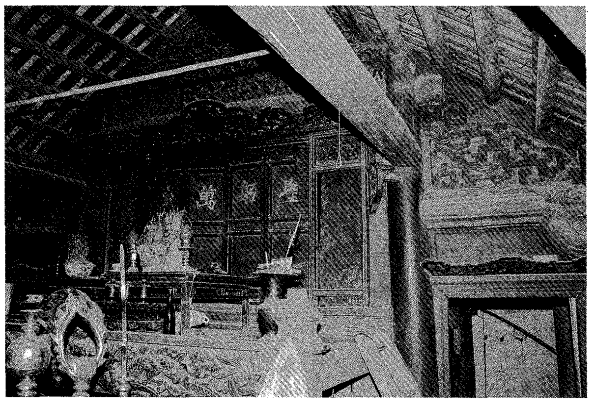


図6-248　ディン　ハウクン正面

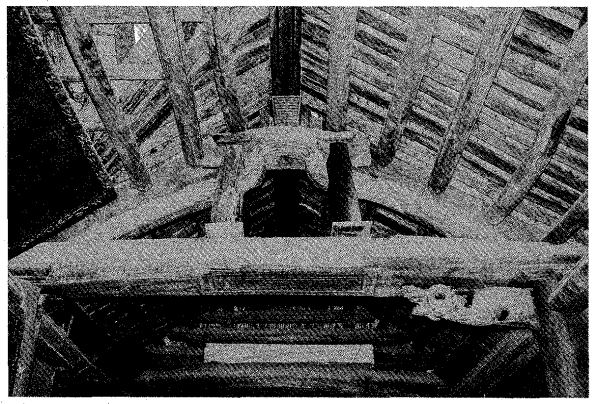


図6-249　ディン　身舎架構

図6-250　ディン　廂架構

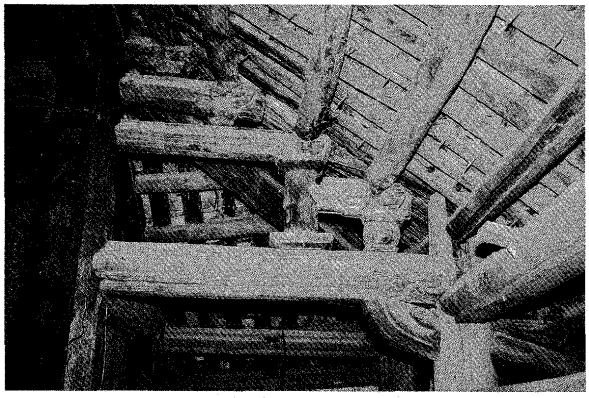


図6-251　ディン　廂架構

図6-252　ディン　軒先

(28) Truong Van Quyen邸

カムティン集落（Ⅳ－108）

現当主が12代目という農家で、現当主の父が早逝したため沿革は不明である。敷地は、カムティン集落の北西、集落を南北に二分する東西道路から北にのびる袋小路の入口に位置し、南北道路に門（1998年再建）を開ける。門を入ると、タイル敷広場を介した正面に一段高く植え込みをつくり、左手に南北棟の台所（1999年建築）を、右手に主屋を配する。

主屋は北面し、桁行５間、梁間４間で、全体規模は桁行11.0m、梁間6.4mである。中央３間を主室、両端間各１間を側室とする一般的な間取りをもつ。正面孫廂は東端間を側室内に取り込んでいるが、これは痕跡から見て後補で、当初は正面孫廂はすべて吹き放ちだったことがわかる。孫廂の床はタイル張り（現当主の記憶にない以前から）だが、主室東端間をタイル張り（約20年前）とするほかは側室を含め土間で古風を残す。

身舎中央２筋の架構は、小屋梁上に円束を立てて二重梁を支持し、円束両脇に同断面の横材と竪材を組み合わせた形式の架構をもつ。ただし、横材と竪材が直角に折れ曲がらず、横材が竪材よりも外側に突出する点がやや特異である。身舎の主室－側室境の架構もほぼ同様の架構とする。また室境の廂部分も同様の架構要素とし、廂の中央２筋を斜梁とするのと対照的である。孫廂および軒先はいずれも斜梁式である。装飾細部は、小屋梁下の彫刻と小屋梁持ち送り、廂繋梁と斜梁の材端部、軒先の斜梁鼻の彫刻などで、室境の壁が改造されていることもあって、比較的簡素である。両側室は架構を含め改造が大きいが、主室は当初形式をよく残している。屋根も３年に１度程度補修しているというが、フランス瓦を用いず伝統的なシングル瓦で整えられ、軒が低く古風な外観をもつ。

柱の省略もなく伝統的な平面をもつが、全体規模、柱の細さ、装飾の簡素さ等から、中小農家の典型と考えられる物件である。土間で軒が低いなどの古様も社会的・経済的な側面を反映していると思われる。建築年代は明確でないが、身舎小屋梁下の彫刻の様相から、19世紀後期と考えられる。（箱崎和久）

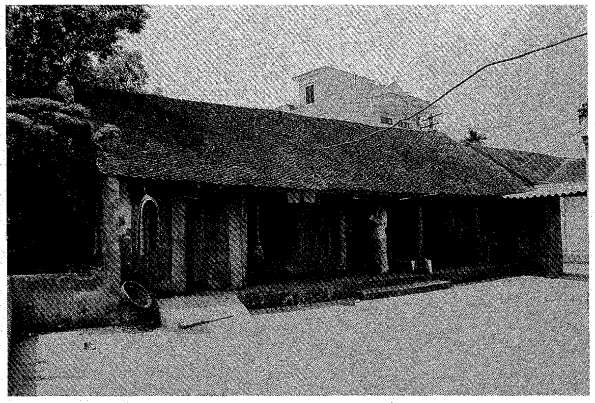


図６－253　Truong Van Quyen邸　外観

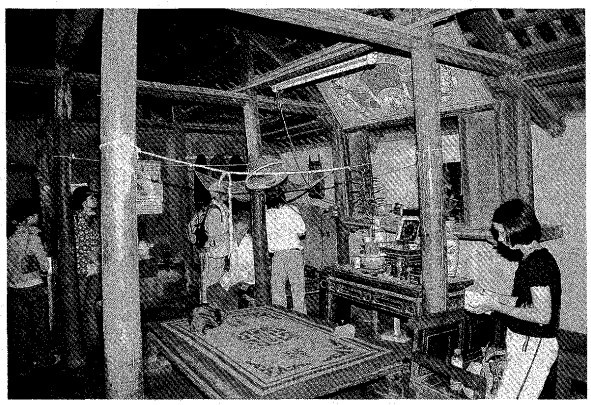


図６－254　Truong Van Quyen邸　内部

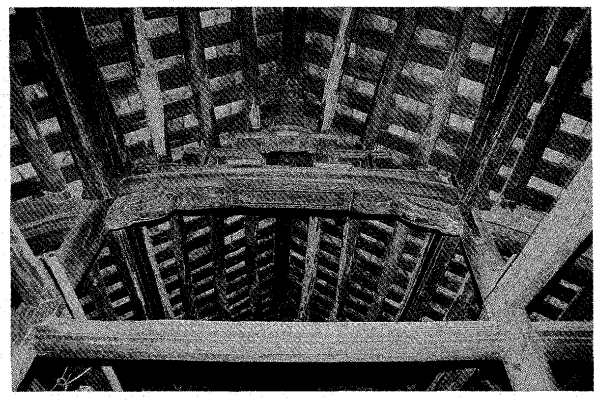


図６－255　Truong Van Quyen邸　身舎架構

図６－256　Truong Van Quyen邸　廂架構

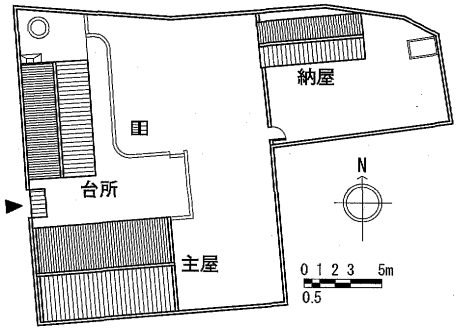


図 6 - 257　Truong Van Quyen邸　配置図

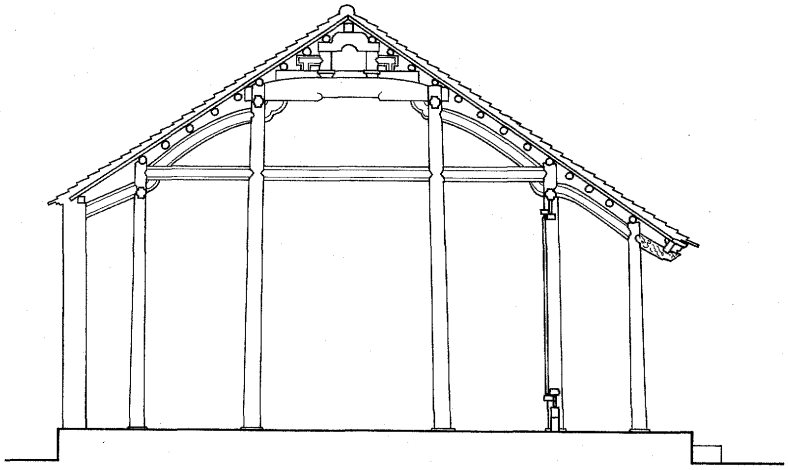


図 6 - 258　Truong Van Quyen邸　断面図　1：75

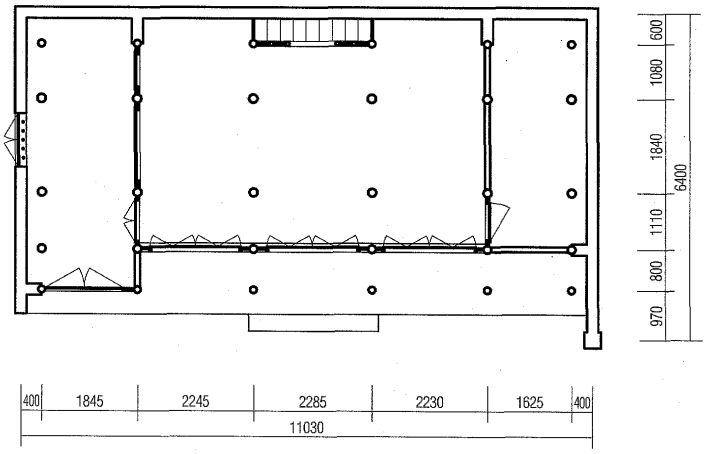


図 6 - 259　Truong Van Quyen邸　平面図　1：150

図 6 - 260　Truong Van Quyen邸　孫廂

図 6 - 261　Truong Van Quyen邸　軒先

(29) Cao Van Toan邸

カムティン集落（Ⅳ−145）

代々農家を務めてきた家柄である。敷地はカムティン集落のディンの正面（東側）に位置しており、門はディン側でなく東方の小路に開ける。門を含む付属屋は近年の建て替えで、門を入った左手に北面して建つ主屋のみが伝統的な建物である。

主屋は桁行５間、梁間４間で、全体規模は、桁行15.7m、梁間8.8mである。桁行中央３間を主室、両端間各１間を側室とするが、主室の背面廂柱２本を省略する。これは背面の壁面に寄せた仏壇を大きくとるためと考えられるが、他例のない特異な平面である。なお現状の仏壇は、柱があっても納まるほどの大きさしかない。正面１間通りは吹き放ちとし、廂柱筋にはいずれも腰高の内開き板扉を設ける。架構は、主室中央２筋の身舎が、小屋梁に円束を立てて二重梁をのせ、束の両脇には斜梁を備え、廂・孫廂は斜梁式とする。背面孫廂柱高から身舎柱に繋梁をかけ、廂柱位置で束立てとして柱を抜く構造をつくる。

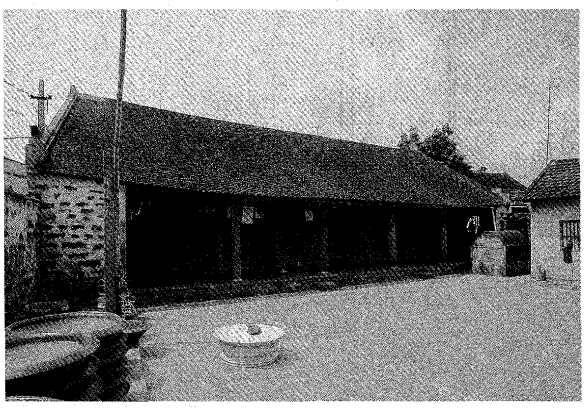


図６−262　Cao Van Toan邸　主屋　外観

図６−263　Cao Van Toan邸　主屋　孫廂

室境は彫刻で埋め尽くされているといって過言でなく、母屋桁を受ける架構も明確でない。とりわけ目を引くのが、主室−側室境の腰高扉となる正面廂部分で、アーチ状の窓枠に沿って火炎形を彫り出し、この上部にも松などをモチーフとした彫刻で飾る。また、孫廂柱にわなぎ込んで軒先までのびる斜梁、および、通常は彫刻がない主室中央２筋にかかる斜梁にも、側面全体に精緻な彫刻が施されている。

主室向かって右の梁下面には「戊戌□年春起工伐木」、左には「夏月吉日竪柱上樑」の銘を彫り、さらにその周囲を額縁の彫刻で飾る。カムティン集落では規模が大きい有力農家の主屋であり、築後300年の伝承もある。たしかに、木割りが太く軒先が低いなどの古い要素も見えるが、柱を省略し梁下銘周囲を飾るのは新しい要素と言え、ここでは、やや新しい感はあるが、戊戌年を成泰10年（1898）と見ておきたい。建具など建立当初の部材をよく残し、農家建築の到達点を示す傑作と言えるだろう。（箱崎和久）

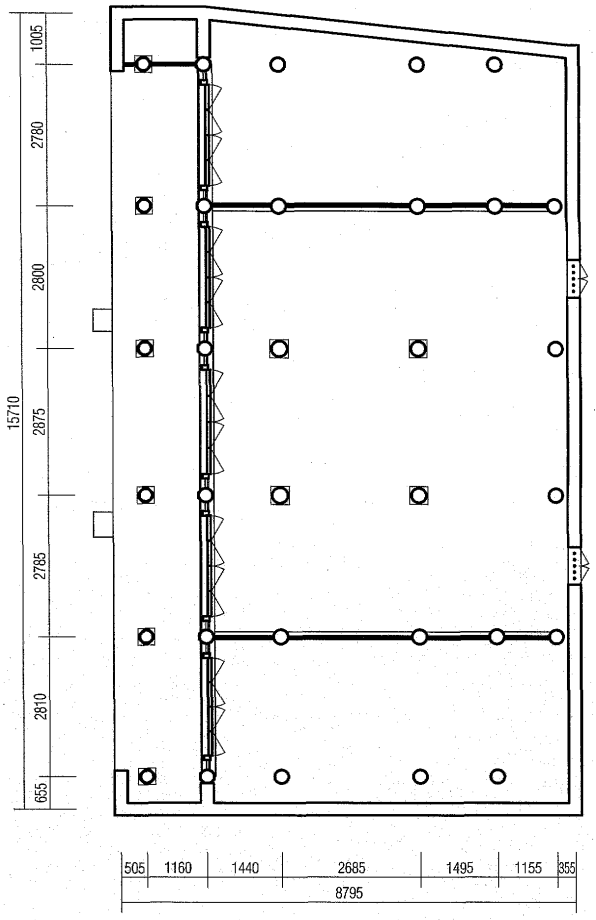


図６−264　Cao Van Toan邸　主屋　平面図　1：150

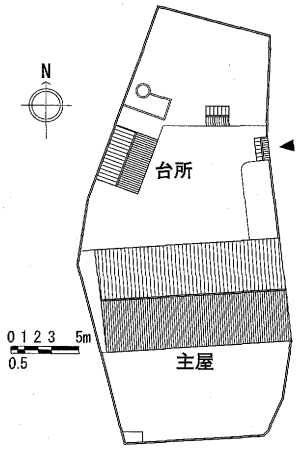


図 6 -265　Cao Van Toan邸
配置図

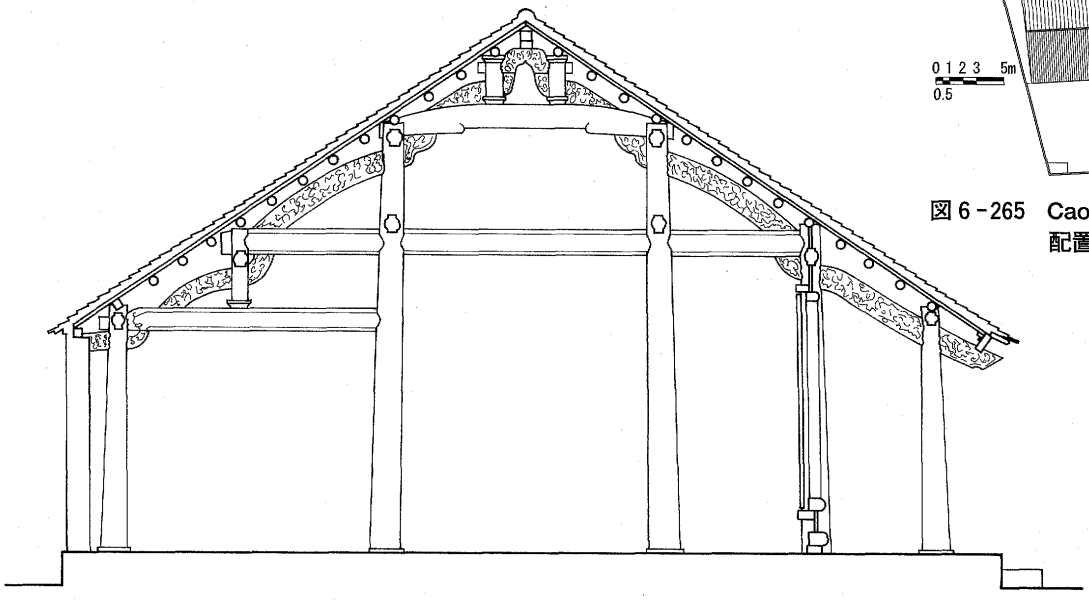


図 6 -266　Cao Van Toan邸　主屋　断面図　1：75

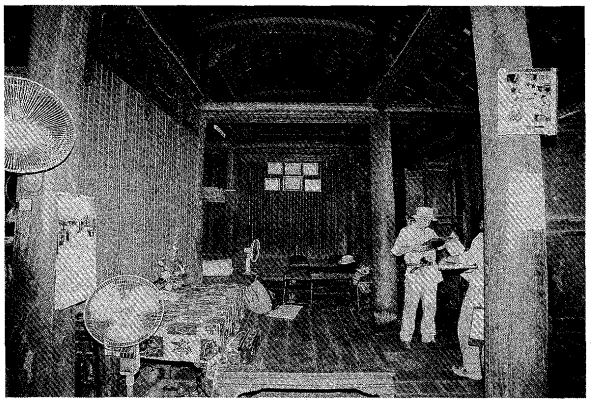


図 6 -267　Cao Van Toan邸　主屋　内部

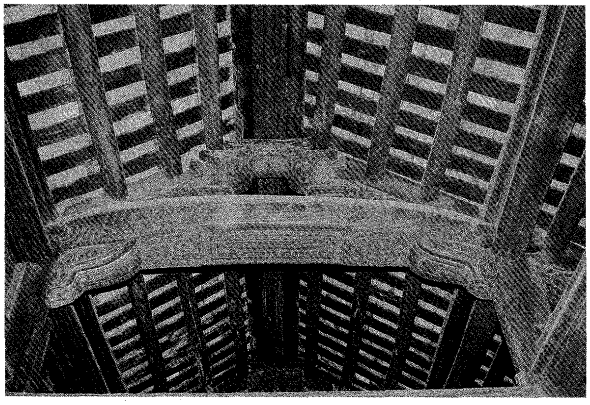


図 6 -268　Cao Van Toan邸　主屋　身舎架構

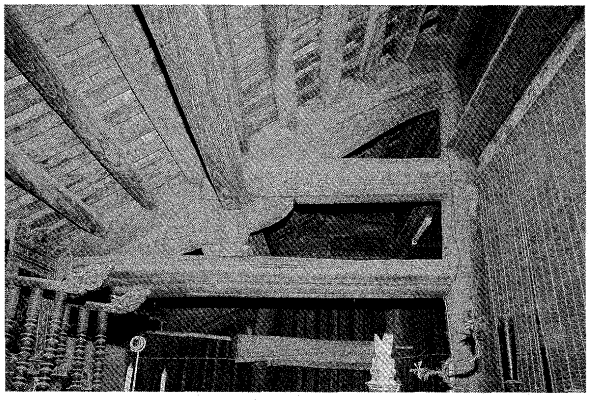


図 6 -269　Cao Van Toan邸　主屋　背面架構

図 6 -270　Cao Van Toan邸　主屋　孫廂架構

(30) ミア寺

ドンサン集落（Ⅲ－316）

ミア寺はドンサン集落の中央部に位置する。ミア寺前は広場になっており、朝には市が立ち、旧ミア村4集落の中心街にあたる。

ミア寺の創建は、寺内に残る石碑によれば、1642年に鄭木荘（清都王）の妃の一人、阮氏が建立したものという。市場に面して門を開き、前庭に石塔が建つ。建物群は、前庭の奥に石門があり、石門をくぐると中庭があり、中庭を囲むように、正面に拝堂にあたるティエンドゥオン（Tien Duong）が建ち、その両側に脇殿にあたるナハック（Nha Khach）が並ぶ。

ティエンドゥオンの背後には南北方向の回廊を介して、その南と北に大規模な堂が並ぶ。南の堂は下寺（Chua Duoi）、北の堂は上寺（Chua Tren）と呼び分けられている。阮氏のために祀った仏像が安置されているのが下寺で、上寺には如来が祀られている。なお、回廊には羅漢が並んでおり、この寺の見所ともなっている。

なお、2000年に寺域全体が修理され、軸部の一部よび小屋の修理と屋根替がおこなわれ、美しい状態となっているが、小屋材についてはこの修理の際にかなりの部材が取り替えられている。

ナハックは、煉瓦造に木造架構をかけた建物で、東のものは2000年に新築され、現在はゲストハウスとして使用されている。ただし、2000年の新築前にも、この位置に建物があり、基本的には従来からティエンドゥオンの前には東西ナハックが並ぶ構えであった。西のものも20世紀後半の建築で、現在は住房として使用されている。いずれも新しい建物であるが、寺観を整える意味での存在価値は高い。

ティエンドゥオンは、木造で、桁行7間、梁間3間、切妻造、シングル瓦葺で全体規模が桁行23.6m、梁間7.6mの大規模な建物である。側面と前面端間にラテライトの壁を立ち上げ、正面中央5間を、高敷居に扉を構え、各間には両開の板戸を3組みづつ並べ、合計6枚の板扉を並べる。内部は1室で、背面側は開放とし下寺とほぼ軒を接するように建ち、下寺と連続した拝堂空間としてつくられている。

内部は土間敷で、一部コンクリートの床がしつらえられている。

礎石上に円柱を立て、身舎梁間方向は胴差で繋ぎ、桁行方向は梁間方向の胴差と背違いで胴差を通す。廂は胴差と同高の繋梁で繋ぐ。身舎の架構は、身舎柱上端を桁行方向の桁で繋ぎ、それと噛み合うように小屋梁をかけ、小屋梁上に斗をもった2本の束を立て、棟木を束上の梁で受け、母屋桁を束外側の湾曲した斜梁で受ける。ただし、妻とその1筋内側では、小屋梁の上に水平材と短い束を重ねた古式な架構法をとっている。廂は湾曲した斜梁をかけ、軒先は片持ちの斜梁で軒桁を受ける。

中央間右正柱間の小屋梁下（当初材）に、板を貼ってそこに「共和社會主義越南春辛巳大修」と墨書されている。一方、中央間左正柱間梁は2000年の修理の際に新材に取り替えられているが、その梁下に「嗣徳陸年捌月日弐社重修大吉」とある。これは、新材に取り替えた際に、当初材に彫られていたものを、新材に写して彫ったものと思われる。様式的には、下寺や上寺よりも降って19世紀の建築を考えられ、梁下銘にある嗣徳陸年すなわち1853年に建築されたものと考えて良い。なお、「重修」は再建を意味するものと考える。

下寺は、東西棟と主体部と、T字形の後堂部からなる。

主体部は木造で、桁行7間、梁間3間、入母屋造、シングル瓦葺で、両側面と背面にラテライトの壁を立て、全体規模は桁行24.1m、梁間7.3mである。ティエンドゥオンに比べて、極めて低い軒が特徴的である。

側面と背面両側（中央は突出部へのつづき）を壁でふさぐが、正面は開放とする。下寺の正面およびティエンドゥオンの背面が開放であることは、当初から、下寺とティエンドゥオンがセット建てられていたものかもしれない。なお、前面廂柱には、足元にホゾ穴があったり、小脇板を納めたような縦溝が残り、さらに柱上の斗に縦溝が切られており、頭貫位置にある胴差より上の小壁部分も板壁で塞がれていた痕跡があり、当初もしくは一時期には前面で堂を閉塞した時期があったと考えられる。内部は全て土

間敷で、身舎中央間に仏壇を構え、その前に礼拝壇を置くが、柱には一時期部分的に床が張られていた痕跡が残る。

礎石上に異様に太い柱を立て、一部には太くかつ曲がった柱も使用されており、柱には漆塗りの下地と彩色が確認できる。身舎では胴差を通さずに、柱上の斗を介して太い小屋梁をかけ、小屋梁上に斗状の短い束を介して水平材を3段重ねる。廂も、繋梁上に斗状の短い束を介して水平材を2段重ねる。軒先には斜梁をかけて、軒桁を受ける。これら梁、母屋桁を受ける水平材や束、斜梁にはいずれも精緻な彫刻が施されており、一部には極彩色を残す。隅木は、正柱筋の桁行端間に架けられた梁に束を立て、隅木尻は束にわなぎ込まれ、その上に入母屋の破風を立ち上げている。

2000年の修理に際しては、礎石の取り替え、一部部材の取り替え、屋根替がなされているが、ティエンドゥオンとは異なって当初材を良く残して修理が施されている。

太い木割、低い軒、斜梁を全く使用しない架構など、村内のいずれの建物と比べても古風であり、様式上、どこまで遡るかは類例がなくて確証はないが、石碑銘にある造営年次である、1642年の建築とみる。異様に太い部材で構成され、その上に精緻な彫刻とともに、彩色が施された建物で、建築当初の華麗な姿が偲ばれる。

主体部に続く後堂部は、東西棟部分と繋ぎの南北棟部分からなり、南北棟部分は階段状になり、背面の東西棟部分は一段高くなっている。

南北棟部分は、内部に雛壇状の仏壇があり、各種仏像・神像が祀られている。架構は、主体部と同じく、束と陸梁のみによる架構であるが、主体部に比べ木も細く、彫刻や細部も簡略化されている。

東西棟部分は正面に「梵天王」の額がかかり、内部に雛壇状の仏壇があり、中央に如来と脇侍が祀られている。架構は、繋ぎ部分よりさらに簡略化され、正柱間は束立による。

後堂部分は、木柄も細く、架構も簡略化され、材質も主体部に比べて新しい。当初からこのような形式であったかどうかは不明であるが、現存のものの建築年代は、主体部より降るものと考えられる。ただし、村内の他の建築と比べては古風な感じがあり、18世紀後半の建築とみておく。ただし、東西棟部分については、後述の回廊に似ており、回廊の建築年代が1916年まで降るので、20世紀初頭まで降る可能性がある。

回廊は、下寺と上寺に取り付き、閉鎖的な中庭を形成する。回廊は梁間1間、外側を組積造の壁、内側を木造柱とし、木造の架構を架ける。内側は開放とし、壁面側には壇をおいて、羅漢像を並べる。架構は、木造柱と壁を大梁で繋ぎ、大梁上に2本の束を立てて陸梁で繋ぐ形式で、下寺の主体部後堂と同様の架構方式をとる。

東西回廊ともに、南から4本目の梁下に、「啓定元年六月初八日」の刻銘があり、1916年の建築であることが明らかである。寺全体の構えから考えると、当初からこのような回廊状のものがあったと想像される。

上寺は、桁行7間、梁間3間、入母屋造、シングル瓦葺の建物で、側背面をラテライト壁で囲み、全体規模は桁行23.3m、梁間7.8mである。

正面は柱間装置を構えずに、すべて開放とする。内部は土間敷で、背面・側面・前面端間1間を壁で囲む。軒が極端に低く、礎石上に下寺以上に太い柱を立て、一部には異常に曲がりくねった柱を使用している。身舎の架構は、下寺主体部と同様に、柱上に斗を介して太い小屋梁が架けられ、小屋梁上の短い束上に陸梁を架け、その上に比較的長い束で2段の陸梁を受ける形式で、下寺とは異なった形式をとっている。廂は、斗状の束で陸梁を2段に組み、陸梁の先端を木鼻状の彫刻としており、下寺よりやや新しい要素であろうか。隅木は、身舎柱筋の妻の柱と妻から2本目の柱に架かる繋梁上に立てられた束に納まり、ここに入母屋の破風の妻が立つ。

下寺にくらべて、彫刻等の装飾はおとなしいが、その一方で木太い荒々しさをもった建物で、下寺とはひと味違った魅力を持つ建物である。

建築年代を示す資料はないが、下寺主体部よりやや降って17世紀後期の建築と考える。（島田敏男）

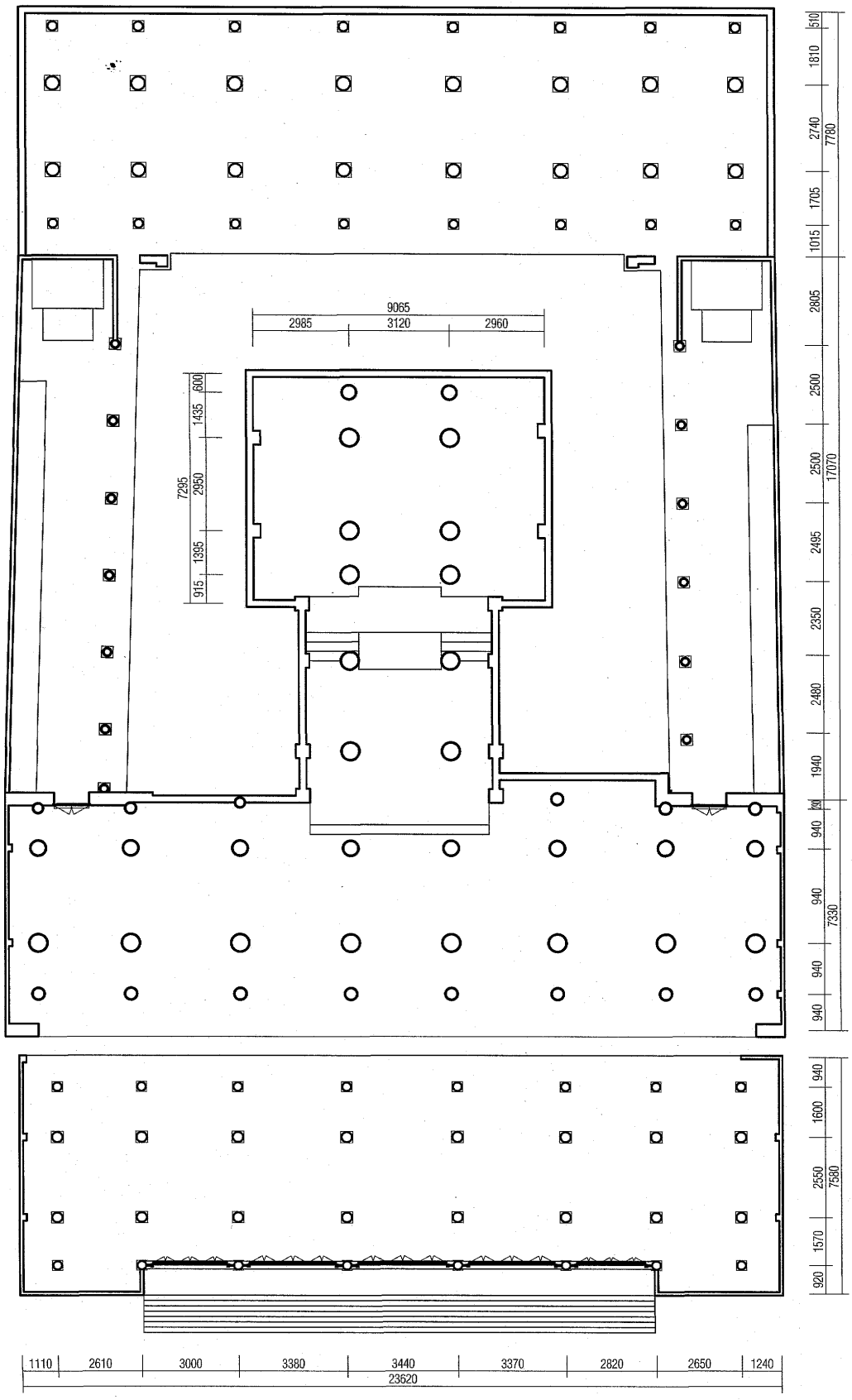


図６-271　ミア寺　平面図　1：200

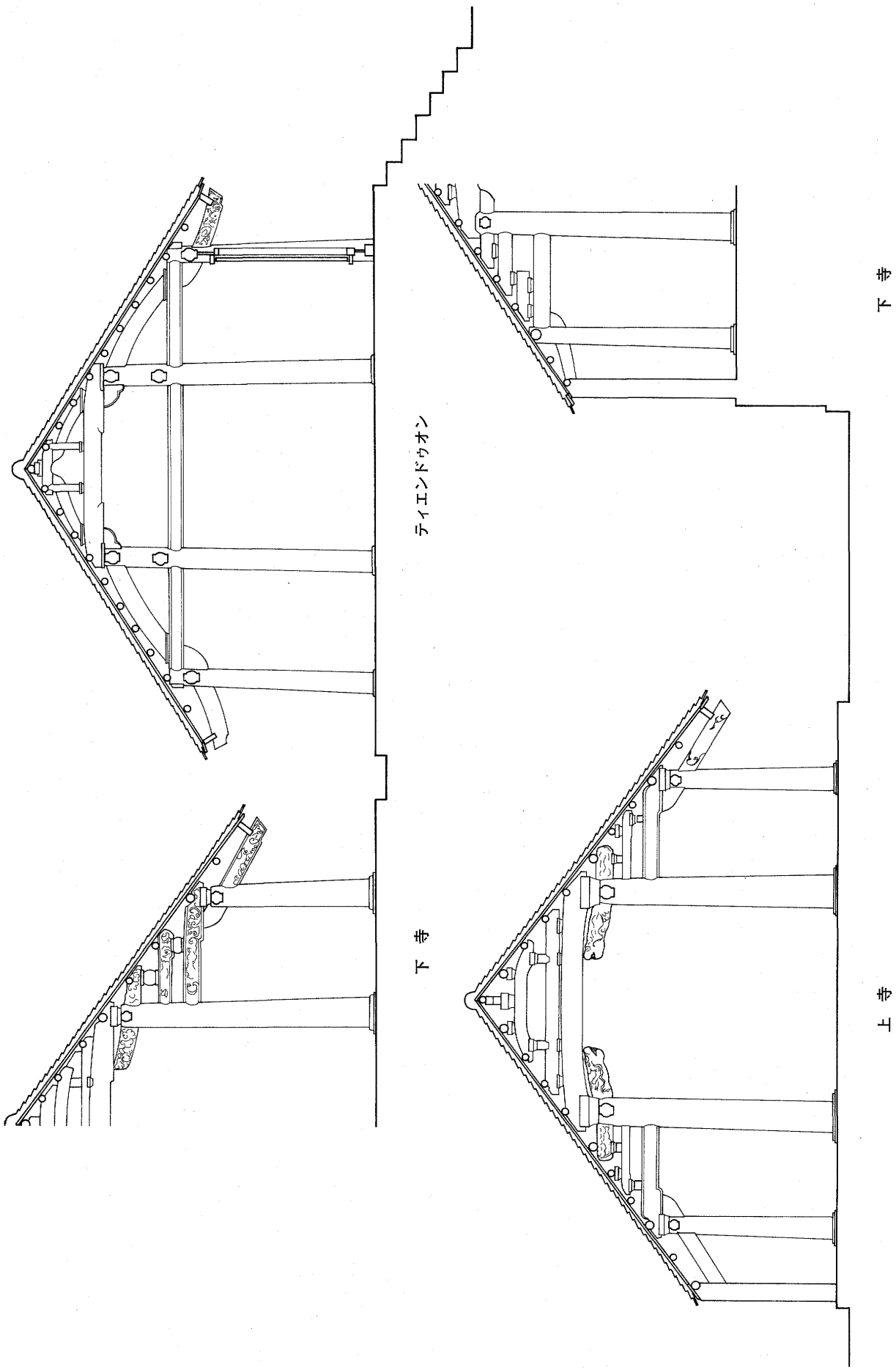


図6-272　ミア寺　ティエンドゥオン・上寺　断面図　1:75

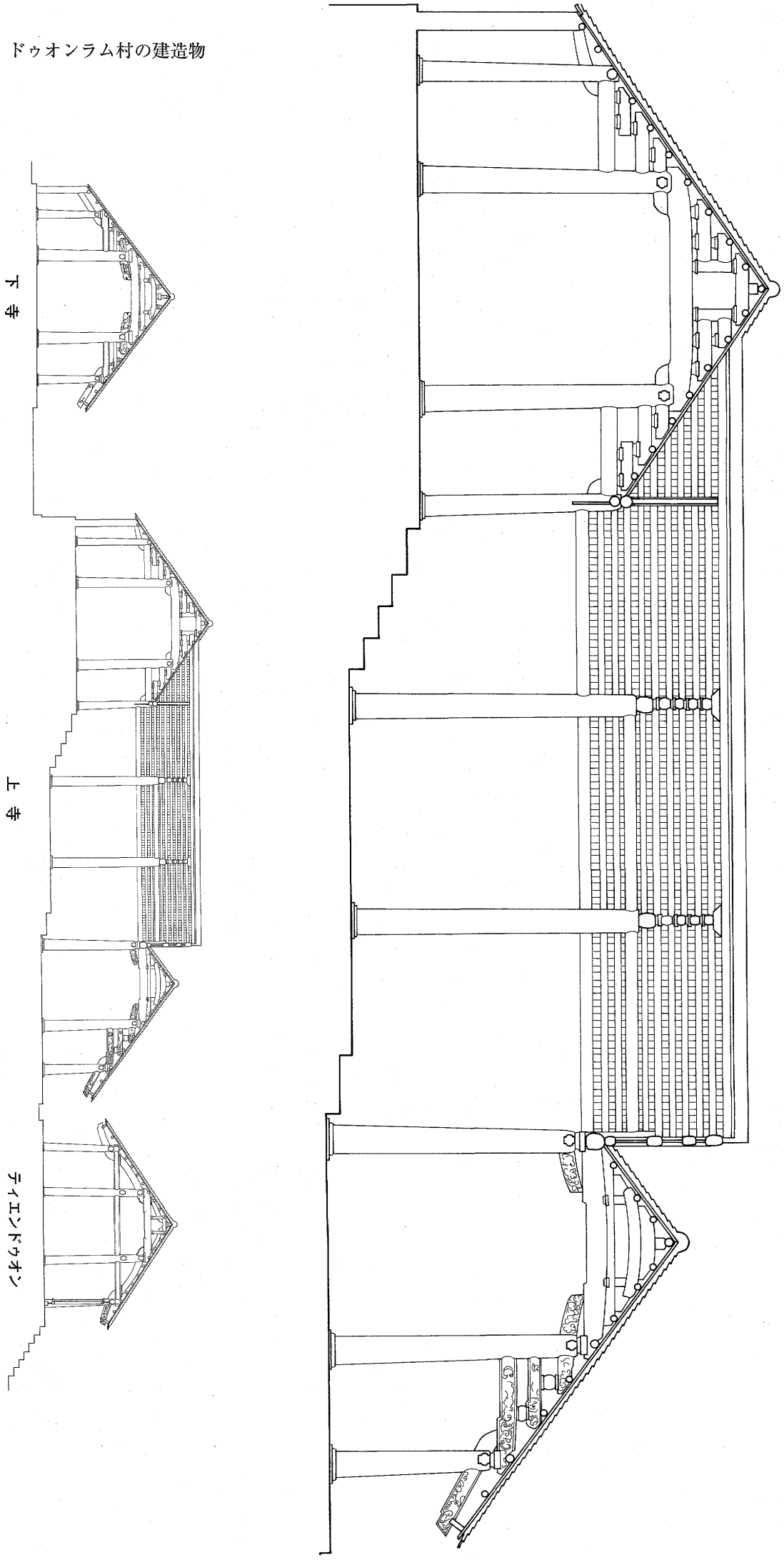


図６-273　ミア寺　断面図　上：下寺断面図　1：75　下：連続断面図　1：150

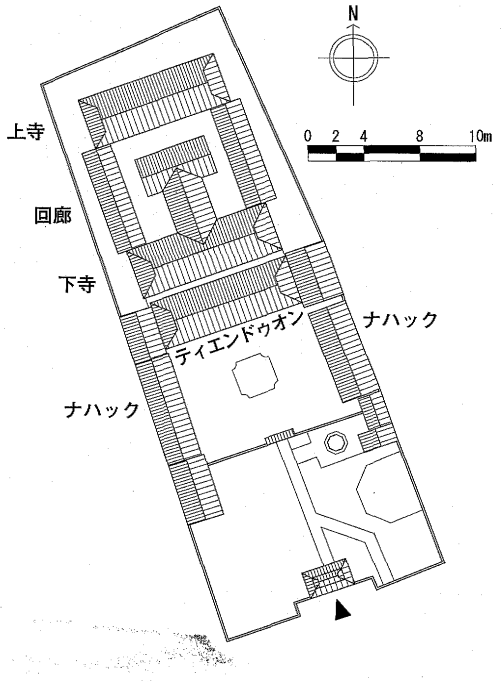


図6-274　ミア寺　配置図

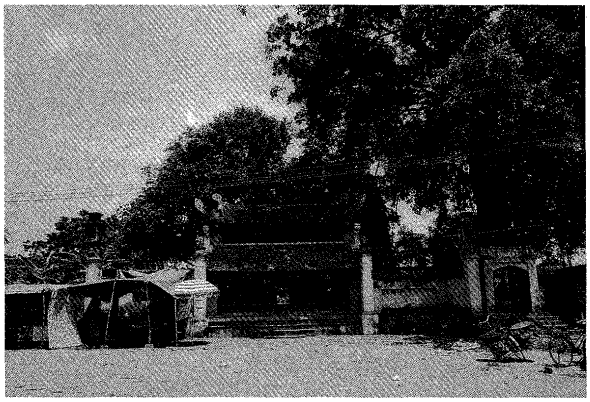


図6-275　ミア寺　門

図6-276　ミア寺　ティエンドゥオン　外観

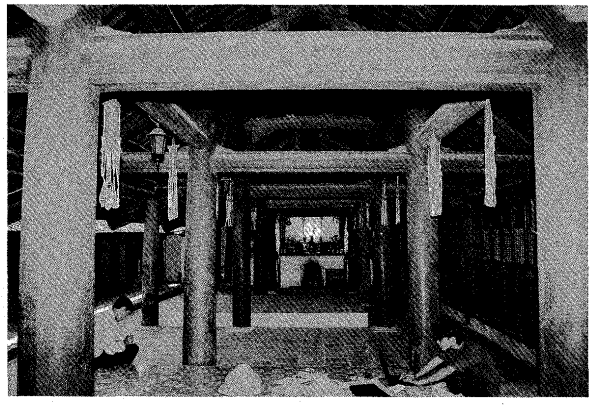


図6-277　ミア寺　ティエンドゥオン　内部

図6-278　ミア寺　ティエンドゥオン　架構

図6-279　ミア寺　ティエンドゥオン　軒先

図6-280　ミア寺　ティエンドゥオン・下寺

図６-281　ミア寺　下寺　背面

図６-282　ミア寺　下寺　内部

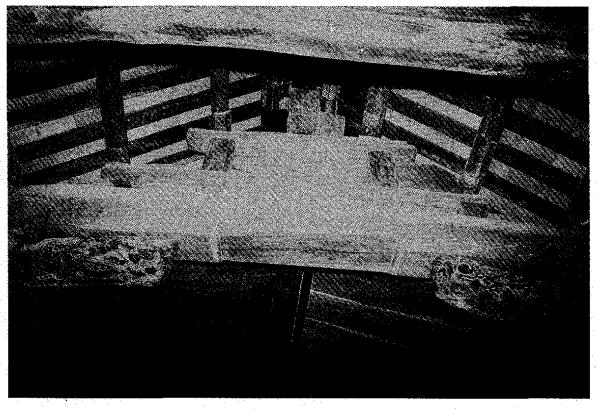


図６-283　ミア寺　下寺　身舎架構

図６-284　ミア寺　下寺　廂架構

図６-285　ミア寺　下寺　隅部架構

図６-286　ミア寺　下寺　軒先

図６-287　ミア寺　下寺　後堂部内部

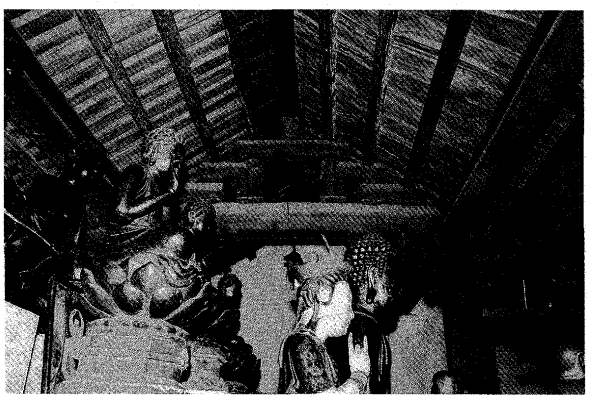


図６-288　ミア寺　下寺　後堂部架構

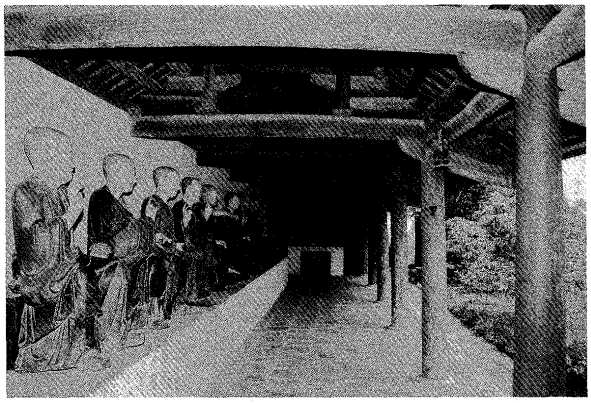


図6-289　ミア寺　回廊　内部

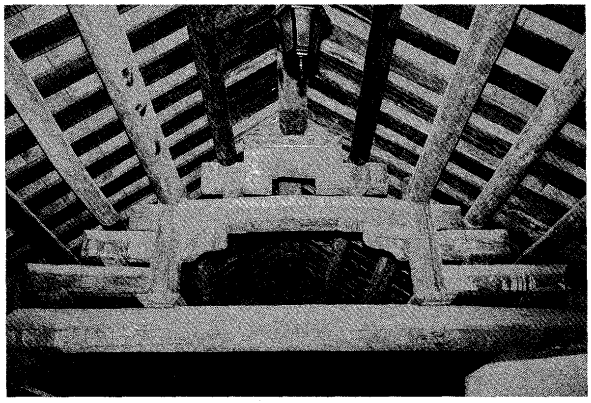


図6-290　ミア寺　回廊　架構

図6-291　ミア寺　上寺　外観

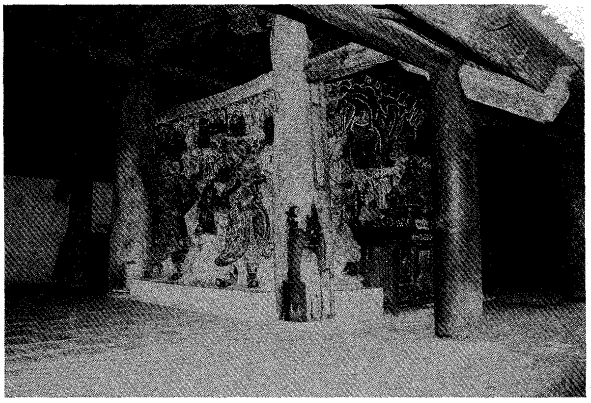


図6-292　ミア寺　上寺　内部

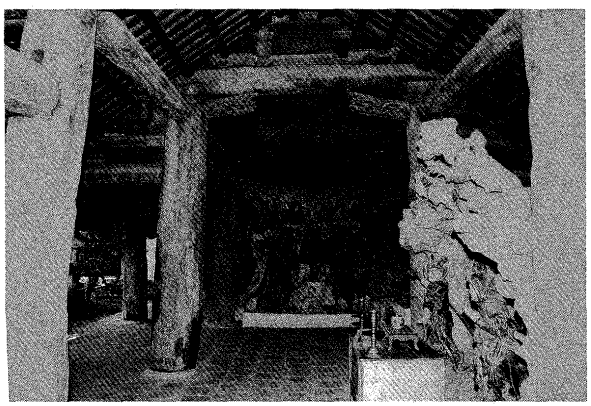


図6-293　ミア寺　上寺　内部

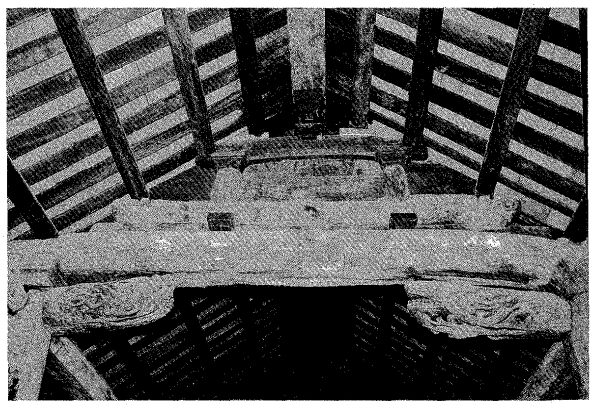


図6-294　ミア寺　上寺　身舎架構

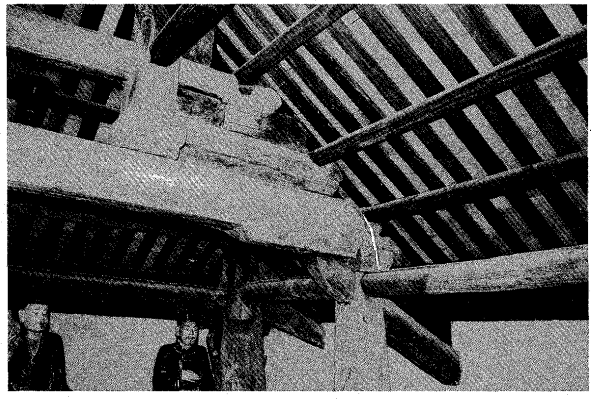


図6-295　ミア寺　上寺　隅部架構

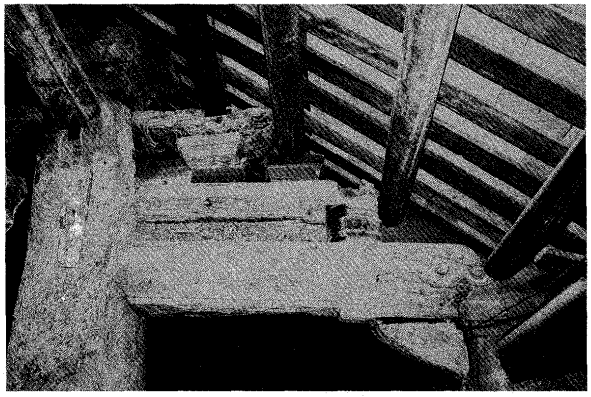


図6-296　ミア寺　上寺　廂架構

(31) Kieu Anh Ban邸

ドンサン集落（Ⅱ－196）

Kieu（キョウ：僑）氏はドンラム村でも伝統ある一族で、当家はその族長にあたり、周辺でも大規模な農家である。かつては、広大な畑を有したという、現在は豚肉の解体をおこなっている。

敷地はミア神社の背面につづく路地に面する。細い路地の南側に敷地を構え、路地に面して門を開く。門内には広い中庭をとり、中庭は煉瓦で舗装されている。敷地の西奥に、ほぼ敷地いっぱいの幅の主屋が建ち、主屋の北妻壁は路地に面する。主屋に向かって左手には井戸があり、井戸の横には台所棟が建つ。

主屋は、桁行5間、梁間4間、切妻造、シングル瓦葺で、側背面にラテライトの壁を立て、全体規模は桁行15.7m、梁間7.2mである。

前方の孫廂部分は吹き放ちとし、廂柱筋には、各間に木製の敷居に4枚の板戸を構える。桁行中央3間を主室とし、両端1間を側室とする。主室と側室の境は、前面の1間に片開の板戸を構え、その他は枠を組んだ竪板壁を構える。主室中央の背面側の廂に祭壇を構え、祭壇のある部分のみ、上部に水平の天井を張っており、この家の格の高さを示している。向かって左手の側室は、正面側の廂の一部を取り込み、背面側の身舎柱を抜くなど、変則的な形式としている。

礎石上に円柱を立て、身舎柱上で、大斗を介して小屋梁を架け、小屋梁上で束構造とする。廂は斜梁をかける。孫廂も斜梁を架け、鼻先を軒先に持ち出して、軒桁を受け、斜梁の鼻先を植物を題材とした彫刻で飾る。

口伝では150年前に建てられたと伝え、様式的にも19世紀後期の様相を示すと思われる。梁下に「啓定貳年参月拾捌日修造吉」とあるが、これは1917年に修理された際の銘であろう。

やや木柄が細いものの、丁寧なつくりの農家で、柱間装置など良く当初形態を保っている。祭壇に天井を張る事例は珍しく、族長としての格を示しているものと考えられる。（島田敏男）

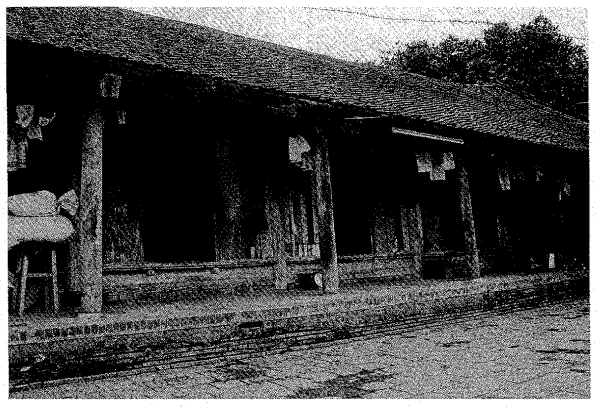


図6－297　Kieu Anh Ban邸　主屋　外観

図6－298　Kieu Anh Ban邸　主屋　内部

図6－299　Kieu Anh Ban邸　主屋　側室

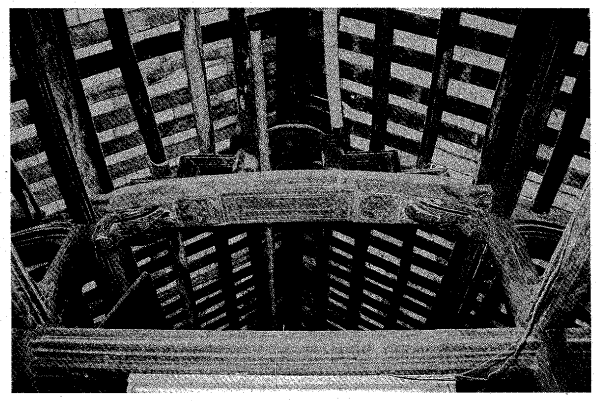


図6－300　Kieu Anh Ban邸　主屋　架構

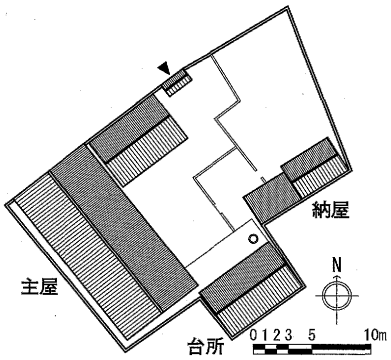


図 6 - 301　Kieu Anh Ban邸　配置図

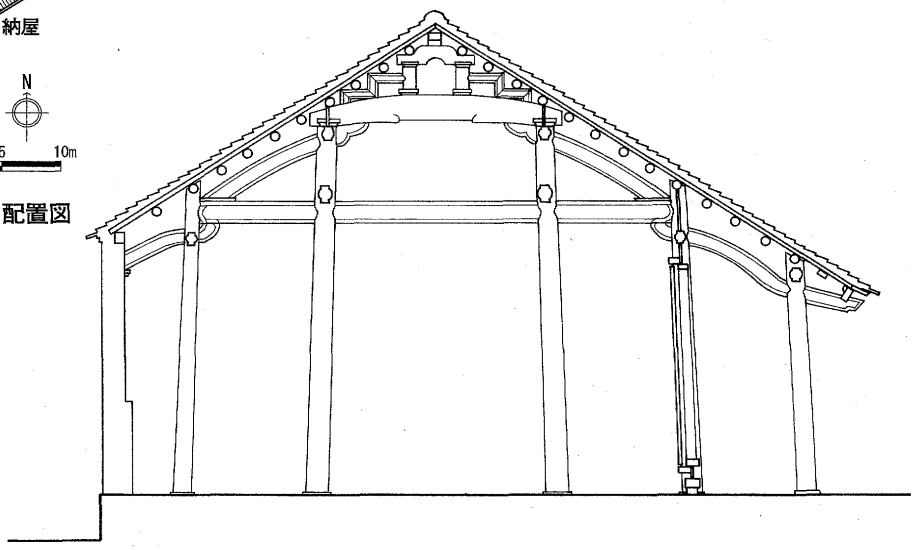


図 6 - 302　Kieu Anh Ban邸　断面図　1：75

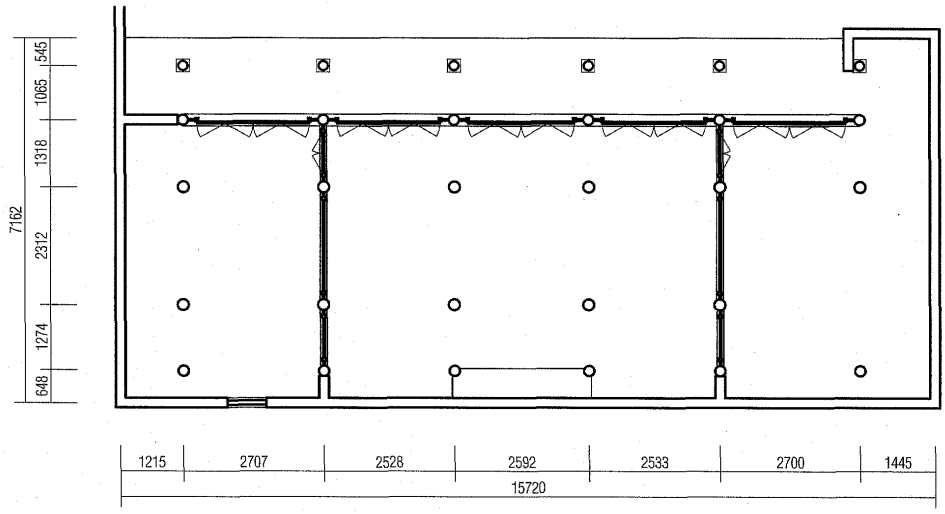


図 6 - 303　Kieu Anh Ban邸　平面図　1：150

図 6 - 304　Kieu Anh Ban邸　主屋　室境架構

図 6 - 305　Kieu Anh Ban邸　軒先

(32) Kieu Duc Thang邸

ドンサン集落（Ⅱ－193）

前出のKieu（キョウ：僑）氏と同族で、18世代にわたり住んでいると伝える。かつては農業とともに商売も営んでいたが、現当主（78歳）は会社に務めていたという。

敷地は、ミア神社の背面側へつづく行き止まりの細い路地の最奥部に位置する。街路に面してL字形の敷地を構え、路地に面して門・塀を構え、中庭を挟んで、主屋を構える。主屋に向かって左手に台所等を含む大規模な付属屋を鍵の手に構えるが、これは近年に建て替えたものである。

主屋は、桁行５間、梁間４間、切妻造、シングル瓦葺で、側背面はラテライト積モルタル塗りの壁で囲み、全体規模は桁行15.3m、梁間6.7mである。桁行方向中央３間を主室、両脇１間を側室とする。主室の孫廂部分は吹き放ちとし、正面に木製敷居に４枚の板戸を構える。側室の孫廂部分は煉瓦造の壁で室内に取り込まれているが、これは1991年に改造されたものである。なお、この時に屋根も葺き替えたという。

柱は円柱で、身舎には小屋梁を架け、小屋梁上に２本の束を立て、小さな斜梁と凸形の小梁で母屋桁を受ける。廂・孫廂は斜梁で繋ぎ、正面では孫廂の斜梁を持ち出して、軒桁を受ける。小屋梁上の２本の束の上下に皿斗状の飾り、棟を受ける梁や軒の斜梁の先端に彫刻を施すが、彫りは浅くておとなしい。

中央向かって左の小屋梁下に、「壬戌年冬造」、右の小屋梁下の「乾元亨利貞」との墨書が残る。様式的には19世紀後期と思われ、干支から判断して、1862年の建築と判断する。

若干の改造がみられるものの、中規模・中程度の建築年代が明確な典型的事例といえる。（島田敏男）

図６－306　Kieu Duc Thang邸　主屋　外観

図６－307　Kieu Duc Thang邸　主屋　内部

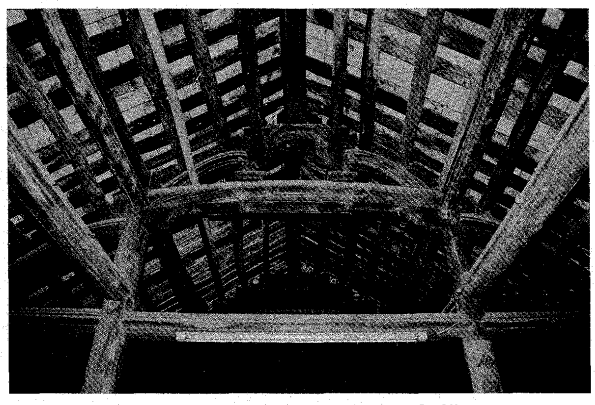


図６－308　Kieu Duc Thang邸　主屋　架構

図６－309　Kieu Duc Thang邸　主屋　室境架構

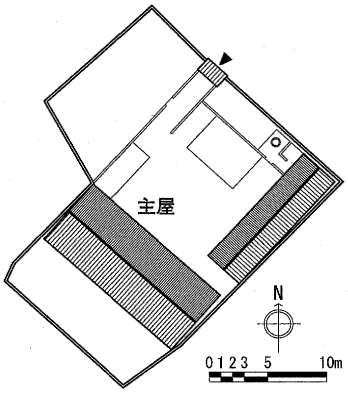


図 6 -310　Kieu Duc Thang邸　配置図

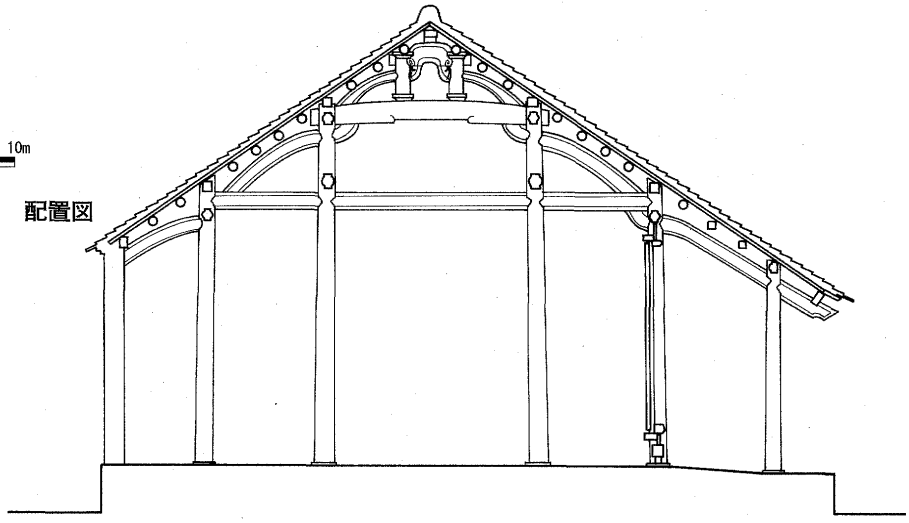


図 6 -311　Kieu Duc Thang邸　断面図　1：75

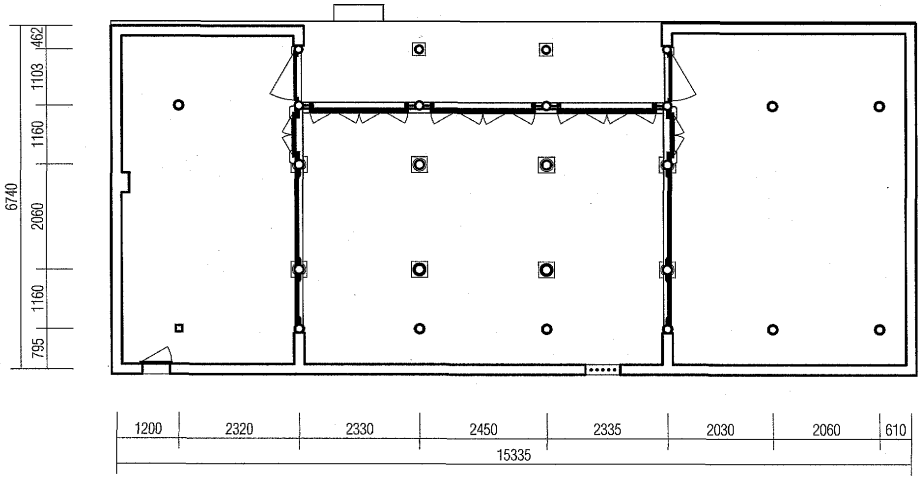


図 6 -312　Kieu Duc Thang邸　平面図　1：150

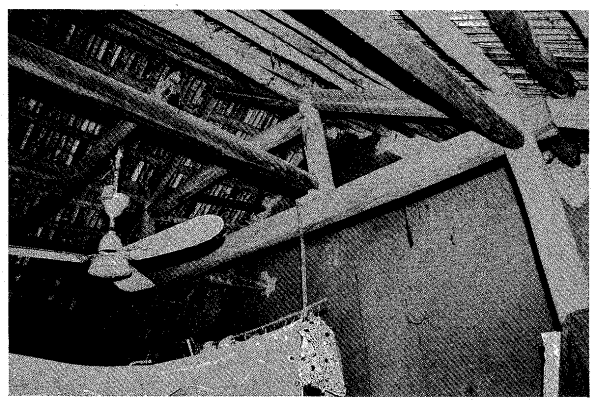


図 6 -313　Kieu Duc Thang邸　主屋　側室架構

図 6 -314　Kieu Duc Thang邸　主屋　軒先

(33) ディン　ドアイザップ

ドアイザップ集落（Ⅱ－087）

ドアイザップのディンは集落の東南端に位置し、他の集落のように、集落の中心部に位置せず、集落端の池に面して敷地を構える。1948年に火災に罹って、往時の姿は残していないが、かつてはラテライトの塀で囲まれ、現在も塀の基礎石部分のみが残る。

拝堂にあたるダイバイ（Dai Bai）と後堂にあたるハウクン（Hau Cung）からなる。ハウクンには高貴な者であってもその中には入れず、ハウクン前の庭にしつらえられた高い壇で、拝礼をしたという。

かつてはモンフー集落のディンと同じように床張りの壮大なものであったという。恐らく、ティエンバイ部分が焼失し、ハウクン部分のみが焼失を免れたものと考えられる。

ダイバイは、桁行3間、梁間3間、切妻造、シングル瓦葺で、妻壁のみを立ち上げ、全体規模は桁行9.6m、梁間4.9mである。内部は1室で、吹き放ちの空間とする。本来は脇殿にあたるターマックであったが、1948年の火災で焼失を免れたので、それを転用したという。事実、柱には新旧2種類あり、旧材には床を張った痕跡が残り、ターマックの時期には、モンフー集落のディンのターマックのように、床張りであったと復原できる。

基本構造は身舎・廂からなるものの、前面の身舎柱を抜き、前後に大梁を架け、本来の身舎柱位置に束を立て、架構は身舎・廂の構成をとる。身舎にあたる部分の架構は、大梁をかけてその上に束を立て、その束に斜梁を挿し込む形式で、日本のイノコ叉首のような構成をとる。廂は斜梁をかけ、軒先の片持ちの斜梁で受ける。彫刻等の装飾もほとんどなく、簡素な構造の建物である。

これら形式から、ターマックとして建築されたのは、19世紀末頃と考えられる。なお、梁下には「辛卯夏仲造」の刻銘があるが、これは1951年の移築・改造の時期を示している。

ハウクンは桁行3間、梁間3間、切妻造、シングル瓦葺で、側背面に煉瓦造の壁をまわし、背面の柱は壁から煉瓦で造り出し、全体規模は桁行9.7m、梁間7.7mである。内部は前面の奥行1間を吹き放ちとし、廂柱筋（柱はブロック）で仕切って、扉構を構える。内部は1室で、中央に祭壇を構える。

架構は、背面壁と内部円柱間が身舎で、屋根は片流れとなる。身舎架構は陸梁に叉首構造で、村内でも新しい構造である。廂の架構は、身舎の前面の叉首をそのまま延長する。廂柱から外には片持ちの斜梁が架かり、孫廂柱筋の手前で一度軒をつくっている。これは、孫廂部分が1951年に増築されたためで、1948年の段階では孫廂はなかった。

以上のように、柱をブロックとしている点や、簡略な架構形式は20世紀中頃以降の様相を示しており、1948年に現在の形になったものと考えられる。ただし、祭壇部分の柱は太く、装飾も精緻であり、祭壇部分のみは19世紀中期の様相を示している。堂内にある梵鐘銘には「嗣徳拾参年玖月初壱日鋳造」とあり、祭壇もこの梵鐘が鋳造された1860年頃につくられたものとみる。したがって、1948年の火災では、祭壇部分のみが焼け残った、もしくは再利用可能な状態で、それを再利用して火災後に現堂を建築したと推定される。（島田敏男）

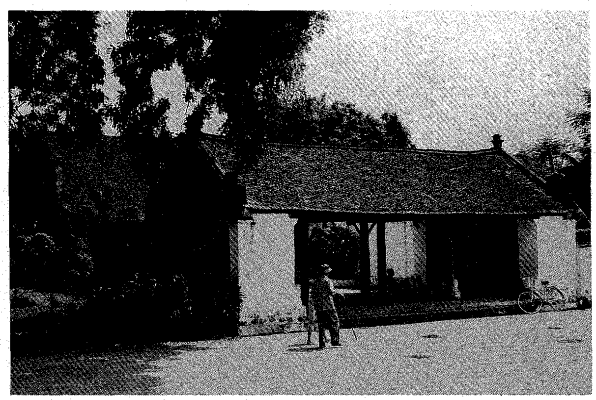


図6-315　ディン　ダイバイ　外観

図6-316　ディン　ダイバイ　内部

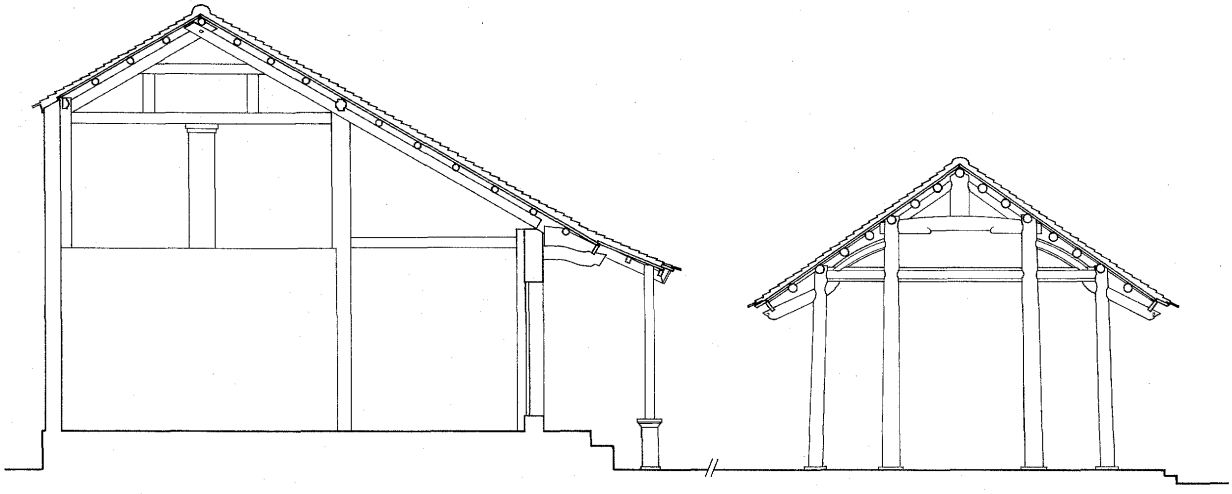


図 6-317　ディン　断面図　1：100

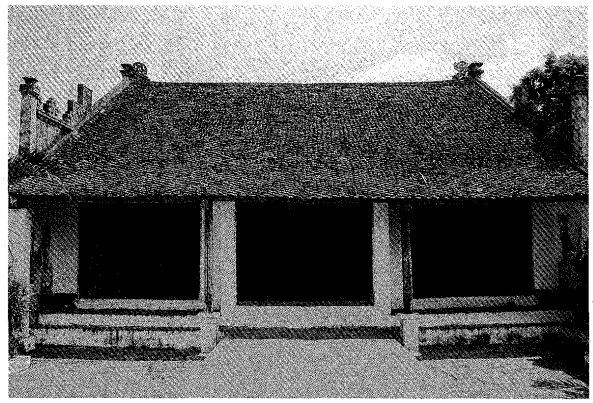


図 6-318　ディン　ハウクン　外観

図 6-319　ディン　ハウクン　内部

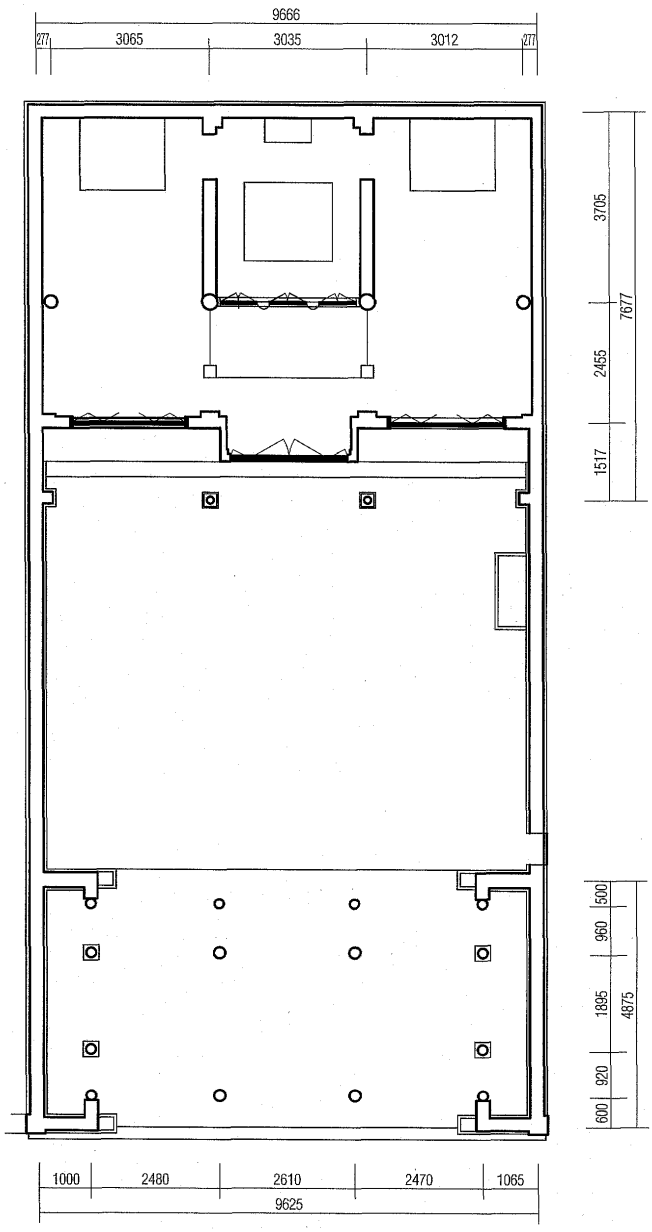


図 6-320　ディン　平面図　1：150

(34) Phan Van Thanh邸

ドアイザップ集落（Ⅱ－077）

当家はドアイザップ集落のファン（潘）氏の族長にあたる家柄で、現当主が15代目にあたるという。現在は、農業を営み、広大な田畑を耕している。

敷地はドアイザップのディンの東、モンフー集落に近接するエリアに位置する。

主屋は桁行4間、梁間4間、切妻造、シングル瓦葺で、側背面をラテライトの壁で囲み、全体規模は桁行10.6m、梁間7.2mである。孫廂を吹き放ちとし、廂柱筋は煉瓦造の壁に両開の扉を構える。建物内部は左手3間を主室、右手1間を側室とし、側室では孫廂を取り込んでいる。ただし、本来は桁行5間の建物で、正面の孫廂全体が吹き放ちであった。1966年に大改造され、その際に左手の側室が切り縮められ、敷地もそれにともなって切り縮められている。また、側室の孫廂を取り込んだり、廂柱筋の柱間装置を木製の高敷居から、現状の形状に改造されている。また、主室・側室境の煉瓦壁もこの時の修理にともなうものと考えられ、当初は身舎胴差上部の小壁に残るような、枠内に竪羽目板が組まれた板壁であったと推定される。

柱は全て円柱で、身舎柱は内転びをもって立てられる。身舎を桁行・梁間方向に背違いに入る胴差で繋ぎ、廂には身舎の胴差と同高で繋梁を架ける。身舎に小屋梁を架け、梁上に水平材と垂直材を組み合わせた架構を組み、これら部材それぞれに精緻な彫刻を施している。廂・孫廂は斜梁で繋ぎ、孫廂の斜梁を跳ね出して軒桁を受け、斜梁の先端には彫刻を施す。なお、主室・側室境の柱筋の架構は、身舎では水平材を3段重ねとし、廂では水平材を4段組み、その先端に彫刻を施して、見せ場としている。

小屋梁下面に墨書らしき痕跡が確認されるものの、判読不可能であった。軒が低く、木柄が太く、精緻な彫刻が施されていることから、19世紀中期頃の建築とみられる。改造のために、規模が縮小されているが、族長の家らしく格式高い建物である。（島田敏男）

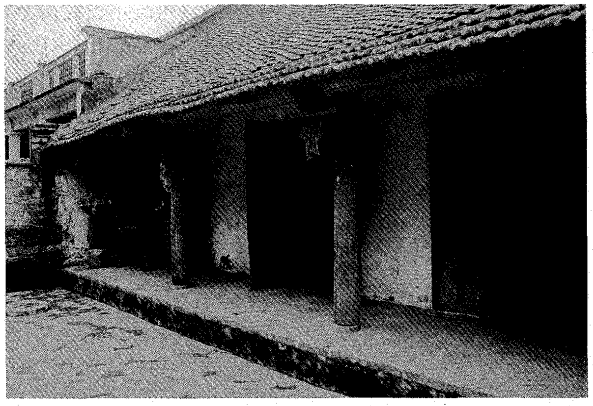


図6-321　Phan Van Thanh邸　主屋　外観

図6-322　Phan Van Thanh邸　主屋　外観

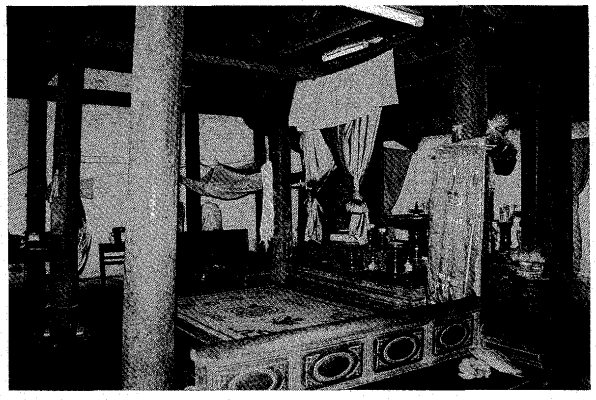


図6-323　Phan Van Thanh邸　主屋　内部

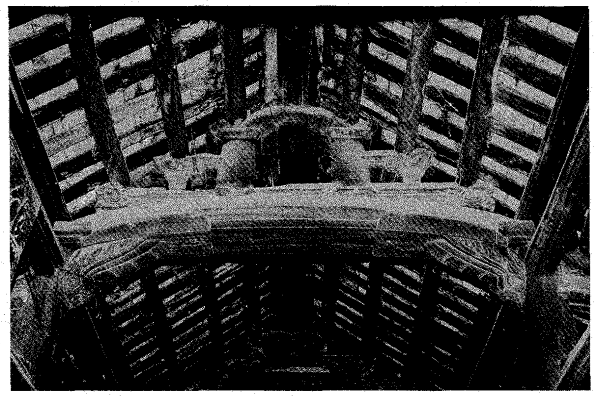


図6-324　Phan Van Thanh邸　主屋　架構

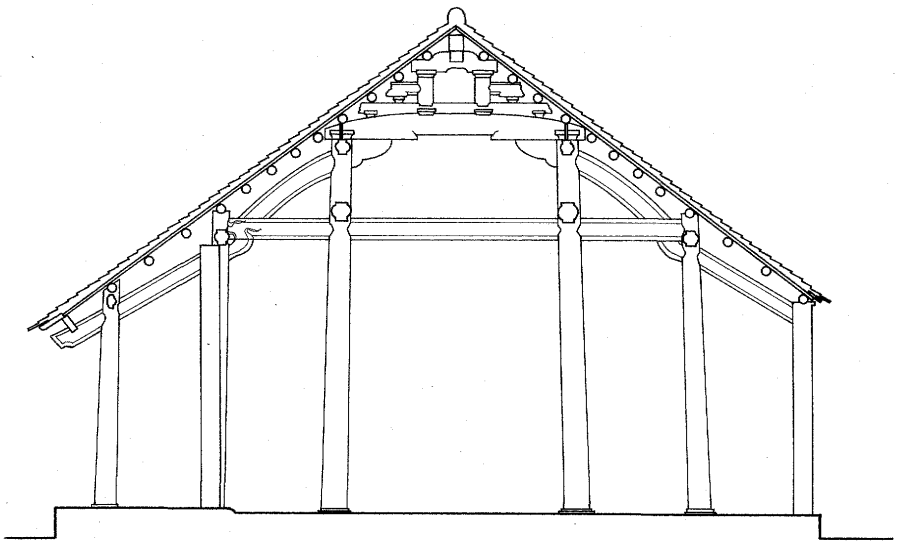


図 6 - 325　Phan Van Thanh邸　断面図　1：75

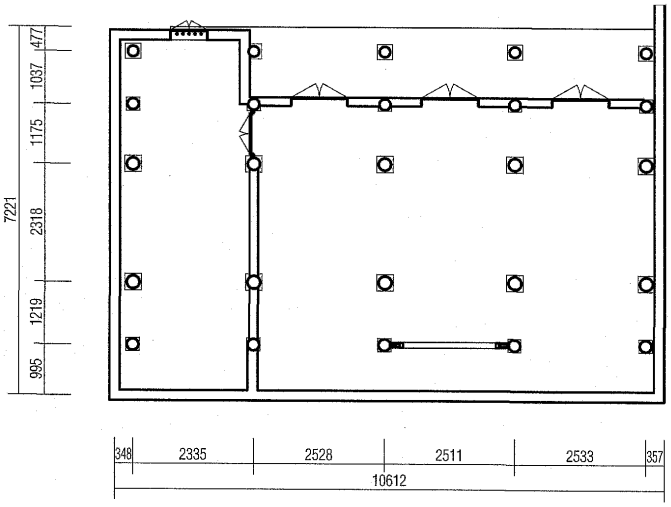


図 6 - 326　Phan Van Thanh邸　平面図　1：150

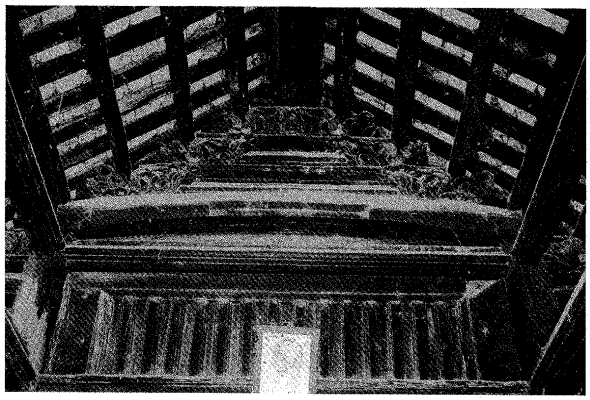


図 6 - 327　Phan Van Thanh邸　主屋　室境架構

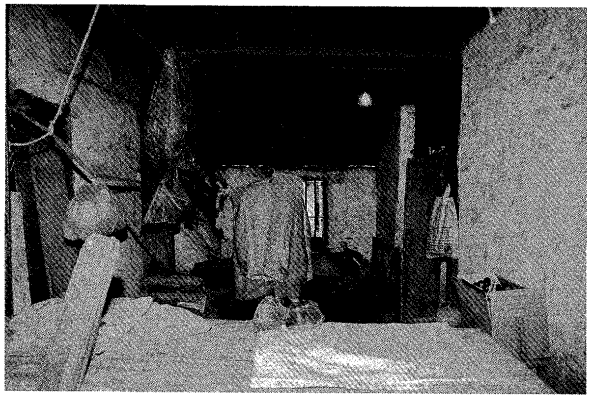


図 6 - 328　Phan Van Thanh邸　主屋　側室

(35) Phan Van Toan邸

ドアイザップ集落（Ⅱ－085）

当家の歴史は不詳であるが、現当主は農業を営んでいる。

主屋は桁行４間、梁間４間、切妻造、シングル瓦葺で、側背面に壁をまわし、全体規模は桁行11.4m、梁間6.3mである。壁は下部をラテライト、上部を日干煉瓦とし、現在塗られている白色のモルタルは2003年に塗ったものという。左手３間を主室、右手１間を側室とする。かつては左手にも側室があったが、1960年に被爆したためになくなったという。現状の最右手の柱には、中古の土壁の痕跡があり、この柱筋の胴差下にはホゾ穴が確認でき、この室境は当初枠組の木製の壁があり、中古に土壁に変更され時期があったと復原できる。したがって、かつてはこの地方の農家の定型通りに、左右対称の平面で、正面孫廂が吹き放ちであった。なお、1960年の被爆後の修理の際に、主室正面の柱間装置が木製の高敷居から袖壁付の両開戸に改造され、右手の側室の孫廂が側室内に取り込まれ、背面に窓が開けられている。

礎石上に円柱を立てる。身舎は桁行・梁間方向に背違いに入る胴差で繋ぎ、廂には身舎の胴差と同高で繋梁を架ける。身舎梁間方向には斗を介して小屋梁が架けられ、小屋梁上に斗で挟まれた２本の束を立て、束間では凸型の梁をかけ、束の外側では斜梁を架ける。廂・孫廂では斜梁を架けて、母屋桁を受ける。ただし、部屋境では、身舎・廂ともに、束と横材を組み合わせた材を卍崩状に積み上げて、装飾的にしている。全般的に彫刻も簡素である。前出のドアイザップ集落のPhan Van Thanh邸に比べると、木が細く簡潔な造りである。

正面身舎向かって右手の小屋梁下には「嗣徳玖年造」、左の小屋梁下には「孟冬吉日成」とあり、1856年の建築であることが明らかである。改造によって本来の姿は完全には残っていないが、建築年代が明確な中級格の基準的な建物として貴重である。

（島田敏男）

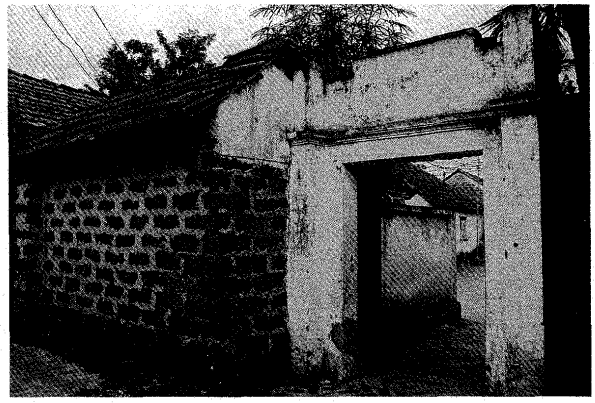


図６－329　Phan Van Toan邸　門

図６－330　Phan Van Toan邸　主屋　外観

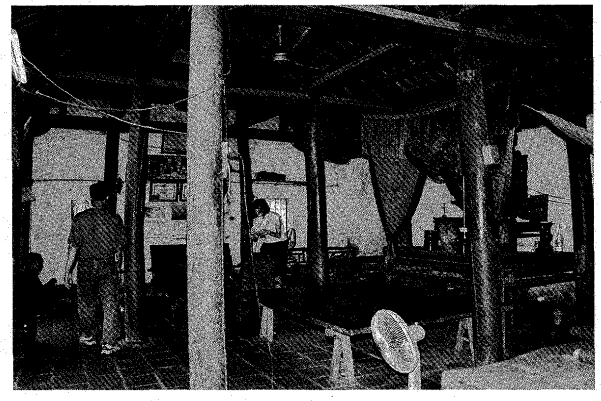


図６－331　Phan Van Toan邸　主屋　内部

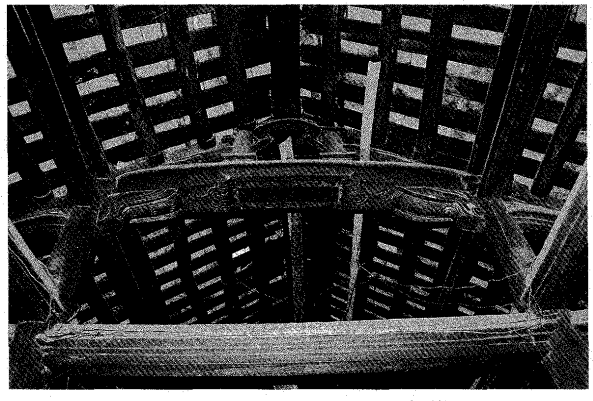


図６－332　Phan Van Toan邸　主屋　架構

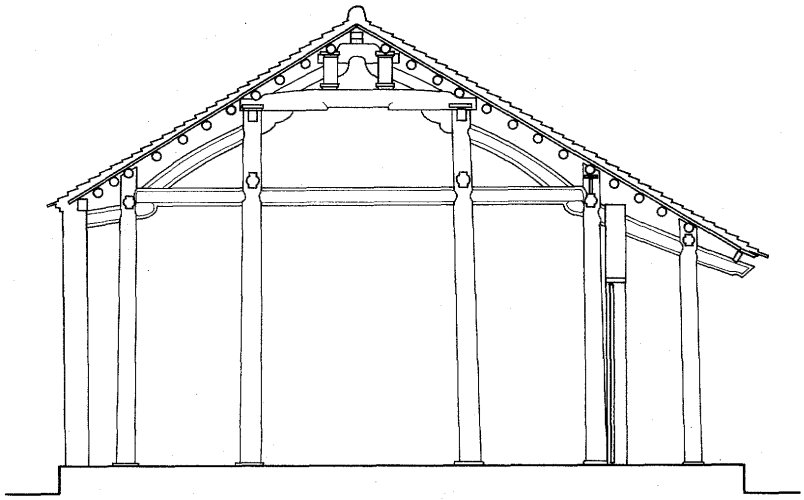


図 6 -333　Phan Van Toan邸　断面図　1：75

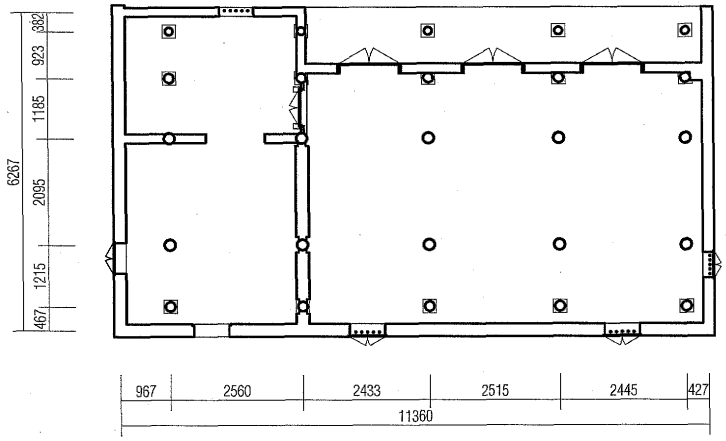


図 6 -334　Phan Van Toan邸　平面図　1：150

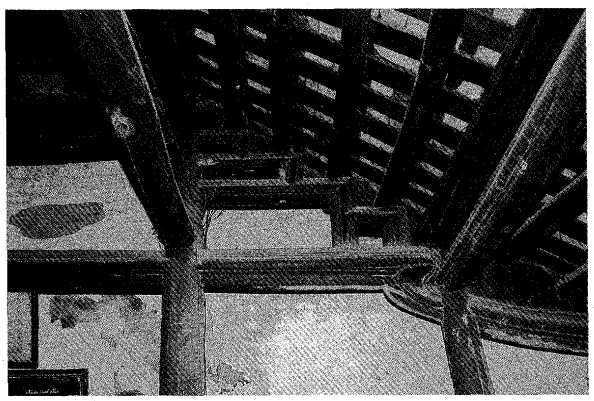


図 6 -335　Phan Van Toan邸　主屋　室境架構

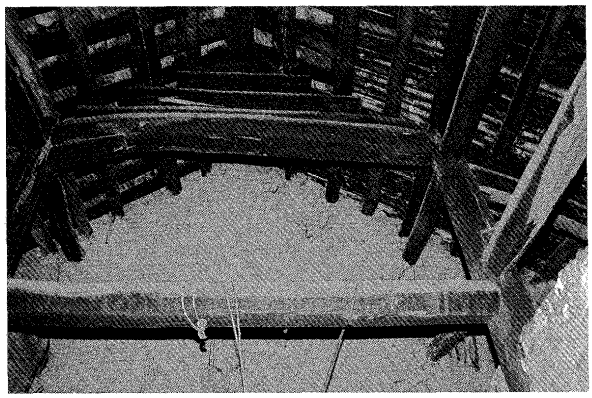


図 6 -336　Phan Van Toan邸　主屋　側室

(36) フンフン廟

カムラム集落

フンフン廟はカムラム集落に位置し、ドゥオンラム村の英雄フンフン王（Phung Hung）とその重臣を祀る。

廟の敷地内には、前庭をはさんで２棟のターマックが向き合い、祭りの準備をする場所にあたる。その奥には、フンフン王の大臣たちを祀るダイバイ（Dai Bai・拝堂）と、フンフン王を祀るハウクン（Hau Cung：後堂）が前後に並ぶ。

ダイバイは、小屋梁下の「嗣徳王午春」「竪柱上梁吉」の銘から、1882年の建築と判明する。2001年に大修理された。桁行５間、梁間３間、入母屋造、シングル瓦葺、全体規模は桁行19.1m、梁間9.4mで、間口５間、奥行１間の身舎の前後に廂をつける。身舎と廂の柱は木造円柱、礎石は円形の石を使用する。床面は方形の煉瓦敷。壁はラテライトを積みモルタルを塗る。正面には唐戸の開き戸が、中央間に６枚、その両脇間に４枚入れられる。

小屋組は基本的に横材を積上げた構造で、身舎の中央に、束と梁を鳥居形に組んでおり、ミア寺よりも新しい時代相を示す。

2001年の修理は大規模なもので、身舎桁以上の材と梁の一部が取り替えられ、屋根も葺き替えられた。裏側の両端間各1間の壁も、この時に積み直しているとみられる。また、柱は、仕口痕の対応関係が一様ではないことから、一部が移動されたと思われる。

聞き取りによれば、2001年の修理以前は身舎中央３間に床が張られ、奥の廂の中央３間に仏壇が設けられていたという。中央間は大臣を祀る祭壇で、向かって左側の１間が祭りを担当する地区の仏壇、右側の１間が祭りを担当しない地区の仏壇となっていた。現在、柱には床の大引・根太受けと思われる大小の仕口痕が残る。

ダイバイは、成が高く、断面大の部材を用いた上質な建築である。身舎の大虹梁を受ける持送には籠彫りの竜を造り出し、正面小壁には連子を飾るなど、細部の装飾も特徴的で、19世紀後期の大型建物の代表例として評価できる。

ハウクンは、建築時期は明らかではないが拝堂と同時期の19世紀後期の建築と見られ、2001年に大修理が行われた。

建物は桁行３間、梁間３間、切妻造、シングル瓦葺で、全体規模は桁行7.5m。梁間5.8mとし、間口３間、奥行１間の身舎の前後に１間の廂をつける。床面は方形煉瓦敷で、壁は材質不明の材を積み、モルタル塗り仕上げとする。正面には開き戸が中央間に６枚、両脇間に４枚入る。小屋組は水平材を積み上げた構造。軸部や細部には装飾がほとんど施されない。2001年の修理時に小屋梁上の梁材、身舎桁、垂木など部材の多くが取り替えられており、柱も表面を削りなおしている。建物の中央１間を囲む柱のうち３本は当初材とみられ、腰高および内法（胴差位置）に仕口痕・ホゾ穴が残ることから、中央間には床を張った祭壇状の施設がしつらえられていたと復原できる。

装飾が少なく、小屋組を水平材の積み上げとする点は古式を示し、拝堂の建築年代に比べやや遡る感もあるが、ダイバイと同時期の19世紀後期の建築とみておく。（西田紀子）

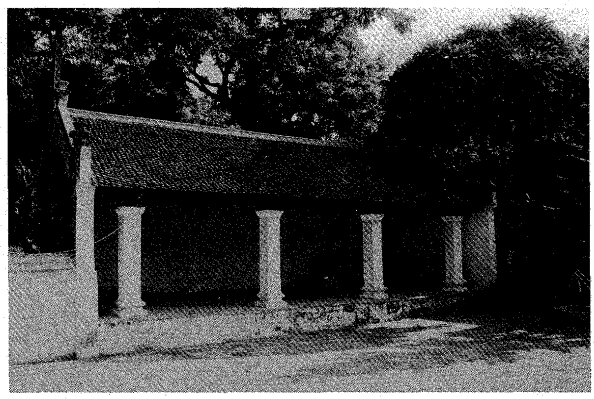


図６-337　フンフン廟　ターマック　外観

図６-338　フンフン廟　ダイバイ　外観

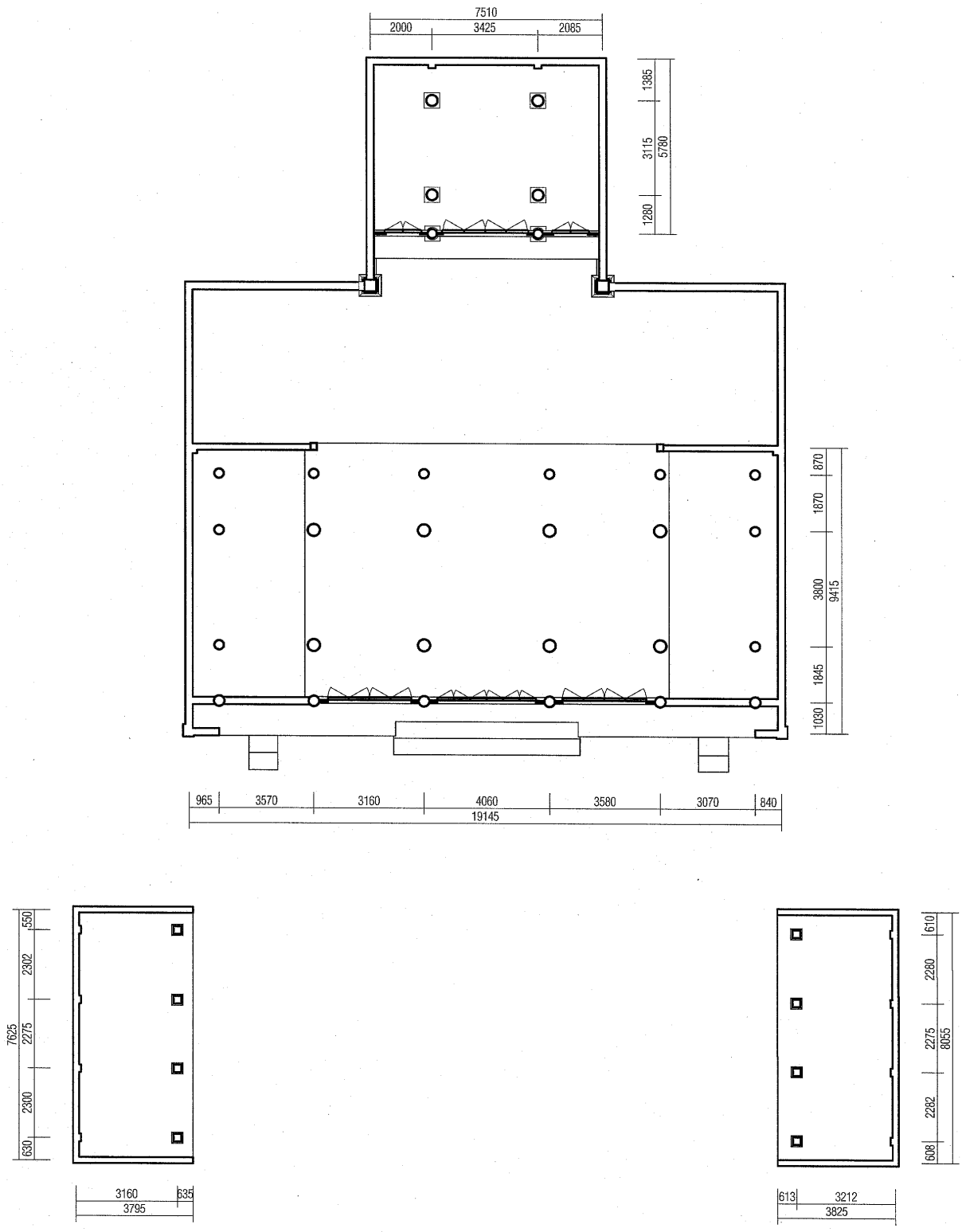


図6-339　フンフン廟　平面図　1：200

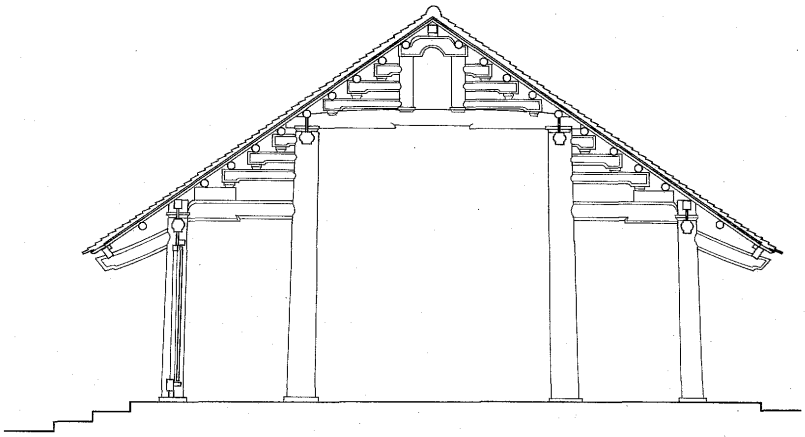


図６-340　フンフン廟　ダイバイ　断面図　1：100

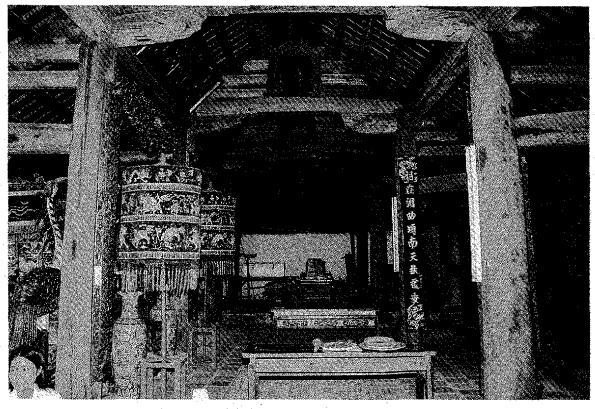


図６-341　フンフン廟　ダイバイ　内部

図６-342　フンフン廟　ダイバイ　架構

図６-343　フンフン廟　ダイバイ　隅部架構

図６-344　フンフン廟　ハウクン　外観

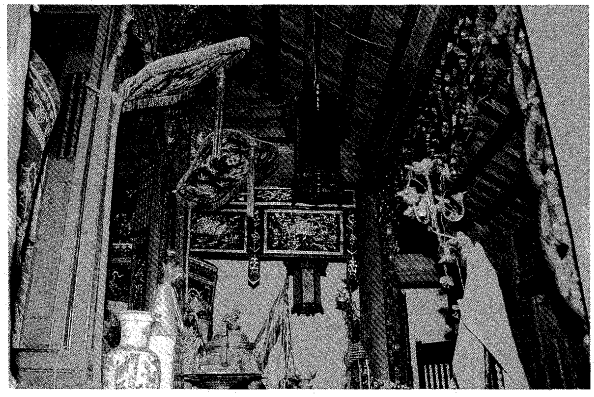


図６-345　フンフン廟　ハウクン　内部

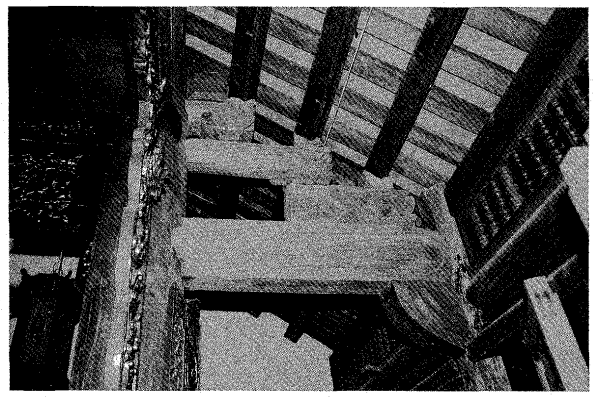


図６-346　フンフン廟　ハウクン　廂架構

(37) ゴクエン廟

カムラム集落

ゴクエン廟はカムラムの集落内に位置し、この土地出身の英雄ゴクエン（Ngo Quyen）を祀る。

廟の敷地内には、前庭をはさんで脇殿にあたる2棟のターマックが向き合う。祭りの準備や、お供え後に人々が伺候する場所である。その奥には、前殿にあたるティエンテ（Tien Te）と、奥殿にあたるチョンクン（Trong Cung）が前後に並ぶ。

ティエンテは、虹梁下の銘「嗣徳拾壱戊午」「季冬上浣吉造」から、建築年代が嗣徳11年（1858）と判明する。桁行3間、梁間2間、切妻造、シングル瓦葺で、全体規模は桁行10.6m、梁間6.3mで、前面奥行1間を吹き放ちとする。身舎の中央に祭壇が置かれる。身舎は木造円柱、廂は煉瓦積みの角柱で、身舎柱は円形の造り出し礎石を使用する。床面は方形の煉瓦敷。壁は煉瓦積み、モルタル塗りで、白漆喰仕上げとする。正面中央3間には唐戸の開き戸が、4枚ずつ入れられる。

小屋組は身舎に梁間3間の大梁をわたし、その上に梁間ごとに束と梁をかける。中央1間分は束と梁を積み重ねる。前後の梁間1間は入側筋の束と側柱筋を斜梁でつなぐ。棟木下で束と梁を鳥居形に組み上げる構造は、フンフン廟のダイバイと共通する。前の廂は斜梁でつなぐ。当初は廂の奥行が現在よりも小さかったが、中古に廂柱を立て、斜梁に継木をしての吹き放ち部分を拡大した。

2000年の修理は大規模なもので、柱と床の煉瓦全てと、小屋組の梁・束の一部、前面廂の尾垂木尻の継木も取り替えている。身舎梁、廂の斜梁には古材が一部残る。また、現在の前殿では、使用されている寸法が5㎜単位の値をとり、メートル法の寸法体系で軸部を組みなおしていると思われる。

ティエンテのように身舎内部に柱が立たない構造は、他の19世紀の建築では類例がない。堂守の話によれば、1930年頃には現状のように内部に柱が立っていなかったという。現在、大梁と床の煉瓦は取り替えられており、内部柱の痕跡は確認できないが、19世紀に立てられた民家の内部柱を20世紀に抜いている例があることから、前殿の内部柱も20世紀初めに撤去された可能性が高い。

チョンクン（奥殿）の建築年代は明らかではないが、小屋梁上の蟇股や尾垂木の彫刻は彫りが深い装飾的なもので19世紀に遡る様相を示し、前殿と同時期の建築とみられる。正面3間、奥行4間、入母屋造妻入、シングル瓦葺で、全体規模は正面5.6m、奥行9.9mである。前面に奥行1間の半屋外の空間を設け、奥を壁と建具で囲んで祭殿とする。建物の中央1間に祭壇を置き、前に机をならべる。木造円柱で、礎石上面には円形の造り出しをつける。床面は方形の煉瓦敷。正面の室境には敷居を入れ、左右1間を片開戸とする。奥殿の前方は、柱・梁に龍の彫刻が施された枠をつけて荘厳する。

小屋組は、中央1間は梁を二段積みして上部に蟇股状の材を載せて桁を渡す。左右1間は、入側柱と側柱間に繋梁を水平にかけ、梁上に彫刻を施した材を載せて桁を受ける。側柱から左右外側に尾垂木をのばし、建物の外壁上で斜梁を受ける。

奥殿も前殿同様に2000年の大修理時に煉瓦・礎石・部材の一部が取り替えられた。また、現状では、柱にはほとんど転びがなく、修理時に垂直に立て直されたものを思われる。

奥殿は、梁上の板状の材に彫りの深い彫刻をほどこすことで祭壇前を荘厳し、小規模ながら濃密な空間となっている。妻入の構造を生かし、梁間方向に空間の階層性をつけた正面性の強い建築である。柱、梁、殿内の礎石には古材が残り、梁上の彫刻や斜梁の彫刻なども19世紀の意匠を踏襲しており、ドゥオンラム村の英雄をまつる陵墓の遺構として歴史的・文化的に高い価値を有する。（西田紀子）

図6-347　ゴクエン廟　ターマック　外観

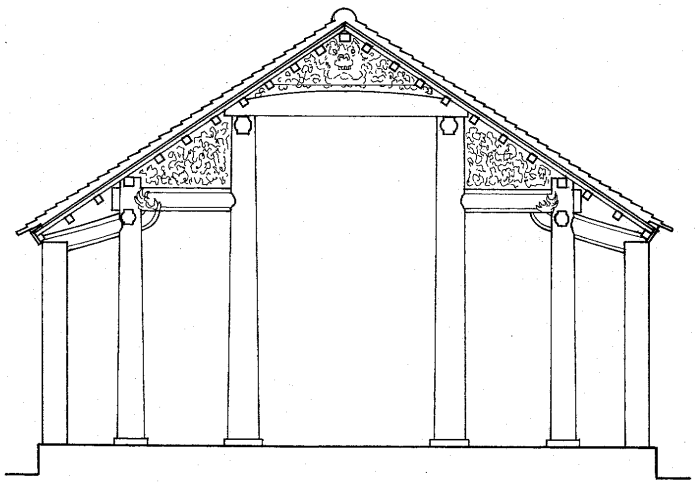


図6-348　ゴクエン廟　チョンクン　断面図　1：75

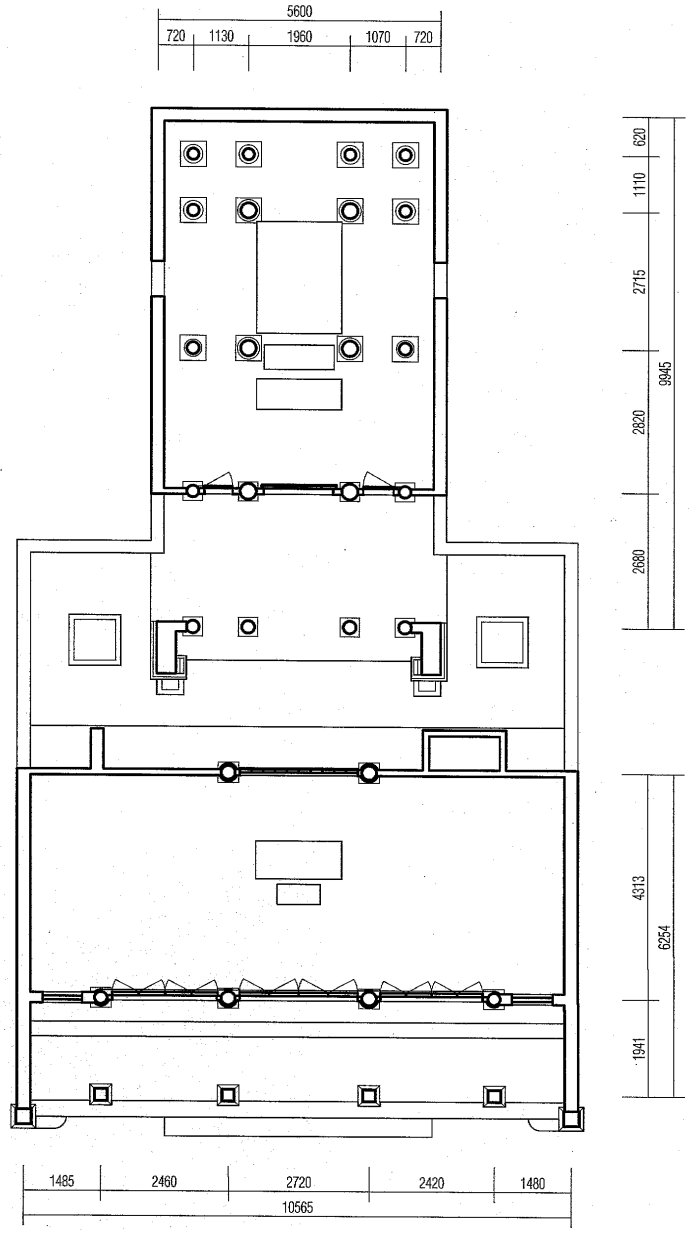


図6-349　ゴクエン廟　平面図　1：150

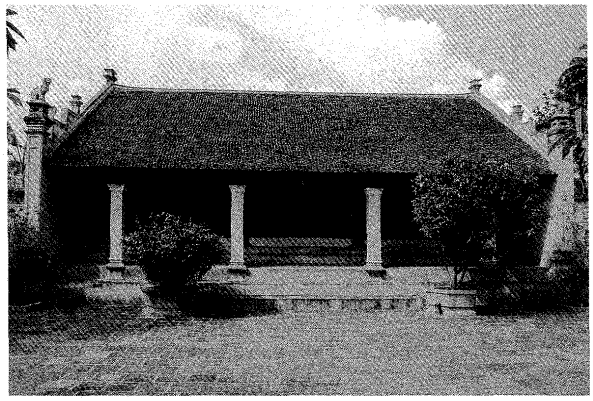


図6-350　ゴクエン廟　ティエンテ　外観

図6-351　ゴクエン廟　ティエンテ　内部

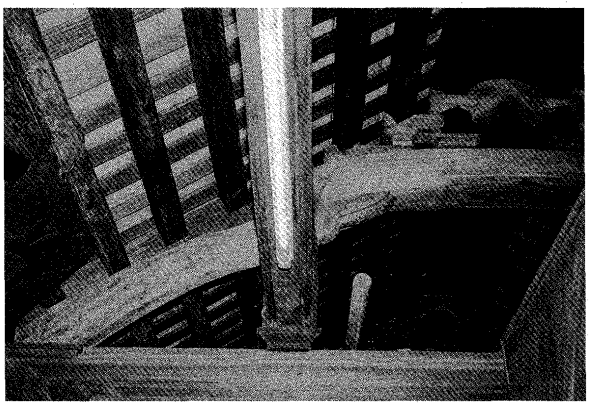


図6-352　ゴクエン廟　ティエンテ　架構

図6-353　ゴクエン廟　ティエンテ　軒先

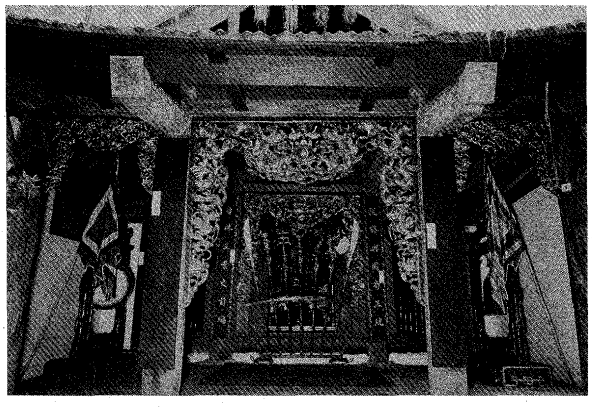


図6-354　ゴクエン廟　チョンクン　外観

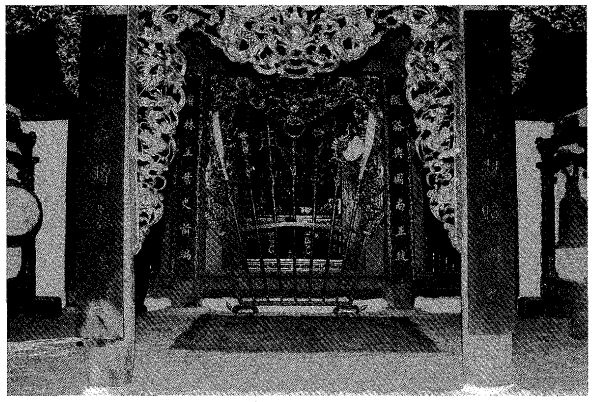


図6-355　ゴクエン廟　チョンクン　内部

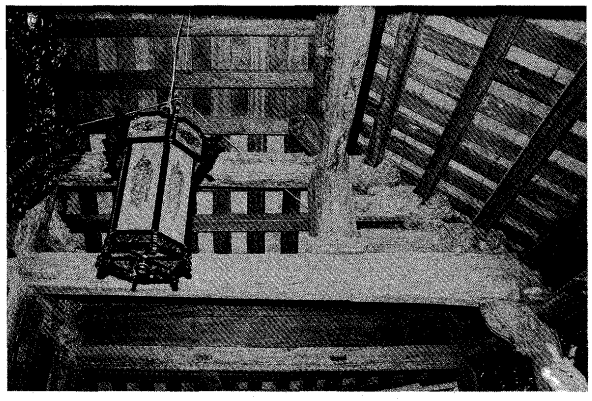


図6-356　ゴクエン廟　チョンクン　架構

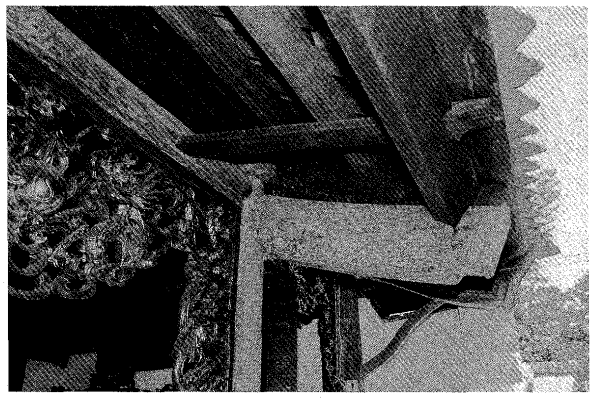


図6-357　ゴクエン廟　チョンクン　軒先